特別研究経費

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成

― 女性の役割を見据えた知の国際連携 ―

平成 22（2010）年度　評価報告書

2011 年 3 月

お茶の水女子大学
グローバル協力センター

特別研究経費

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 22（2010）年度　評価報告書　目次

はじめに

Ⅰ　事業の概要

Ⅱ　平成 22 年度の活動概要
　１．平成 22 年度の進捗状況
　２．「共に生きる」勉強会
　３．国際ワークショップ「共に生きる」
　４．アフガニスタン青年研修（女子教育）
　５．国際学生フォーラム「共に生きる」
　６．ミルズカレッジ研修
　７．公開講演会
　　７－１「共に生きる—池上彰さんに聞いてみよう」
　　７－２　公開講演会、名誉博士称号授与記念講演会
　　「共に生きる—ミリアム・ウェレ博士に聞く」
　８．「子どもと開発」研究会
　９．公開講義「共に生きる—国際協力、国際ボランティアを考える」
　１０．アフガニスタン学術フォーラム
　１１．海外調査
　　１１－１　ケニア
　　１１－２　東ティモール
　　１１－３　ウガンダ
　　１１－４　INEE 緊急教育支援にかかるミニマムスタンダード改訂版発表会
　　１１－５　INEE ニューヨーク事務所訪問

Ⅲ　外部有識者による評価コメント
　１．　西川潤博士（早稲田大学名誉教授）
　２．　池上清子博士（国連人口基金東京事務所長）
　３．　鈴木均博士（日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所　新領域研究

センター、国際関係・紛争研究グループ、グループ長代理）

Ⅳ　平成 23 年度以降の計画

Ⅴ　参考資料
　１．出版物
　　１－１　お茶の水女子大学公開講演会「共に生きる -池上彰さんに聞いてみよう-」
　　１－２　INEE 教育ミニマムスタンダード（緊急時の教育のための最低基準）2010
　　　　-準備・対応・復興-
　２．国際ワークショップ資料
　３．国際学生フォーラム資料
　　３－１　入江昭ハーバード大学名誉教授　特別記念講演　概要
　　３－２　参加者発表概要
　　３－３　参加者レポート
　４．ミルズカレッジ研修資料
　　４－１　ミルズカレッジ研修について
　　４－２　ミルズカレッジ研修レポート

事業担当者、執筆者一覧

はじめに

グローバル協力センター長　内海成治

２０１１年３月１１日の東日本大震災でお亡くなりになり、また被災された方々に対して、心からご冥福をお祈りするとともに、ご遺族ならびに関係者の方々へのお慰めをお祈りいたしております。被災され、避難所あるいは仮設住宅で過ごされている方々に対してお見舞い申し上げる次第です。

平成２２年度にお茶の水女子大学特別経費「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」が認められ、この報告書が最初の年度の報告書となります。４年間のプロジェクトですが、これまでの特別教育研究経費による活動の発展として採択されたものです。その意味でこれまでのお茶の水女子大学の国際貢献活動が評価された上での、新たな事業であると思われます。そのため初年度ではありますが、様々な事業を行うことができたと思います。一つ一つの内容は本報告に述べることになりますので、私自身の心に残るいくつかの活動の印象を述べることにしたいと思います。

２０１０年６月に池上彰さんにお出でいただき公開講演会を行うことができました。池上さんは、講演の予定を入れると急な海外取材ができなくなるので、原則として講演は行わないと言うことです。前年に南スーダンのジュバで取材に来られた池上さんとお目にかかり、一度お茶の水女子大学にお出でいただけませんかと尋ねてＯＫしていただいたのを頼りに、メールを差し上げました。初めの予定では小さい教室で学生と身近にお話ししてもらう計画でしたが、希望者が 650 人に増えたこともあり徽音堂で行うことになりました。当日、会場を見た池上さんから「話が違うよね」と一言いただきました。しかし、多くの学生さんや人々に喜んでもらえたので、私としては満足しています。その後のブックレットへの対応等、「池上さんはいい人だな」と改めて思いました。

２０１１年２月に１０人のお茶の水女子大学生と一緒に日米学生フォーラムのためヴァッサー大学に行きました。２０１１年はヴァッサー大学創立１５０周年の記念すべき年で、このフォーラムも記念のイベントの一つにしていただきました。そのため、開会式典やレセプションもよく準備していただき恐縮するくらいでした。特にフォーラムの一環として入江昭ハーバート大学名誉教授をお招きして、講演会とレセプションが行われました。尊敬する入江先生の形骸に触れ、レセプションではお隣の席に座らせていただきました。１９６０年代にケネディ大統領の下、ライシャワー博士が駐日大使とし

て来日し、日米パートナーシップを唱えられました。政治経済を下支えする重要な外交の手段として文化、学術、芸術の重要性が唱えられました。こうした外交の変化の理論的礎を築かれたのが入江先生です。４０年の時を経て直接入江先生とお話しできたことは身に余る光栄でした。また、先生はお茶の水女子大学の学生のしっかりした態度にも大いに意を強くされたようでした。

私事にわたって恐縮ですが、私は本年３月を持って定年退職いたします。しかし、グローバル協力センターの活動は大学の国際化さらには国際貢献にとって重要な働きであり、今後とも新たなスタッフによって支えられ輝きを増すことを心から願っています。

本報告書を作成するにあたり、昨年度より引き続き３名の外部有識者の方々、西川潤博士（早稲田大学名誉教授）、池上清子博士（国連人口開発基金東京事務所長）、鈴木均博士（日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所）にお話をお伺いすることができました。お忙しい中、今後の活動に重要な示唆をいただき、心から感謝いたします。

Ⅰ　事業の概要

１．事業の概要

【事業名】
「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携―」

【事業期間】
平成２２年度から平成２５年度（４年間）

【概要】
グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】
国際本部グローバル協力センターが主体となり、大学院人間文化創成科学研究科と連携して行う。

【目的・目標】
本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である、開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性がその年齢・国籍等にかかわりなく、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第２期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって、開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活

動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられる。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

【必要性・緊急性】

現在、国際社会においては、ポスト・コンフリクト地域における緊急人道支援が喫緊の課題である。特に、傷つきやすい女性や子どもに対する人道支援は最重要課題であるにも関わらず、その研究や人材育成に関する高等教育機関の取り組みは非常に脆弱である。そこで、本学を拠点として、先進国の大学と開発途上国、特にポスト・コンフリクト地域の大学、国際機関等と知的連携を構築し、緊急人道支援とそのための人材育成を行うことは、現代の女子大学に求められる重要課題であり、緊急の課題でもある。

【独創性・新規性等】

本取り組みは、本学が拠点となって、女子の高等教育機関の国際的ネットワークを形成し、開発途上国およびポスト・コンフリクト地域における国際協力、緊急人道支援の教育・研究・実践を行うことを目指している。現在、高等教育機関が連携して、女性と子どもを対象とした国際的ネットワークによる支援事業および共同研究を展開している事例はない。それゆえ、独創性および新規性を持った取り組みである。

【第２期中期目標及び中期計画との関連性】

第２期中期目標として、「世界各国・地域の国際機関・高等教育機関などと連携し、女性のエンパワーメントのための支援を強化拡充する」を掲げ、これに対応する中期計画として、「開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業を強化充実する」および「国内外の女子大学と連携して、女性のエンパワーメントに関する支援事業に取り組む」を策定している。先進国、開発途上国の高等教育機関と連携して、本事業に取り組むことで、目標の達成が可能となる。

Ⅱ　平成 22 年度の活動概要

１．平成22年度の進捗状況

本年度は初年度ということもあり、平和構築をテーマに、国内および海外の大学や関心を持つ市民、関係者が会することのできる場づくりを行い、ネットワークの基盤を作ることに心がけた。その結果、国内6大学、海外5大学とともに、ワークショップ、フォーラム、研修を4回開催し、教員、学生約80名が参加することで、大学間のグローバルなネットワーク作りの素地ができた。その他、研究会を計18回開催し、女子大学学生を中心に市民を含め、のべ約1,100名が参加するなど、平和構築に関連する関心をより深めるための機会も提供した。また、調査研究においては、国連機関、JICA、国際NGOと関係を構築しながら、計5回の調査を行い、調査結果にかかわる本を2冊出版した。さらに、積極的に関心を持った学生に対する、援助機関へのインターンの可能性についての協議を開始している。

【当初計画に対する進捗状況】

実施計画

１．国内・海外の（女子）大学とのネットワークの構築
２．日本国内における女性を中心とした市民レベルでの国際協力支援ネットワークの構築（女子大学を中心に）
３．国内および海外の大学間の国際会議の実施（担当者レベル）
４．平和構築、国際協力をテーマとして各国、各大学の教員・学生（院生）との交流と研究、支援事業に関する協議の検討
５．国際機関、援助機関や国際 NGO と連携してアジア、アフリカ、中東（アフガニスタン等）地域等における女性や子どもの課題を調査分析する。
６．国際機関、国際 NGO 等への大学生（院生）インターン派遣の打診

実施状況

１．「共に生きる」勉強会（10 月）、国際ワークショップ（12 月）、ヴァッサー大学での国際フォーラム（2 月）、ミルズ大学での研修（3 月）において、大学間における研究に関する意見交換、今後のネットワークの行動計画に関する協議の場を創出し、国内・海外の（女子）大学とのネットワークの構築を行った。
２．公開講演会（6 月、2 月）、公開講義（6 月、7 月、10 月、11 月）、アフガニスタン学術フォーラム（10 月、11 月）、子どもと開発研究会（計 10 回）を開催し、女子大学を中心とした市民レベルでの国際協力支援のネットワークを構築した。
３．国内および海外の大学間の国際会議である、国際ワークショップ（12 月）、国際フォーラム（2 月）を開催し、担当者レベルの教員、学生、国際機関関係者が会

し、意見交換を行った。

4．平和構築、国際協力をテーマとして、国際ワークショップ（12 月）、国際フォーラム（2 月）、ミルズ大学研修（2 月）において、研究発表を行い、今後の共同研究について協議した。

5．国際機関、援助機関や国際 NGO と連携してケニア調査（4 月）、東ティモール（7 月）、ウガンダ（8 月）、UNESCO 本部（11 月）、UNICEF 本部（2 月）での調査を実施し、女性や子どもの課題の調査分析を実施した。また、公開講演会（6 月）に関するブックレット『共に生きる―池上彰さんに聞いてみよう』、『教育ミニマムスタンダート』（訳本）を出版した。

6．国内の国際機関、国際 NGO 等に対し、インターン派遣の打診を開始した。

２.「共に生きる」勉強会

【目的】

激動する国際社会の中で、紛争、暴力や人権侵害といった諸問題の中で、「女性」や「子ども」が直面している状況を知り、研究、活動の両側面から取り組むべき課題を学びあい、先進国、開発途上国の女性と協力しながら「グローバル社会における平和構築の実現」を学生の立場から考えること。

【実施概要】

・日時、スケジュール

10 月 9 日（土）	
13：00〜13：20	挨拶・趣旨説明　内海成治
13：00〜14：00	オリエンテーション ・自己紹介　・グループ分け
14：00〜15：00	セッション　1　　山本理夏氏（特定非営利法人ピース 「平和構築活動の実践」　　ウィンズ・ジャパン事業責任者）
15：00〜15：15	休憩
15：15〜16：15	セッション　2　　内海成治氏（お茶の水女子大学教授） 「紛争後の平和構築と国際協力」
16：15〜16：30	休憩
16：30〜17：30	セッション 3　　澤村信英氏（大阪大学大学院 「平和構築のための研究方法」　　人間科学研究科教授）
17：30〜17：45	休憩
17：45〜18：45	学生による調査実践例の発表：東ティモール、ウガンダの事例から、お茶の水女子大学 4 年生（東ティモール:植月綾子・齊藤智美、ウガンダ:小島千尋・豊永優美）
19：00〜20：00	夕食
20：00〜22：00	グループ別課題研究「平和構築」

10 月 10 日（日）	
9：00〜11：00	グループ発表＋講評 （1 グループ 30 分×4 グループ）
11：00〜12：00	まとめと今後のグループワークについて
12：00〜	昼食
13：00〜	解散

・場所：　日本女子大学　新泉山館（目白キャンパス）
・参加者：
　関西・関東の 7 女子大学（お茶の水女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、津田塾大学、同志社女子大学、奈良女子大学、日本女子大学）の学生 18 名、教員 8 名

【成果】
　本合宿を通じて、女子大学間での学びや知識の共有により、具体的なアクションを起こしたいという学生の前向きな意識が高まった。この後数回にわたって、関東の大学グループ、関西の大学グループで、それぞれの取り組みを検討する勉強会を実施している。
　また、12 月に実施する国際ワークショップでは、この国内のネットワークを基に、海外の大学との連携による活動が行われた。

【課題】
　今後学生が持つ関心、活動への意欲を、各大学間のネットワークを活用しながら、どのように継続的に実現していくのかが課題である。

「共に生きる」勉強会
国際社会の中で 「共に生きる」 ことを考える
～平和構築のネットワークの形成～

国立大学法人お茶の水女子大学
グローバル協力センター

激動する国際社会の中で、紛争、暴力や人権侵害といった問題が取り上げられ、その中でも、〈女性〉や、〈子供〉は虐げられた状況にあります。研究、活動の両側面から、私たちが取り組まなくてはならない課題を学び合い、先進国、開発途上国の女性と協力しながら、「グローバル社会における平和構築の実現」を学生として考える会です。

日時：2010年10月9日（土）、10日（日） 1泊2日
場所：日本女子大学 新泉山館（目白キャンパス）

【対象者】
日本の女子大学で平和構築あるいは、国際協力の研究を目指す、あるいはこうした活動に取り組んでいる学生および大学院生。

【内容】
平和構築に関する講義
学生による調査実践の発表
グループ別課題研究
グループ発表

【参加校】
お茶の水女子大学（主催）／京都女子大学（予定）／甲南女子大学／神戸女学院大学／津田塾大学（予定）／東京女子大学（予定）／同志社女子大学（予定）／奈良女子大学（共催）／日本女子大学（共催）　※五十音順

【講演者および講義内容】
澤村信英氏 （大阪大学大学院人間科学研究科 教授）
「平和構築のための研究方法」
山本理夏氏 （特定非営利法人 ピースウィンズ・ジャパン事業責任者）
「平和構築活動の実践」
内海成治氏 （お茶の水女子大学教授／グローバル協力センター長）
「紛争後の平和構築と国際協力」

共催：奈良女子大学／日本女子大学

本件連絡先：国立大学法人お茶の水女子大学 グローバル協力センター
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
Tel/Fax：03-5978-5546
E-Mail：info-cwed@cc.ocha.ac.jp
担当：桑名、上中、駒田

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

３．国際ワークショップ「共に生きる」

―グローバル社会における平和構築の大学間ネットワークの形成―

【目的】

激動するグローバル社会において、世界の（女子）大学の教員・学生が共同で、研究、活動両面から平和構築に関する課題に取り組む事で、大学間ネットワークを形成することを目的とする。事業１年目となる、２０１０年度に、共に活動する場を形成するためのワークショップを行い、このワークショップを足掛かりとして、次年度以降の共同調査・共同研究を立ち上げることを目指した。

【実施概要】

・日時：２０１０年１２月６日～１２月９日

・スケジュール（詳細は参考資料　を参照）：

２０１０年１２月６日　オリエンテーション　（お茶の水女子大学）
２０１０年１２月７日　ワークショップ　（お茶の水女子大学）
２０１０年１２月８日　移動日　（奈良女子大学）
２０１０年１２月９日　ワークショップ　（奈良女子大学）

・開催場所：お茶の水女子大学、奈良女子大学

・参加者：世界及び日本の（女子）大学で平和構築あるいは国際協力の研究を行っている教員１２名および学生１８名（大学院生を含む）。

（対象大学）

お茶の水女子大学	学生３名、教員２名
奈良女子大学	学生３名、教員２名
甲南女子大学	学生２名、教員１名
神戸女学院	学生２名、教員１名
同志社女子大学	学生２名
日本女子大学	学生１名、教員１名
ヴァッサー大学（米国）	学生１名、教員１名
ケニヤッタ大学（ｹﾆｱ）	学生１名、教員１名
フィリピン女子大学（ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）	学生１名、教員１名
ミルズ大学（米国）	学生１名、教員１名
梨花女子大学（韓国）	学生１名、教員１名

【内容】

国際社会の中で、平和構築・平和構築活動に関しての期待は増える一方で、日本人の人的協力は十分な状況ではない。特に戦争、紛争の被害は、特に女性や子どもに対して

大きく、平和と安全を脅かすものとなっている。国連安保理にて、２０００年１０月３日に採決された、「女性、平和、安全保障」に関する、国連安全保障理事会決議１３２５からも、紛争後の平和構築・平和構築活動において、女性、子どもに対する支援また、当事者であるこの活動への女性のプレゼンスが平和構築活動において重要であり、そのジェンダー的視点は益々必要となって来ている。日本の女子教育のパイオニアとして、お茶の水女子大学では、奈良女子大学との共催で、平和構築分野の人材育成及び、人材育成に資する情報交換やネットワーキングの場として、「国際ワークショップ（共に生きる）―グローバル社会における平和構築の大学間ネットワークの形成―」を開催した。国際ワークショップでは、平和構築あるいは国際協力の研究を行っている教員１２名および　こうした活動を目指す学部生および大学院生１８名が集まり、１２月６日から１２月９日の間、東京、奈良の２拠点で、ワークショップを行った。

参加者が一同に会するのは、初めてであったため、初日はオリエンテーションを行い、参加者同志の自己紹介、東京近郊のフィールドトリップを通じて、参加者間の相互のコミュニケーションを図り、ワークショップでより忌憚ない意見交換を出来る環境を整えた。翌日のワークショップでは、２部構成にてプログラムが組まれた。まず、第１部には、国際的な平和構築をめぐる状況、特に日本人の人的協力の取組みに関し、情報や知見の共有をするために、David Leheny 氏(プリンストン大学教授)より「Japanese　Aid and Global Development」に関して、長瀬　慎二氏(国際ボランティア東京事務所連絡調査官)より「国際ボランティアの平和構築」に関して、阿部俊哉氏(JICA 公共政策部平和構築・貧困削減課課長)より「JICA の平和構築支援」に関して講義があった。その講義を受け、第２部では、内海成治教授がファシリテーターとなり、参加者である国内外の教員、学生が、それぞれの平和構築活動に関しての発表を２日間に亘って行った。その後、グループに分かれ、平和構築に関する今後のリサーチとアクションに関するグループ発表を行った。

【成果】

国際援助機関、国際 NGO 等の講義により、平和構築への知見、関心を深め、特にジェンダー的視点を持つ事の重要性が確認され、平和構築分野への人的育成に大きな成果があった。平和構築のテーマに基づいて、ワークショップという形で議論することで、国籍、大学の垣根を超え、まさにグローバルな視点で考え、意見交換を積極的に行うことができた。

【課題】

今回のワークショップへの準備期間が短かったため、平和構築活動という広いテーマに関して、参加者同士がそれぞれの経験や研究成果等アイディアを発表する場となった。次年度、国際共同調査が企画されているが、最大効果を引き出すためにも、共通のテー

マをより明確にし、事前に勉強会を重ねることで、更に成熟した「知の連携」を構築していくことが期待される。

４．アフガニスタン青年研修事業（女子教育）

【目的】

① アフガニスタンにおける女子教育の重要性の理解を深める
② 日本の男女共同参画についての理解を深める
③ 現地の事情に即した教授法（教材研究）を実施することができる
④ 日本の戦後復興と経済発展を知り、教育を通してのアフガニスタンの復興活動について具体的なビジョン構築を支援する
⑤ 日本の青年たちとの交流を通して、アフガニスタンの現状を伝え、アフガニスタンの国造りについて話し合うことにより相互理解を深める

【実施概要】

・研修期間：2011 年 1 月 14 日（金）～2011 年 1 月 26 日（水）
・青年研修員人数　19 名（全て女性）
・研修日程表：別紙（ページ）参照
・場所：お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学
・実施：五女子大学コンソーシアム

【成果】

今年は、「学生との意見交換」と「教授法を学ぶ」ことの 2 点を重視し、研修を実施した。研修員は、学生と現在の日本の状況やアフガニスタンの状況、教育の問題について語り合う機会を得た。また、教授法に関しても初等教育、中等教育の分野から多様な内容に関して学ぶことができ、大変意欲的に研修に参加していた。

研修員へのアンケートによれば、本研修での到達目標には、大半が十分達成できたと回答していた。授業の効率性を高めるために、身近にある資源を活用して教材を作っていたことや教師と生徒との関係が信頼関係によるものであること、また教師が生徒に心を配りながら授業を進めていることなどを知り、その点からも到達目標１の「アフガニスタンでの女子教育の改善に対する知識を得る」、到達目標３「現地に即した教授法（教材研究）を実施することができる」は、達成されたといえるであろう。

到達目標２の「日本の男女共同参画についての理解を深める」においても、男女共学の学校の見学や、女性のエンパワーメントフォーラム、国際シンポジウムを通じて、日本の現状から刺激を受け、議論を深めることができた。

また、到達目標４の「教育を通じて、アフガニスタンの復興活動（国造り）について研修員自ら具体的なビジョン構築ができる」という項目に関しても、「勉強会を開き、日本で得た経験を他の教育従事者に伝授し、教員全員で教育改善に貢献されるように

したい」というコメントがあり、研修を通して、研修員各々が問題意識を具体化し、アクションプランを構築していったと思われる。

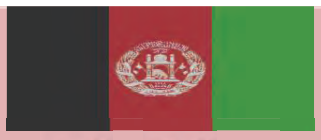
最後に「日本の青年たちとの交流を通じて、アフガニスタンの現状を伝え、アフガニスタンの国づくりについて話し合うことにより相互理解を深める」という点については、インターンの学生との交流や研修を学生と共に受けることによってお互いの国の事情について意見交換をすると共に、研修を一緒に作り上げるという意識も生まれていた。19 人が十分達成できたと回答したことからも研修の目標は達成できたと考える。

【課題、学び】

・青年研修では、2 週間の日程であるため、他機関に研修先をお願いすることはなかった。しかし、企業現場の見学、理科教員からは実験体験の希望が出された。また、期間を延ばしてほしいとの希望も多かった。研修先を拡げたり、日程などについては、今後の課題としたい。

・五女子大学での受け入れは、「五女子大学ならでは」の丁寧さ、配慮、ホスピタリティーを実感し、研修員が研修に集中できるような心遣いが細部まで見受けられた。特に、昼食のサービスはアフガニスタン料理を研究し、材料の吟味も行われた。研修員にはうれしいひとときで、好評であった。

・アフガニスタンの女性たちは、小学校 4 年生以来、男女別学の教育を受けているためと思われるが、男性がいるときには発言に偏りがあり、内容も異なり、多くに場合には発言しなくなることを、五女子大学コンソーシアムのこれまでの研修から私たちは学んだ。今年度の研修では、2 名の女性研修監理員を得られたことは、大きな成果を得るための必要十分条件を満たしたものと思われる。



第3回 アフガニスタン復興支援 国際シンポジウム
「これからの女性・子どもへの支援」

日時：2011年1月26日（水） 14:00～16:30
会場：お茶の水女子大学
共通講義棟 2-201 入場無料
【メールにて事前申し込み制】 info-cwed@cc.ocha.ac.jp

＊＊＊

第1部 基調講演 「これからの女性・子どもへの支援」
平林国彦（UNICEF 国連児童基金 東京事務所代表）

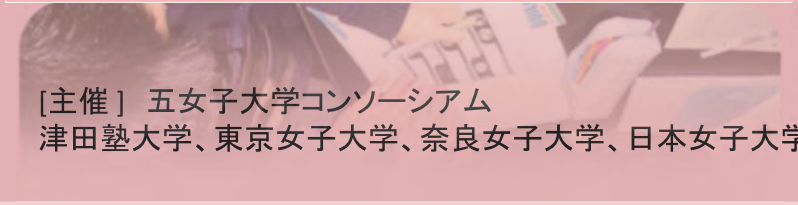
第2部 パネルディスカッション 「日本で学んだこと、今の私」
ファシリテーター：藤枝修子博士（お茶の水女子大学名誉教授）
パネリスト：過去の国費留学生4名

五女子大学コンソーシアムでは、過去8年にわたりJICAと共に女子教育研修を実施し、約100名のアフガニスタン女性教員の研修を行ってきました。

今年も1月に20名のアフガニスタン女性教員を受け入れます。この機会に女性と子どもの支援について皆様と一緒に考えたいと思います。

第1部ではUNICEFアフガニスタン事務所に駐在され、支援活動の経験がご豊富な平林博士をお招きし、第2部では、国費留学生として日本で学んだ経験のあるアフガニスタン教員をお招きし日本での学びと現在の活動についてお話していただきます。

多くの方のご参加を心からお待ちしております。



[主催] 五女子大学コンソーシアム
津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、お茶の水女子大学

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

［お問合せ］お茶の水女子大学グローバル協力センター
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL&FAX 03-5978-5546
Mail info-cwed@cc.ocha.ac.jp

５．国際学生フォーラム「共に生きる」

―グローバル社会における平和構築の大学間ネットワークの形成―

【目的】

グローバル社会における平和構築の大学間ネットワークの形成を目指した取り組みとして、これまで長い間交流のあるお茶の水女子大学とヴァッサー大学との交流による学生間の意見交換の場を通じ、平和構築の基礎を学ぶことを目的として企画された。なお、本国際学生フォーラムはヴァッサー大学創立１５０周年の記念行事の一環となった。

【実施概要】

・日時：２０１１年２月１０日(木)～１７日（木）
・開催場所：ヴァッサー大学（米国　ニューヨーク州）
・参加者：平和構築あるいは国際協力の研究を目指す、お茶の水女子大学の学部生１０名とヴァッサー大学の学部生１０名（内１名辞退）の１９名。

【内容】

国際学生フォーラム当日は、シンポジウム形式で行われ、２部のプログラム編成で行われた。第１部では、ヴァッサー大学から Qui 教授の「従軍慰安婦問題」、お茶の水女子大学からは内海教授による「マサイ族への教育調査」の講義を受け、戦争が女性に与えた苦痛の歴史、また、紛争後の子どもへの平和構築活動としての教育の現状に関する研究成果の講義は、平和構築・平和構築活動においての、女性と子どもの存在の大切さを訴えた内容であった。講義後、シンポジウム形式で２日間に亘り、Kennet 教授、翌日は、Bjork 教授をモデレーターに、学生が「平和構築活動」をテーマとした研究成果および活発な取組みや関心分野についての発表を行った。シンポジウムでの発表に向けては、専門外の学生も多く居た為、発表レポートを作成し、内海教授の指導の下、推敲を重ねた。国際学生フォーラム直前には TV 会議システムにて、自己紹介と、発表内容の概要の紹介をした。

第２部では、発表を受けての講評および、自由討議を行い、活発な意見交換を行い、フォーラム（シンポジウム）を閉じた。

２日間に亘るシンポジウムを締めくくる最終プログラムとして、入江昭ハーバード大学名誉教授による「The Making of a Trans-Pacific Partnership」をテーマにした特

別講義が行われた。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）締結等が事例に上げられ、従来の国家間の国際連携の動きに加え、非政府アクターによる交流の影響力が加わる傾向が強いというグローバル社会の特徴が説明され、パートナーシップの構築や平和な未来の創造においては、歴史を学ぶことが不可欠であるという事が講義された。平和構築における相互理解の重要性や、非政府アクターによる交流の影響力に関しての講義は、学生達の今後の関心分野を広げるにあたっての応援メッセージとなった。（詳細はⅤ参考資料３を参照）

【成果】

本学からの参加者は専門外の学生も多くいたが、選抜された学生であることもあり、「平和構築」に関して意見交換をし、問題意識を共有することで、広範囲で抽象的なテーマを個人の中に落し込み、具体的に実感することが出来ていたように思われた。参加した学生にとっては、互いの地域・国際貢献活動への意識の国境を越えた普遍性を確認し、それぞれの活動に刺激を受ける場となった。平和構築活動に興味がある本学の学生にとって、ボランティア大国である、米国の学生の活発な活動、情報に刺激を受け、今後この分野での活動への足掛かりとなった。本フォーラムに参加して、世界の女性と子どもへの支援を行うための意識が高まったという効果が双方の学生から聞かれた。国際学生間での率直な意見交換を通じて、更なる強い信頼関係に基づいた

ネットワークの構築を行う貴重な機会となった。（詳細はⅤ参考資料３を参照）

【課題】

参加学生が、今後この分野でのグローバルな活動を展開するための人的交流、異文化理解、異文化コミュニケーション等、平和構築の基礎を学び、その素地を整え得る、貴重な機会であった。ただ、シンポジウムが開催された日程は、受入れ側のヴァッサー大学にとって、学期中であり、多くの参加学生が授業のため途中退席をしなくてはならない場面もあり、議論が表面的なものになってしまった感も否めなかった。

また、今回のテーマが平和構築に対する、個人の活動、感想、希望等、広範囲であったために、目的が定まらず、踏み込んだ議論を展開し難かったという側面があったように思われる。お茶の水女子大学からの参加学生の中からは、テーマを絞った上で、もう少し勉強をする機会を持ちたかったとの意見があった。

今後、このシンポジウムを通じてそれぞれの学生に芽生えた問題意識や現地で築いたネットワークを、グローバル協力センターとしてどのようにフォローアップし教育的効果を上げていくのかが、今後の課題であると思われる。

６．ミルズカレッジ研修

【目的】

激動するグローバル社会において、世界の（女子）大学の教員・学生が共同で、研究、活動両面から平和構築において取り組むべき課題を検討するにあたって、日本の教員、学生が米国ミルズ大学を訪問し、日米の教員、学生の交流の場を設ける。今回の訪問は、2010 年 12 月に開催された国際ワークショップでの議論を受けて、本ワークショップに参加した教員・学生が中心となり、ミルズ大学との共同研究計画について具体的に議論するために企画された。

【実施概要】

・スケジュール、内容

日付	スケジュール
2 月 28 日	拒食症に関するワークショップに参加
3 月 1 日	授業参観：”Ethnic Studies” by Prof. Margo Okazawa-Rey Prof. Okazawa、内海先生を囲んで打ち合わせ Institute for Civic Leadership　のメンバーと安全保障やアメリカにおける政策実現に関する討論会に出席 “Spirit Behind Social Justice”の学生メンバーとの交流会
3 月 2 日	ミルズカレッジ学長、副学長への表敬訪問 授業参観 A：”Developing Nations” By Prof. Martha Johnson 授業参観 B：”Comparative Ethnic Literature” By Prof. Vivian Chin 授業参観　：”Theories of Race and Ethnicity” By Prof. Sudbury 日本における平和の問題～沖縄を事例として～ By Prof. Okazawa Asian Pacific Island Sisterhood Alliance メンバーと会食
3 月 3 日	Model United Nations Presentation 参加学生と模擬国連に関するディスカッション By Ms. Amy Duong Excursion to University of California, Berkeley

3 月 4 日	ミルズカレッジ　出発 De Young Museum 見学
3 月 5 日	サンフランシスコ、多文化社会へのフィールドワーク （グループに分かれて自由行動）
3 月 6 日	日本に向けて出発
3 月 7 日	日本着

・開催場所：
・参加者：お茶の水女子大学　教員 1 名、学生 2 名
　　奈良女子大学　学生 1 名
　　甲南女子大学　教員 1 名、学生 1 名
　　同志社女子大学　学生 1 名
　　神戸女学院大学　学生 1 名　　（計 8 名）

【成果】

ミルズカレッジでは、熱心に授業を受け、勉強する学生の姿勢に刺激を受けると共に、本事業のテーマである「グローバル社会における大学間の平和構築ネットワークの創成」にもとづき、ミルズカレッジの学生や教員と日米の安全保障の問題や平和構築に関する政策立案に関して意見交換を行った。また、ミルズカレッジのご配慮により、平和構築やエスニックグループに関する講義を聴講する機会も得ることができた。

参加学生は、全て英語での議論や聴講に戸惑いながらも、グローバル社会で抱える貧困や紛争の問題、多民族多文化社会の課題について考えさせられたようである。特に積極的に活動を行うミルズカレッジの学生に触発された部分は大きかったようだ。Dr. Margo の講義で取り上げられた沖縄の基地問題や平和に関して、「自分は何をすべきか」について各々が改めて問題意識を整理する必要性を感じたようである。

世界の「女子大学で学ぶ学生」が国際社会に向けて、何をすべきかを互いに考える機会を得たことは、「平和構築」のネットワークを日本国内に、世界に広げることにつながった。

【課題】

参加学生と話し合い、スタディグループを結成し、次年度は本研修参加者を核に新たなメンバーを増やし、世界の女性による「平和構築」ネットワークを創成していくための方策を具体化する必要がある。

７．公開講演会

７－１「共に生きる―池上彰さんに聞いてみよう」

【目的】

本学では「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」をテーマに、世界の困難な地域における女性や子どもへの支援について取り組んでいる。

その一環として、現代において世界の人々や子ども、それも暮らしの困難な地域の子どもを考えたときに「共に生きる」とはどういうことなのかを、池上彰氏にご講演いただいた。本公開講演会は、教員、学生のみならず地域の皆様にも広く参加していただき、世界の子どもや人々と「共に生きる」ことを考える機会として企画したものである。

【実施概要】

・日時：2010 年 6 月 16 日（水）　14：30～16：30

・場所：お茶の水女子大学　徽音堂

・内容：

第１部：講演「共に生きるとは」　池上彰氏

第２部：「池上彰さんに聞いてみよう」

ファシリテーター：榊原洋一教授

回答者：池上彰氏

質問者：お茶の水女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、甲南女子大学の学生

・概要：

ジャーナリストの池上彰氏にご登壇いただき、本学グローバル協力センター主催、奈良女子大学、日本女子大学、甲南女子大学共催による公開講演会「共に生きる―池上彰さんに聞いてみよう」を開催した。

第一部では「共に生きるとは」というテーマのもと、日本の開発援助と国際社会の中での援助問題について池上氏にご講演いただいた。

また、第二部では「池上彰さんに聞いてみよう」というテーマで、本学の榊原洋一教授がファシリテーターとなり、本学はじめ、奈良女子大学、日本女子大学、甲南女子大学の学生が、現代のグローバル社会の中で「共に生きる」ための様々な課題について、日常の研究や活動の中で疑問に思っていることを池上氏に伺った。激動の現代社会の中で、共生社会を築き上げるために、今、学生が何をすべきかについてのメッセージをいただいた。

【成果】

本公開講演会には、656 名に上るご参加を学内外からいただき、「これからの人生の中で失っては困るもの（家族、友人、仕事など）を出来得る限り増やしてください。そこからしか平和な社会は生まれません。」との池上氏の最後のメッセージに、平和構築の原点を改めて考え直す機会となった。

お茶の水女子大学 公開講演会

「共に生きる－池上彰さんに聞いてみよう」

お茶の水女子大学では2010年度から「グローバル社会における平和構築のネットワーク形成」をテーマに、世界の困難な地域における女性や子どもへの支援について考えています。
その一環として、現代において世界の人々や子ども、それも暮らしの困難な地域の子どもを考えたときに「共に生きる」とはどういうことなのかを、池上彰さんにお話していただきます。

【講師】

池上　彰（いけがみ あきら）氏

【プロフィール】

1950年８月９日生まれ、長野県松本市出身。
1973年にNHKに記者として入局。松江放送局、広島放送局呉通信部を経て、東京報道局社会部にて警視庁・文部省などを担当。
その後、ドキュメンタリー番組の制作にも携わる。
1990年から『ニュースセンター845』、1991年からは『イブニングネットワーク』のキャスターとなり、1994年より『週刊こどもニュース』にニュースに詳しい「おとうさん」役として出演。編集長兼キャスターを担当する。
2005年３月に独立。現在フリージャーナリスト。
テレビ朝日系列毎週水曜日20時からの「池上彰の学べるニュース」出演の他、日本テレビ系列の朝の「ズームインSUPER」金曜日レギュラー解説者。

【主な著書】

『そうだったのか！現代史』、『そうだったのか！日本現代史』、
『そうだったのか！現代史　パート２』、『そうだったのか！アメリカ』、
『そうだったのか！中国』（以上いずれも集英社文庫）
『伝える力』（PHPビジネス新書）
『わかりやすく＜伝える＞技術』（講談社現代新書）
『日本が100人の村だったら』（マガジンハウス）、他

日 時：2010年 6月16日(水) 14：30～16：30

場 所：お茶の水女子大学 徽音堂【会場変更】

内 容：第１部　講演「共に生きるとは」池上 彰氏
第２部　「池上彰さんに聞いてみよう」

ファシリテーター	榊原 洋一教授（お茶の水女子大学）
回答者	池上 彰氏
質問者	お茶の水女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、甲南女子大学、他

参加費無料・事前申込み制　　※当日のお申込みも受付けます。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

主 催：お茶の水女子大学グローバル協力センター
共 催：奈良女子大学、日本女子大学、甲南女子大学

７－２　公開講演会、名誉博士称号授与記念講演会
「共に生きる―ミリアム・ウェレ博士に聞く」

【目的】

ケニアでの青少年活動や保健医療活動の分野での先駆者であるミリアム・ウェレ博士（2008 年第 1 回野口英世アフリカ医学賞を受賞）に名誉博士称号を授与し、記念講演会を開催した。暮らしの困難な地域で「共に生きる」を実践されているウェレ博士によるご自身の活動やボランティア活動への思いを講演いただき、「共に生きる」社会への実践を考える場とする。

【実施概要】

・日時：2011 年 2 月 21 日（月）　14：00～16：00
・場所：お茶の水女子大学　共通講義棟 2－201
・内容：
　第 1 部：講演「共に生きる、ボランティア活動を考える」ミリアム・ウェレ博士
　第 2 部：「ウェレ博士に聞いてみよう」
　　ファシリテーター：森臨太郎准教授（東京大学医学部）
　　回答者：ミリアム・ウェレ博士
　　質問者：お茶の水女子大学、東京大学の学生
・概要：

第 1 部では、ウェレ博士から、紛争の多いアフリカの平和を実現するために、コミュニティや市民の連帯を通じた、日本をはじめとするグローバルなネットワークの構築が不可欠であることが講演された。

また第 2 部では、学生から女性としての役割、コミュニティからの活動の重要性等に関する数々の質問がなされ、活発な議論が行われた。

【成果】

本講演会には学内外から約 70 名のご参加をいただき、「共に生きる」社会実現の第一歩として、アフリカと日本の間の温かい連帯を感じさせる会となった。今回のウェレ博士への称号授与を、本学のさらなる国際協力活動の発展の礎としたい。

名誉博士称号授与記念講演会

「共に生きる―ミリアム・ウェレ博士に聞く」

日時：2011年2月21日（月） 14時～16時

会場：お茶の水女子大学　共通講義棟2号館201

入場無料　事前申し込み制　info-cwed@cc.ocha.ac.jp

第1部　講演　「共に生きる、ボランティアを考える」ミリアム・ウェレ博士

第2部　「ウェレ博士に聞いてみよう」

ファシリテーター　森臨太郎准教授（東京大学大学院医学系研究科）

質問者　学生（お茶の水女子大学　他）

お茶の水女子大学では「グローバル社会における平和構築のネットワーク形成」をテーマに世界の困難な地域における女性や子どもの支援の研究と実践を行っています。

この度、お茶の水女子大学は、ミリアム・ウェレ博士に名誉博士号を授与いたします。その称号授与を記念して、ウェレ博士にご自身の活動やボランティア活動への思いを語っていただきます。

ウェレ博士はコミュニティに立脚した保健サービスの提供、HIV/AIDSとの継続的な戦い、ウジマ財団（NGO活動）での功績から2008年に第1回野口英世アフリカ医学賞を受賞されました。また野口賞の賞金（1億円）によってケニアでの青少年センターの建設を予定しているなど、まさに「共に生きる」を実践され、活躍されている方です。

平和構築やボランティアへの理解を深めるまたとない機会ですので、多くの方のご参加を心からお待ちしております。

ミリアム・ウェレ博士

1940年　ケニア生まれ
元ナイロビ大学医学部長
2008年　第1回野口英世アフリカ医学賞受賞
ケニア国家エイズ対策委員長

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

主催　お茶の水女子大学　グローバル協力センター

8.「子どもと開発研究会」第 4 回～第 11 回

【目的】

国際開発における子どもの問題を、教育の分野だけではなく、広い視野で検討するため、「子どもと開発研究会」を 2010 年 1 月から開催。子どもと開発の問題について、研究者、実践者、学生が活発に議論する場を提供する。

【実施概要】

（※場所はすべてお茶の水女子大学第 4 会議室、第 1 回～第 3 回は平成 21 年度に実施）

回	日付	タイトル	講師
第 4 回	2010/04/23	「東南アジアにおける EFA 推進への取り組みとポスト EFA に向けた展望—教育の質的向上に対するフィリピンの試み—」	上智大学教授　北村友人氏
第 5 回	2010/05/31	「ジェンダーと開発—メコン川流域(GMS)における人身取引—」	国際協力機構（JICA）国際協力専門員　田中由美子氏
第 6 回	2010/07/02	「JICA の子どもへの支援—教育協力と保健協力—」	国際協力機構（JICA）人間開発部長　萱島信子氏
第 7 回	2010/07/30	「ケニアで小学校を作る—ムインギ県での活動—」	CanDo（アフリカ地域開発市民の会）ナイロビ事務所調整員　景平義文氏

第 8 回	2010/10/01	「ラオスにおける教育制度改革の動向と今後の課題―初等教育の普遍化をめざして―」	神戸大学准教授 乾美紀氏
第 9 回	2010/10/15	「若者による公教育―伝統的徒弟制度間の渡りと技能形成―ガーナ国クマシ県の事例」	名古屋大学准教授 山田肖子氏
第 10 回	2010/11/15	「ケニアの教育と子ども」	大阪大学教授 澤村信英氏
第 11 回	2011/02/23	「アジア開発銀行の教育支援」	アジア開発銀行独立評価部主席評価専門官 廣里恭史氏

９．公開講義

「共に生きる―国際協力、国際ボランティアを考える」

【目的】

世界の困難な地域の子どもや女性への支援の研究を通じて「共に生きる」ことを考える場を作るため、世界の様々な地域で実践・研究に携わってきた４名の方々を講師に招き、「国際協力、国際ボランティア」を主題とした年間４回の公開講義を実施した。学生や院生をはじめ、地域の方々にも参加いただき、大学と市民がつながる場を提供する。

【実施概要】

・日時：2010 年 6 月 16 日（木）、7 月 29 日（木）、10 月 28 日（木）、11 月 25 日（木）
14：00～15：30

・場所：お茶の水女子大学 大学本館 2 階第 1 会議室、及び音羽中学校 管理棟演習室 2

・内容：

第１講　「国際協力とは何だろう―アフガニスタンから」
講師：内海成治氏（お茶の水女子大学教授）

第２講　「つながることにより豊かになる―コーヒー・トレードと東ティモール」
講師：阿部健一氏（総合地球環境学研究所教授）

第３講　「私の歩いた東南アジア―島と海と森」
講師：村井吉敬氏（早稲田大学アジア研究所客員教授）

第４講　「国際緊急人道支援とは何だろう」
講師：桑名恵氏（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）

村井吉敬先生（早稲田大学）桑名　恵（お茶の水女子大学）

【成果】

本公開講義には、全 4 回という講義スタイルにも関わらず各回約 40 名のご参加をいただいた。世界の困難な地域における女性や子どもたちのために、私たちがどのように関わっていくべきか、「共に生きる」とはどのようなことか等を地域の方々とともに考える機会となった。

お茶の水女子大学　公開講義

「共に生きる
ー国際協力、国際ボランティアを考えるー」

お茶の水女子大学では、世界の困難な地域の子どもや女性への支援の研究を通じて「共に生きる」ことを考える場を作っていきたいと思います。
この度、「国際協力、国際ボランティア」を主題とした年間４回の公開講義を企画しました。世界の様々な地域で実践・研究に携わってきた４名の方々を講師に招き、少人数のゼミ形態（３０名程度）にて、地域の方々、学生・院生との対話の機会を設けたいと考えています。
学生や院生の他に地域の市民の皆様に受講していただき、大学と市民が繋がる学問の場となればと思います。

日時：6月24日(木)・7月29日(木)・10月28日(木)・11月25日(木)
14：00～15：30

場所：お茶の水女子大学　第1会議室（予定）

講義日程及び内容：

第1講　6月24日（木）
テーマ「国際協力とは何だろうーアフガニスタンから」
講師：内海　成治（お茶の水女子大学教授）

第2講　7月29日（木）
テーマ「つながることにより豊かになる
ーコーヒー・トレードと東ティモールー」
講師：阿部　健一（総合地球環境学研究所教授）

第3講　10月28日（木）
テーマ「私の歩いた東南アジアー島と海と森」
講師：村井　吉敬（早稲田大学教授）

第4講　11月25日（木）
テーマ「国際緊急人道支援とは何だろう」
講師：桑名　恵（お茶の水女子大学客員研究員）

事前申込制（先着30名　第1講申込期間：5月31日～6月18日まで　裏面参照）
受講料：無料

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

主催：お茶の水女子大学　グローバル協力センター

１０．アフガニスタン学術フォーラム

【目的】
アフタニスタンへの理解を深めることにより、特に困難な状況における女性や子どもたちに、私たちがどのように関わっていけるかを考える場として、アフガニスタン学術フォーラムを全２回開催。

【実施概要】
・第1 回（10 月8 日）お茶の水女子大学第5会議室
「アフガニスタンの歴史・文化と教育」
前田耕作氏（和光大学名誉教授・アフガニスタン文化研究所所長）
・ 第2 回（11 月19 日）お茶の水女子大学第5会議室
「アフガニスタン：対周辺国関係と復興支援を取り巻く環境」
鈴木均氏（JETRO アジア経済研究所 新領域研究センター国際関係・紛争研究グループ グループ長代理）

アフガニスタンに関わる援助機関・研究機関関係者に多く参加していただきました。

前田耕作先生（アフガニスタン文化研究所）

鈴木均先生（アジア経済研究所）

１１．海外調査

１１－１　ケニア

【目的】

ケニアにおいては 2008 年の大統領選挙後の騒乱により、民族間の争いが再燃した。それは教育の世界にどのような影響を与えているか、また、小学校の無償化政策後 10 年を迎え最近の状況と伝統的社会における無償化政策の影響も検討することを目的としてケニア現地調査を行った。

【実施概要】

・調査期間：2010 年 4 月 30 日～5 月 11 日
・調査地：ナイロビ、ナロック県マオ地区
・調査者：内海成治　お茶の水女子大学教授
　　澤村信英　大阪大学人間研究科教授
　　佐川朋子　お茶の水女子大学文教育学部学生
　　伊藤瑞希　大阪大学人間科学部学生
・日程
　2010 年 4 月 30 日　日本発
　　5 月 1 日　ナイロビ着
　　5 月 2 日　調査準備
　　5 月 3 日　JICA ケニア事務所、
　　日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター
　　5 月 4 日　ケニア科学技術振興会、ナイロビ学校調査
　　5 月 5 日　在ケニア日本大使館留学生フェアにて講演及び参加
　　5 月 6 日―8 日　ナロック県の学校調査
　　5 月 9 日　ナイロビ発
　　5 月 10 日　帰国

【調査結果】

現在、ケニアは大統領選後の騒乱も収まり、教育分野では新たに導入された中等段階の無償化政策への対応が課題になっている。伝統的社会のマサイにおける調査を継続しているが、この地域は現在教育爆発とでもいうべき状況である。学校の新設が相次ぎ、生徒数も激増している。これはケニアの経済状況が好調なことと、マサイの定住化政策が軌道に乗り、近代教育の必要性が高まったことも原因であろう。

またケニアは現在原子力発電所の導入を目指す等、科学技術立国を重点政策としてお

り、高等教育への関心が高い。そのためケニア科学技術協議会の全国大会での講演を依頼された。これはナイロビのケニヤッタ国際会議場の大ホールを会場として、全国の研究者を網羅した大きな大会である。日本の高等教育の現状とこの分野の国際協力について講演した。

同時期に日本大使館において開催された帰国留学生の総会に参加した。また大使館員に対してこれまでのケニアにおける教育研究についてレクチャーを行った。

１１－２　東ティモール

【目的】

東ティモールにおける紛争後の復興の状況および復興支援の状況を調査し、あわせて日本のＮＧＯにフェアートレードや企業ＣＳＲの調査も行う。

【実施概要】

・調査期間：2010 年 7 月 14 日～26 日
・調査地：首都ディリ県、エルメラ県レテフォホ郡、ディリ県ヘラ村
・調査者：内海成治　お茶の水女子大学教授
　　阿部健一　総合地球環境学研究所教授
　　桑名恵　お茶の水女子大学グローバル協力センター客員研究員
　　お茶の水女子大学生４名　（植月綾子、齋藤智美、新井杏子、西郷智香子）

【調査概要】

2010 年 7 月 15 日から 16 日は、ディリ県にて、インタビュー調査を行った。15 日は、日本のＮＧＯ　ＰＷＪでフェアートレードコーヒープロジェクトの現状をインタビュー。UNICEF 東ティモールオフィスでは、水と衛生事業（Water, Sanitation and Hygiene、WASH）の担当者に話を聞いた。

17 日から 20 日までは、エルメラ県レテフォホ郡にて、小学校の全生徒のインタビュー調査、郡長へのインタビュー調査、また Haupu Village 小学校でトイレを調査した。２１日には、保健教育の分野で活動している NGO の SHARE、エルメラ事務所を訪問・インタビューを行った。22 日から 25 日は、ディリ県に戻り、22 日には、UNICEF 東ティモール事務所の馬目美奈子さんにインタビューを行った。24 日には、ディリ県のヘラ村で民家にてトイレの調査をした。その際、ヘラ村の村長にも話を伺った。

【調査結果】

珈琲のフェアートレードにより農民の収入が向上したこと、代用教員の採用により小

学校が再開している状況、千のトイレプロジェクトの課題等を明らかにすることができた。

オロパナ小学校

コーヒー豆の乾燥

１１－３　ウガンダ

【目的】

内戦の影響で避難民となったり、戦争で拉致された子どもや女性への支援状況の調査。

【実施概要】

・調査者：内海成治（お茶の水女子大学教授）
　　小島千尋（文教育学部４年）
　　豊永優美（文教育学部４年）
・日程：2010 年 8 月 15 日～25 日
・調査地：ウガンダ共和国北部のグル県、アムル県

【調査概要】

JICA が実施中の「アムル県国内避難民帰還促進のためのコミュニティ開発計画策定支援プロジェクト」においては、帰還した住民、未帰還の住民にインタビューを行った。また、戦争で拉致された子どもと女性の職業訓練支援を行っているＮＧＯの活動と訓練生のインタビューを行った。

【調査結果】

帰還民支援に関しては、国内避難民の帰還にはオリジナルプレイスの生活環境特に水、学校の整備が不可欠である。これまでの開発理論では帰還後のコミュニティによる参加型開発がコミュニティの持続的発展にとって重要であるとして、人々の帰還を待ってインフラ整備を進める手法が採られてきた。しかし、北部ウガンダにおいては２０年に及び戦乱と棄村により、村のインフラは完全に破壊されているケースが多い。そのため国内難民キャンプが閉鎖されても、人々は、出身の村に戻ることができない。人々は診療所や学校のある近隣の町に移住してとどまっている。つまり、帰還には井戸や学校、診療所などの基礎インフラの整備が必要なのである。

また、ＮＧＯによる反政府軍に拉致された子どもの職業訓練は開設して５年が経過しているが、現在現地化が図られている。すでに戦闘がほぼ終了したために新たな拉致被害者よりもすでに村に戻った人々の訓練に重点が移ってきている。訓練終了者の技術を生かした生業も一部成功しつつあり、訓練そのもののものから生業支援まで活動を広げている。

１１－４　INEE　緊急教育支援にかかるミニマムスタンダード改訂版発表会

【目的】

INEE（Inter-Agency Network for Education in Emergencies）は、緊急教育支援に関わる国際機関、援助団体、研究者および実務者のネットワークである。INEEは、2004年に緊急教育支援にかかるミニマムスタンダード（Minimum Standards for Education ーPreparedness, Response, Recovery）を発表した。これは、緊急人道支援における教育分野の支援に際して、守るべき国際的基準をまとめたものであり、広く認知される必要がある。

2010年6月には改訂版Minimum Standardsが発表され、お茶の水女子大学はこの改訂版の日本語版翻訳を進めており、また日本におけるLaunchの開催を予定している。今回の訪問においては、UNESCO本部におけるLaunchへの参加を通して日本におけるLaunchの開催計画を立てることを目的としている。※ただし、東日本大震災の影響により、Launch（発表会／勉強会）は当面中止となっている。

【実施概要】

・日時：2010/11/5　10:30〜16:30
・場所：UNESCO-7Place de Fontenoy, 75007, Paris, FRANCE
・訪問者：内海成治（お茶の水女子大学教授）
　　小島千尋・斎藤智美（お茶の水女子大学学生）
　　中川真帆（元大阪大学大学院生）

【調査概要】

INEE Tools Launch は Minimum Standards とその他の INEE による 2010 年改訂版ツールを発表する場である。また、INEE の活動報告および、UNESCO の教育分野（特に、紛争後・災害後の教育復興に関する）における近年の活動内容が紹介された（記者発表会）。記者の数は少なく、各国から INEE スタッフ、実務者、研究者、学生が参加していた。

さらに、続いて勉強会として、ツールを用いたワークショップが開催された。INEE は Minimum Standards の初版から今回の改訂版に至るプロセスについて、実践例やフィードバックの重要性を強調しており、今回のワークショップにおいてもよりよい実践のためのディスカッションや、多様な状況にスタンダードを適応するための考え方を学ぶ内容が主であった。

【発表会スケジュールと調査結果】

1.Launch 内容について

Launch-Agenda

10:30 – 11:00　Tea, Coffee & Registration

11:00 – 11:30　Welcome

David Atchoarena (Director for Education, Strategies and Capacity Building, UNESCO)

Mr. Rafiuzzaman Siddiqui (Alternate Permanent Delegate, Permanent Delegation of the Islamic Republic of Pakistan to UNESCO)

11:30 – 13:00　Introduction to Education in Emergencies

Lyndsay Bird (International Institute for Educational Planning (IIEP), UNESCO)

Eli Rognerud (Section for Post Conflict/Post Disaster, UNESCO)

Leila Loupis (EFA Global Monitoring Report)

Kerstin Tebbe (INEE)

★Minimum Standards2010 年改訂版の作成プロセスについての説明を含む。

日本における Minimum Standards 紹介のための最新データを知ることができた。

改訂版作成プロセス	参加者数
オンライン協議	169
主要テーマ別検討会	162
協議	895
分野別検討会／レビュー	48
ピア・レビュー	51
リストサーブ（メーリングリスト）レビュー	10
total	1,335

協議参加者の出身地域	参加者数
Africa	157
Asia	379
Europe	141
Latin America	63
Middle East	36
North America	119
total	895

（例）2009-2010 年にかけての作成プロセスおよび参加者の地域別内訳

13:00 – 14:15　Lunch

LUNCH SESSION – Launch of the IIEP-UNESCO Guidebook for Planning Education in

Emergencies and Reconstruction
Lyndsay Bird/Leonora MacEwen (UNESCO)

14:15 -15:00　Simultaneous Afternoon Workshop Sessions (1st round)
グループワーク。
　Minimum Standards から 1 つの章をグループごとに選択し、教育支援においてそのテーマに関して重要であると考えるポイントを出し合い、ディスカッションを行う。実際にツールを使用した実務者の方の経験を共有し、状況によって基準をどのように解釈すべきか、適応すべきか、という点をグループごとにまとめ、発表。

1) INEE Minimum Standards for Education
Location: Salle IX
Facilitator: Eli Rognerud (UNESCO)

2) INEE Reference Guide on External Education Financing
Location:　Salle VIII
Facilitator: Kerstin Tebbe (INEE)

15:00 – 15:20　Tea & Coffee

15:20 – 16:05　Simultaneous Afternoon Workshop Sessions (2nd round)
　よい支援とは、緊急時とは、といった、キーワードについてその定義をブレインストーミングしポストイットに各自書いて集約。ファシリテーターはそれらを読み上げ、必要であれば説明を求めるが、統一の定義を導き出すためではなく、状況によって多様に捉えることができる、という認識を共有するためであったように思う。
　また、2)Gender では、Gender glasses　をかけて教育支援の現場を想定する、というワークショップが行われた。小学校、大学等様々な現場において、また時間軸によって、どういった点がジェンダーに関する問題として上がりうるか、個人で考えた後、グループワークを行った。

1) INEE Guidance Notes on Teaching and Learning:
Location: Salle IX
Facilitator: Athisia Muir

2) INEE Pocket Guide to Gender
Location: Salle VIII
Facilitator: Nicolay Paus

16:05 – 16:30 Closing Plenary
Mark Richmond Director (Division for the Coordination of United Nations Priorities in Education)

１１－５　INEE ニューヨーク事務所訪問

【目的】

1. Minimum Standards 日本語版の装丁、内容等についての意識合わせ
2. Minimum Standards 記者発表会／勉強会の開催の調整

【実施概要】

INEE（Inter-Agency Network for Education in Emergencies）は、緊急教育支援に関わる国際機関、援助団体、研究者および実務者のネットワークである。INEEは、2004年に緊急教育支援にかかるミニマムスタンダード（Minimum Standards for Education－Preparedness, Response, Recovery）を発表した。これは、緊急人道支援における教育分野の支援に際して、守るべき基準をまとめたものである。2010年6月には改訂版Minimum Standardsが発表され、これは現在活発になっているNGOによる教育分野の国際緊急人道支援に際して、最も基本となる指針である。

お茶の水女子大学はこの改訂版Minimum Standardsの日本語版の翻訳に協力しており、今回の訪問においては日本側とINEEスタッフとの顔合わせを兼ねて、その内容、装丁等の摺合せ、および日本における記者発表会／勉強会の開催打ち合わせが行った。

・日時、スケジュール

2011/2/11　11:00～12:00

・開催場所

INEE Office on 122 East 42nd St. New York, Chanin Building, 12th floor

【調査概要】

1. Minimum Standards 日本語版の装丁、内容等についての意識合わせ

2010 年　月から作業を開始した日本語版 Minimum Standards の開発に際し、これまで主にメールベースで INEE 担当者とやり取りを行っていたが､実際のゲラを持ち込んで改版内容や装丁イメージを合わせることができた。この打ち合わせ内容を反映させ、2011 年 3 月､『教育ミニマムスタンダード（緊急時のための最低基準）2010 ―準備・対応・復興―』を完成させることができた。発行後、2011 年 3 月には第 12 回国際ボランティア学会に於いて、また 4 月には第 7 回アフリカ教育研究フォーラムにて、日本語版の紹介を兼ねて、その現状と課題を報告することができた。またこの際、本訪問において説明を受けた Minimum Standards 以外の INEE のツールについても説明・紹介を行うことができた。

2. Minimum Standards 記者発表会／勉強会の開催の調整

2010 年 11 月 5 日に UNESCO 本部（パリ）で行われた INEE Tools Launch の内容を

ベースに、日時、場所について調整が行われた。本訪問では具体的な内容に落とし込む前段階として、ワークショップの形式やファシリテーターを決定することができた。

【課題】

東日本大震災の影響もあり、本報告での訪問目的である、日本における INEE Minimum Standard の記者発表会および勉強会は当面延期となっている。そのため、日本語版の完成後、学会等を通した紹介のみでは実務者への周知、配布は十分とは言えず、今後も日本語版の紹介及び配布、実務者の利用に結びつく活動が必要である。

Ⅲ　外部有識者による
評価コメント

１．西川潤博士

（早稲田大学名誉教授、国際開発学会会長）のコメント

- Peace Worker を育てるための良い機会を提供している
- 子ども、女性にフォーカスを当てる支援は、平和構築において最重要事項であり、女子大ならではの支援として意義深い。
- 様々な立場の人々の間を取り持つ和解や平和構築への取り組みは、大学間を中心に進めると現実と離れ、頭でっかちになりすぎる。国際機関、国際 NGO のみならず、現地 NGO とのネットワーク、協力体制を構築していくべきである。
- 女性、子どもの問題を含め、平和構築、開発途上国における課題は、国外で起こっている問題ではなく、国内の問題とも関連してグローバルで進んでいるという観点を忘れてはならない。国内の女性や子どもの問題にも目を向けながら、海外の国際協力に関する事業につなげていく姿勢が重要である。

２．池上清子博士

（国連人口基金東京事務所所長）のコメント

- 女子大ならではの視点を掲げた意義深い事業である。
- 「共に生きる」社会実現のための活動であれば、女性ならではの視点を、女子大学のみではなく、男性を含めた様々な立場のグループと協議していく場も必要ではないか？
- 事業内容実施にあたって、事業目的に絡めたインパクト指標設定が明確ではないため、来年に向けて、ある程度の指標の設定が重要である。
- 「国際機関、国際 NGO の女性支援に関するプロジェクトの連携」は、他の多くの援助機関、研究機関が数多く取り組みを進めているため、本事業における特色を打ち出すべきである。
- ネットワークの形成に繋がるよう、ワークショップ、勉強会、研究会、公開講演会参加者のフォローアップ戦略が必要である。
- 調査活動においては、「女性や子ども」の状況に焦点を置き、その結果を政策に反映するような活動が期待される。

３． 鈴木均博士

（アジア経済研究所新領域研究センターグループ長代理）のコメント

- 日本の今後の対アフガニスタン支援において、日本が効果的に果たしうる役割として、人的支援の在り方は非常に重要。特に、女子大学として取り組んでいる、女子教育へのコミットメントの意義は極めて高い。
- アフガニスタン女性教員研修は、将来女性指導者になりうる人と関係を持つことで、インフラ整備よりも将来的に残っていく成果としてインパクトがある。
- これまで実施されてきた留学生、研修のプログラムの真価が問われるのは研修後である。治安情勢の悪化に伴い限られた支援の手段しか持ちえない情勢が続き、復興の正念場を迎える中、これからの数年間の研修プログラムの存在は重要である。そのためには、これからも継続することと、そのフォローアップの在り方を考えていく必要がある。
- 今後の女子大ネットワークの在り方については、例えば「地域研究コンソーシアム」のように、組織的なコンソーシアムの枠組みを作ったほうが、仕組みとして残るのではないか？五女子大学コンソ―シアムのように、女子大、学生ができる国際貢献の場として機能する場を作るメリットは大きい。

Ⅳ　平成 23 年度以降の計画

Ⅳ　平成 23 年度以降の計画

平成２３年度

１．国際会議の実施（世界各国の女子大学学長クラス招聘）

２．各（女子）大学や国際機関・援助機関と連携した開発途上国地域における女性と子どものための支援事業の実施。

３.国際機関、国際NGO等への大学生（院生）インターン派遣

４.緊急人道支援、教育支援にかかる知見の発信

平成２４年度

１．アジア、北米、中東地域の女子大学を中心とした国際協力人材育成のプログラム化の検討と実施各国の大学と交流を行いながら、国際協力に関する人材育成プログラム（セミナー等）を開催する。

２.各女子大学の教員、学生（院生）と開発途上国の行政官、研究者と連携して女性と子どもに関する課題に共同調査研究を実施する。

平成２５年度

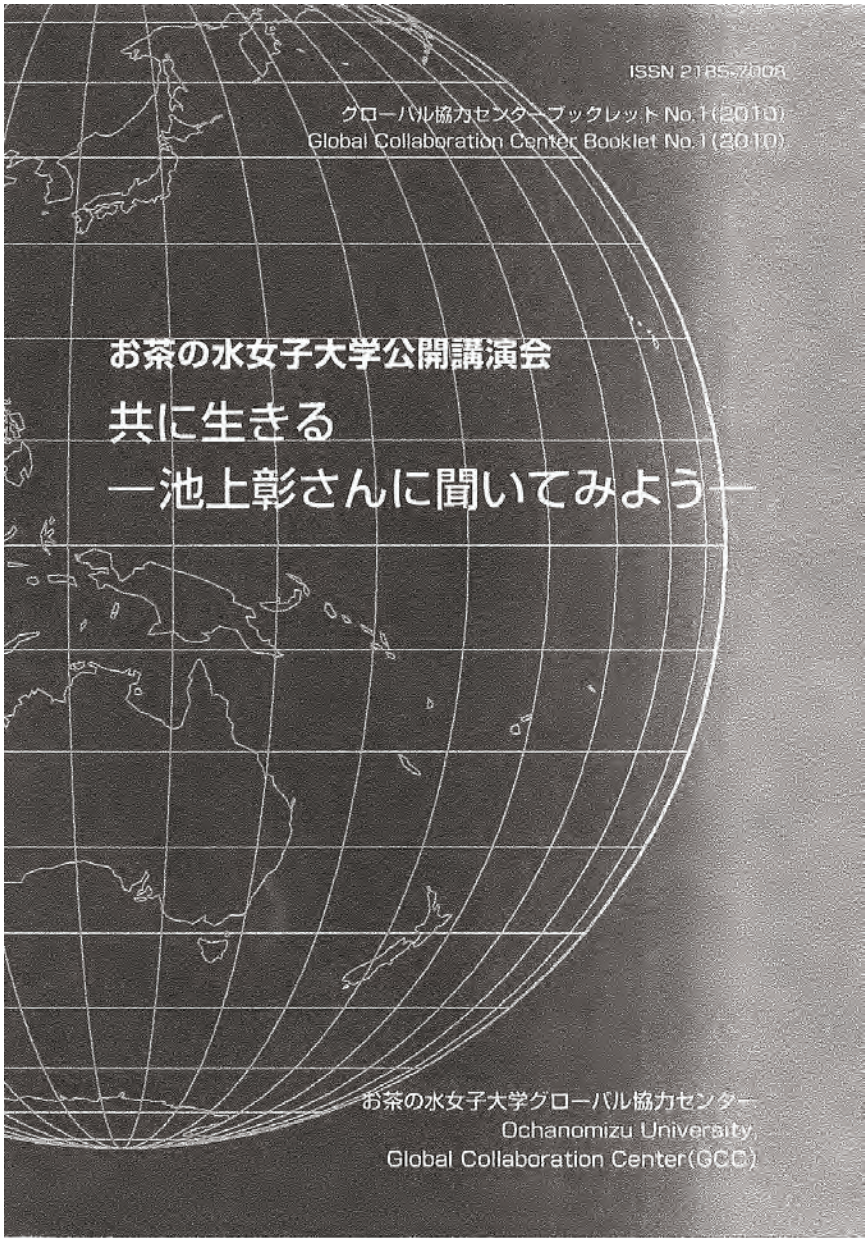
１．国際機関の協力を得て、これまでの取り組みを評価しながら、開発途上国の女性リーダーを招聘し、国際会議を開催して、世界各国の女子大学と今後の国際協力支援に関するモデルの構築を検討する。
国際社会に向けて、「女性」と「子ども」の支援をテーマとした平和構築や開発途上国支援に関する新しいモデルを提示する。

Ⅴ　参考資料

1. 出版物

１－１　お茶の水女子大学公開講演会「共に生きる -池上彰さんに聞いてみよう-」

2010 年 11 月、お茶の水女子大学グローバル協力センター



１－２　INEE 教育ミニマムスタンダード（緊急時の教育のための最低基準）2010 -準備・対応・復興-

2011 年 02 月、お茶の水女子大学グローバル協力センター（お茶の水女子大学国際協力論ゼミ訳）

２．国際ワークショップ

International Peace building Workshop

～Developing Intercollegiate network to implement the peace building activity in the global society～

“Living Together”

December6th～December9th , 2010

Ochanomizu University, Tokyo

Nara Women’s University, Nara

Ochanomizu University

GrobalCollaboration center 2010

ワークショップ概要

国際ワークショップ「共に生きる」
―グローバル社会における平和構築の大学間ネットワークの形成―

激動する国際社会の中で、紛争、暴力や人権侵害といった問題が取り上げられ、その中でも「女性」や「子ども」は虐げられた状況にある。

同じ時代を生きる人間として、これからの未来を築きあげる為に、私たちには何ができるのか。世界のいくつかの国の（女子）大学の教員・学生が研究、活動の両側面から私たちが取り組まなければならない課題について考える場を形成することが重要である。「グローバル社会における平和構築のネットワーク形成」プロジェクト（平成 22 年-25 年度）において共に活動する場を形成するためのワークショップを行う。

このワークショップを足掛かりとして次年度以降の共同調査・共同研究を立ち上げることを目的とする。

対象者は、世界および日本の（女子）大学で平和構築あるいは国際協力の研究を行っている教員およびこうした活動を目指す学生および大学院生。

【対象大学】
・ヴァッサー大学（アメリカ）、ミルズ・カレッジ（アメリカ）、ケニヤッタ大学（ケニア）、
　フィリピン女子大学（フィリピン）、梨花女子大学（韓国）
・奈良女子大学、日本女子大学、神戸女学院、甲南女子大学、同志社女子大学、お茶の水女子大学

【参加人数】
・各大学教員 1 名および学生 1 名を招聘。
・海外から 10 名、国内から 12 名、合計 24 名

【主催】
国立大学法人　お茶の水女子大学　グローバル協力センター
【共催】
国立大学法人　奈良女子大学　国際交流センター

プログラム

12月6日　お茶の水女子大学 Ochanomizu University

10:00～　　オリエンテーション Workshop Orientation
11:15-12:30　昼食 Lunch
13:00-16:00　学生交流活動 Interacting activities by the group

12月7日　お茶の水女子大学 Ochanomizu University

9:30～

開催学長挨拶　羽入佐和子学長　お茶の水女子大学
Opening greeting speech by Dr. Hanyu, President of Ochanomizu University
記念品贈呈

来賓挨拶　　浅井孝司氏　文部科学省国際交流政策室長
Guest Greeting speech by Mr. Asai, Director, Office for MEXT

10:00-10:30　参加大学の紹介
Introducing Prticipating college/university
10:30-10:45　休憩　Short Break
10:45-11:30　講義１ Lecture1:　David Leheny　(Professor , Princeton University)
「Japanese aid and global development」
11:30-11:45　休憩　Short Break
11:45-12:30　講義Ⅱ Lecture2:　長瀬慎治氏（国連ボランティア東京事務所　連絡調整官）
「国連ボランティアの平和構築活動」
Peacebuilding activities of UN Volunteers
Mr. Shinji Nagase Liaison Officer, UNV
12:30-13:30　昼食　Lunch Break
13:30-14:15　講義Ⅲ Lecture3：阿部俊哉氏（JICA 公共政策部平和構築・貧困削減課課長）
「JICA の平和構築支援」
Peacebuilding activities of JICA
Mr. Toshiya Abe, Director, JICA (Japan International Cooperation Agency)
14:15-15:00　ティーブレイク　Tea Break
15:00-17:30　海外大学によるプレゼンテーション
Presentation of representing college/university oversea

17:30-17:45　休憩　Short Break

17:45-18:15　日本（関東）の大学によるプレゼンテーション
Presentation of Kanto area universities.
18:15-18:30　まとめ Wrap-up
18:30-20:00　レセプション　Dinner Reception

12月8日　奈良女子大学 Nara Women’s University

13:00-18:00　学生交流活動 Interacting activities by the group
18:00-20:00　レセプション Dinner Reception

12月9日　奈良女子大学 Nara Women’s University

10:00-　　開催副学長挨拶　佐久間春夫副学長
Opening greeting speech
Dr. Sakuma, President of Nara Women’s Univ.
10:20-11:05　講義Ⅳ:大西健丞氏　（ピースウィンズ・ジャパン代表理事）
「国際NGOの平和構築」
Lecture4: Peacebuilding activities of International Non-Profit Organization.
Mr. Kenjo Ohnishi, CEO of Peace Winds Japan
11:05-11:15　休憩 Short Break

11:15-12:30　海外大学の学生によるプレゼンテーション
Presentation by the Faculty & Student Overseas 5 colleges/universities
13:30-14:00　日本（関西）の大学によるプレゼンテーション
Presentation of Kansai area college/university Faculties & Students
14:00-15:00　グループワーク Group Work
15:00-15:30　ティーブレイク Tea Break
15:30-17:15　グループワークの発表 Group Work Presentation
17:15-17:45　全体討議と今後のまとめ Workshop review by the Faculty

Ⅰ　国際ワークショップ　お茶の水女子大学

【お茶の水女子大学学長挨拶】

お茶の水女子大学
羽入佐和子

皆様、本日は、お茶の水女子大学と奈良女子大学と共催の国際ワークショップに、アメリカ、韓国、フィリピン、ケニアと、世界各地から、また日本におきましては、本学以外にも５校の女子大の代表にご参加いただき、誠にありがとうございます。さらに文部科学省から国際協力室長の浅井様にご来賓としてご臨席を賜っております。心より感謝申し上げます。

本学では、本年度より「グローバル社会における平和構築の大学間のネットワークの創成」事業を開始いたしました。グローバル社会において平和な社会を築くため、特に女子大学、女性ならではの視点から、日本および世界における様々な大学、研究機関との国際的ネットワークを創成することを目的としております。初年度の本国際ワークショップは、世界および日本の各地で平和構築に携わる教員、学生がネットワークを形成するための場づくりとして企画いたしました。本日こうして平和構築にかかわる女性教員、女子学生にお集まりいただき、国際ワークショップを開催できましたことを心よりうれしく思います。

お茶の水女子大学は 2010 年、創立 135 年を迎えます。1875 年に日本で唯一の女子高等教育機関として設置されて以来、多様な分野での先駆的な女性や指導的役割を果たす女性を輩出し、女性の教育研究において常に社会をリードしてきました。

本学では、「学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現される場として存在する」ことを大学の理念として掲げ、「すべての女性がその年齢・国籍等にかかわりなく、個々人の尊厳と権利を保証され、自由に己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させることを使命とする」ことをミッションとしています。

本学における平和構築支援活動としては、2002 年、アフガニスタン復興支援として行なわれた女性支援、女子教育支援事業の一端を本学が担ったことが大きな転機となりました。翌 2003 年に現在のグローバル協力センターの前身である、開発途上国女子教育協力センターを設立し、以後、アフガニスタン女性教員研修、カブール大学からの女性教員の受入など様々な事業を展開しています。また、現在は、アフガニスタンにとどまらず、アジア・アフリカ地域を中心として、女性と子どもに関わる平和構築支援活動に取り組んでいます。

近年、紛争が絶えず、多くの民間人が巻き込まれ、特に女性や子どもが大きな被害が及んでいます。本日の国際ワークショップでは、社会・文化が異なる教員、学生間の意見交換を通じて、お互いの理解を深めながら、平和実現に向けて抱える問題を自分たちの身近な課題として受け止め、平和で、共に生きる社会の実現のために、今私たちができることは何かを考える機会となりましたら幸いです。

最後になりましたが、本ワークショップの開催にご尽力いただきました各大学の教員の方々、学生の方々、同時通訳をご担当いただいております神戸女学院の皆様に心より御礼申し上げます。

海外からおいでの皆様には、日本社会や文化にも触れていただき、日本に対してもご理解を深めていただくきっかけとなれば幸いです。日本での滞在を楽しんでいただきますよう、また健康にご留意されますようお願いいたします。

【来賓挨拶（文部科学省）】

文部科学省国際交流政策室長
浅井孝司

本国際ワークショップにあたりまして、文部科学省を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

21 世紀に入ってすでに 10 年近く経っておりますが、世界では地域紛争や内戦がまだ各地で続いており、国際社会としてこうした地域紛争や内戦に対応することが、国際安全保障上の課題であると認識されております。そして国際社会が紛争の和平プロセスへの積極的に関与するとともに紛争後における平和を定着させて、国家の再建や復興を軌道にのせる努力を支援することが従来の国際開発協力という視点からだけではなく、国際安全保障の視点からも重要視されるようになってきました。

現在、我が国としても国連の活動に協力するとともに、全ての人々が平和の配当を実感するために開発途上国における雇用創出を計り、国造りを支える人造りを進めるなど、平和構築支援を推進しています。　去る 9 月に国連でミレニアム開発目標のサミットというのが行われました。その中で我が国の管総理大臣から新しい日本の教育協力政策 2011-2015 というのが発表されました。新政策の基本理念として人権としての教育、持続可能な開発のための教育、平和実現のための教育、この 3 つを通じて人間の安全保障の画一に帰することを掲げています。

基礎教育、職業訓練、高等教育に加えて新しく平和と安全のための教育、紛争や災害の影響を受けた国に対する教育支援を推進することが述べられています。特に教育を所管する文部科学省では大学を中心とした人材育成を重点に平和構築支援の活動に参加しています。例えば、アフガニスタン復興支援のためにこれまでもお茶の水女子大学をはじめとする我が国の5つの女子大学がネットワークを組んでアフガニスタンの女性教員の育成指導にあたっています。さらに、新たに本年からは概ね 5 年間で最大 50 億米ドルの資金で我が国にアフガニスタンから留学生を 500 人程度受け入れる、そしてアフガニスタンの復興に資する人材育成事業を開始するということになっています。平和構築支援は支援対象である紛争後、国家の政府や住民はもとより支援する側の援助国政府、国際機関、NGO などの多種多様なアクターの連携協力が不可欠であります。

今回開催される国際ワークショップは大学間ネットワークを形成する目的がありますが、こうしたネットワークが平和構築支援のためには極めて重要な役割を果たすものと思っております。最後になりますが、本国際ワークショップを実施していただいているお茶の水女子大学の関係者をはじめ、ご参加の国内外の大学関係者に対しまして深く感謝を申し上げますとともに本ワークショップの成功をお祈り致しましてわたくしのご挨拶とさせていただきます。
どうもありがとうございます。

講義 1　David Leheny （Professor,PrincetonUniversity）

「Japanese aid and global development」

講義 2　長瀬慎治（国連ボランティア計画　東京事務所　駐在調整官）

「国連ボランティアの平和構築活動」

皆さま、おはようございます。

私は国連ボランティア計画、東京事務所の長瀬慎治と申します。まずは、この非常に重要かつ興味深いセッションへの参加にお誘いいただきましたお茶の水女子大学の内海先生、桑名先生に心より感謝申し上げます。国連ボランティア計画を代表して、ここで皆様に私たちの活動、特に平和構築に関する国連ボランティアの活動を紹介し、ボランティアリズムの重要性についてお伝えできる機会を頂戴いたしましたこと大変嬉しく思っております。

私は現在、国連ボランティア計画のスタッフとして働いておりますが、以前は私自身が国連ボランティアとして活動しておりました。2001 年から 2002 年まで私は国連ボランティアとして、東ティモールの国連 PKO の活動に参加し、東ティモールの独立前の憲法制定議会選挙の支援を行いました。2002 年から 2005 年までは、南太平洋のサモアの国連開発計画の事務所に国連ボランティアとして派遣され、サモア、ニウエ、クック諸島、トケラウという 4 つの島国の国連ボランティアのプログラム管理・運営に従事しました。国連ボランティアになる前には、愛知県の大学の事務職員として留学生のお世話をしておりました。

本日のプレゼンテーションでは、国連ボランティア計画の活動概要を御紹介し、特に平和構築の分野でいかに国連ボランティアが貢献しているのかについてお話させていただきたいと思っております。

まず、国連ボランティア計画の概要をお話します。国連ボランティア計画（UNV）は、1971 年の国連総会決議によって、国連開発計画の下部組織として設立された国連機関です。ボランティアリズムを通じて世界の平和と開発に貢献しています。UNV の本部はドイツのボンにあります。東西ドイツが統一され、首都ベルリンに移転されたあと、西ドイツの議会のあった敷地に建てられた国連ビルオフィスがあります。ボンには、他に、国連気候変動枠組み条約や砂漠化防止条約のオフィス等もあります。

まずは、国連ボランティア計画が平和と開発のためのボランティアリズム促進のために行っている 3 つの大きな活動（アドボカシー、融合、動員）についてご紹介申し上げます。

一つ目は世界の平和と開発のためのボランティアリズムの重要性、認知促進のための「アドボカシー」活動です。例えば、世界各国、特に開発途上国で、多くの人たちがボランティア活動に参加できるような環境を作る支援として、ボランティアに関する政策や法律を作る支援や、ボランティア活動の効果を「可視化」するための調査や研究への支援等を行っています。このボランティアリズムのアドボカシーに関して言うと、来年 2011 年はとても重要な年になります。2011 年は 2001 年の「ボランティア国際年」の 10 周年にあたる年だからです。世界中でこの 10 年間のボランティアリズムの進捗、課題を確認し、さらなる発展のために、そして 2015 年に達成期限を迎えるミレニアム開発目標の達成を支援するための市民参加の強力な手段としてのボランティアリズムの認知を向上するために活動が計画されています。例えば、2011 年の 6 月にはケニアで世界ボランティアサミットの開催が計画されています。そして、国連ボランティア計画では、世界初の世界のボランティアリズムの状況を報告する「世界ボランティア白書」の編纂を計画しています。この文書は 2011 年 12 月の国連総会での発表を目指しています。また国連ボランティア計画は「ボラ

ンティア国際年 10 周年」の世界的な推進機関として、各国で「ボランティア国際年 10 周年」の活動を推進する国内推進委員会の設立を呼び掛けています。日本でも 2011 年 4 月にその設立が予定されています。

次にボランティアリズムと開発計画の「融合」についてお話したいと思います。これは、「アドボカシー」で得られたボランティアリズムの理解や認知を実際の平和や開発のための活動や活動計画に融合させ、実際のボランティア活動の成果や貢献を確保していこうという活動で、そのために国連機関を含む様々な関連機関、団体とパートナーシップを組んで、それらの機関の活動にボランティア活動のスペースを作っていくというものです。つまりボランティア活動を単なる「よいこと」から各機関の活動目標達成に貢献する戦略的パートナーにしていくための活動です。

そして最後に国連ボランティアを含む多様なボランティアの数を増やしていくという「動員」の活動です。ＵＮＶはボランティアリズムが持つ、自由意志（free will）、責務（commitment）、責務に基づく行動（engagement）、連帯（solidarity）といった価値において、ボランティアリズムを理解しています。そして、ボランティアリズムがジェンダー平等や、これまで辺境に追いやられていたグループを含む多様な人々やグループの社会包摂（social inclusion）を実現することで、平和や開発のための活動への地球市民の参加を促進することを願っています。その意味でＵＮＶは国連ボランティアの数を増やすだけでなく、すべてのボランティア活動に参加する市民の皆さんの数を増やすことを応援しています。平和構築の分野でいえば、例えば、ＵＮＶは 2007 年 12 月のケニアの大統領選挙の結果を受けて発生した暴動後のコミュニティレベルの平和構築支援として、国連ボランティアを派遣し、住民の中から「隣人ボランティア」を募り、紛争後のコミュニティ内の調停を支援しました。コミュニティの状況を一番理解する住民自身が中立的立場をとるボランティアとして協議のスペースを作ることは、対立する人々の信頼の再構築に寄与しています。

国連ボランティア計画はこれらの大きな活動を行っていますが、この活動を推し進めるために世界中から国連ボランティアを募り世界中に派遣しています。それでは、どんな方々が実際に国連ボランティアとして活動しているかについてご紹介します。国連ボランティアの特徴として「多様性」や「中立性」を、日本の青年海外協力隊やアメリカの平和部隊との比較であげています。国連ボランティアは、世界約 160 カ国出身の多様なボランティアから構成されています。青年海外協力隊が日本人のみ、アメリカの平和部隊がアメリカ人のみのボランティアで構成されているのとは、かなり様相がちがいます。年間約 7500 名の国連ボランティアが約 130 カ国で活動をしています。そのうち 80％が途上国出身のボランティアです。またそのうちの 30％は自国で国連ボランティアとして活動するナショナルＵＮＶと呼ばれる人たちです。平均年齢は 37 歳。応募資格は 25 歳以上、多くは 5 年～10 年の職務経験を持った様々な分野の専門家です。ジェンダーバランスは男性が 60％。他の国連機関と同様、男女比を同等にするために女性の方々の応募を歓迎しています。

国連ボランティアは、途上国の現場で活動する国連機関を受け入れ機関として、各機関のプロジェクトに派遣されることになっています。平和構築分野での活動としては、国連開発計画を通した活動や UNICEF や UNHCR の人道支援の活動への派遣、そして特に国連ボランティアに特徴的なのは、国連平和維持活動へのボランティア派遣です。国連ＰＫＯへの国連ボランティア派遣は 1992 年から始まり、これまで約 40 ものＰＫＯに約 8000 名の国連ボランティアを派遣しています。この数は国連ＰＫＯで活動する文民スタッフ全体の約半分にも達しています。

国連ＰＫＯで、国連ボランティアは様々な任務に従事しています。例えば、ＤＤＲや人権、選挙支援等の活動をしています。私の東ティモールの経験で言うと、選挙支援として、村を回って住民登録をし、民主的な選挙とはどういうものかということを住民に伝える、有権者教育、そして投票日当日の投票所の管理・運営、そして開票等をします。東ティモールでは、住民の約８０％は字が読めませんでしたので、投票用紙には政党のロゴ、立候補者の写真が印刷されていました。そして投票したい政党と立候補者にそれぞれ１つだけ、釘で穴をあけて、投票用紙を投票箱に入れ

るということを教え、練習するために村を回るなどという活動もしました。2011 年初頭にはスーダンで南スーダンの独立の是非を問う住民投票が行われますが、そこでも約 200 名の国連ボランティアが選挙の支援を行うことになっています。

国連ＰＫＯの国連ボランティアはその活動の内容に係る任務だけでなく、ＰＫＯの活動自体を現場で可能にする後方支援の分野でも活躍しています。ＰＫＯの現場で使われる国連車の整備工、国連機の管制官は国連ボランティアです。ＰＫＯの事務所の施工・管理をするキャンプマネージャーと呼ばれる専門家や、発電機、無線技士、広報・ＰＲのオフィサーも国連ボランティアが担っています。国連ボランティアなしには国連のＰＫＯの活動は成り立たないと言われるほど、その評価は高まっています。

ここで、平和構築の分野で活躍する日本人国連ボランティアの皆さんの現地での活動のいくつかをご紹介したいと思います。国連ボランティア計画は日本政府が行っている「平和構築人材育成事業」の事業実施パートナーとして毎年 30 名の日本そしてアジアからの研修員を国連ボランティアとして平和構築の現場に派遣をしていますが、その中から 3 名の日本人ボランティアを紹介します。安永知子さんは、ケニアの UNHCR に平和構築オフィサーとして派遣されており、コミュニティの平和構築のためにフォーラムを設立、運営する支援に取り組んでいます。同じく UNHCR を通してケニアの難民キャンプに派遣されている黒岩揺光さんは、ユースオフィサーとして、スポーツ行事やスピーチコンテストを開催して、難民の若者の能力開発の支援をしています。カーボベルデのＵＮＤＰに派遣されている柴田正和さんの任務は現地の国連内部での調整業務で、現地のコミュニティのボランティア活動との直接の係りはありませんが、柴田さんは自身の余暇の時間を利用して、コミュニティのボランティア活動に参加し、ボランティアリズムの推進に協力しています。

次にＵＮＶが行っている”Share the Story”というキャンペーンについてお話させていただきます。これは、UNV がインターネットのソーシャル・ネットワーク・サービスの facebook 上で行っている世界のボランティアリズム促進のためのキャンペーンで、facebook のＵＮＶ公式ページ上で、世界中のボランティアが自身の経験や課題を話し合うことを趣旨としています。このキャンペーンのハイライトとして、ちょうど終わったところなのですが、12 月 4 日に、この公式ページ上でオンライン・フィルムフェスティバルを開催しました。このフェスティバルは世界の 12 の時間帯を 24 時間移動しながら世界中から集められたボランティア活動の現場を紹介したビデオを上映していくという企画でした。南太平洋のフィジーからフェスティバルは始まり、地球を 24 時間で一周して、上映された 20 編のビデオの内容を基にして、ボランティアに関する議論を進めながら南太平洋のサモアに戻ってくるというイベントでした。

このフィルムフェスティバルで上映されたビデオの中にキプロスのＵＮＤＰで平和構築の活動に携わる日本人国連ボランティアの酒井倫得さんが自身の活動を紹介するビデオがありますので、皆様に見ていただこうと思います。酒井さんは、先ほど紹介しました「平和構築人材育成事業」の一環としてキプロスに派遣されていますが、そこで彼が取り組んでいることは、キプロスでは希少な水資源の配分を通して対立するギリシア系住民とトルコ系住民との間の平和構築に寄与しようという活動です。酒井さんたちは水資源の配分に関する委員会の設立を支援し、対立する住民グループの調停の場を提供しています。委員会の参加者はすべてボランティアで、ボランティアリズム基づくこの活動が相互扶助や連帯、信頼醸成などを生み出し、キプロスの平和構築に寄与していることが紹介されています。

最後になりますが、ＵＮＶが現在推し進めている新しいボランティア活動の形として、オンラインボランティアを

紹介します。これまで紹介してきたボランティア活動は、現場で実際に活動する「オン・サイト」ボランティアとでも呼べるものですが、インターネットの普及によって、皆さんが、現場に行かなくても、御自身のお部屋にあるコンピュータを前にして途上国を支援できる「オン・ライン」ボランティアというものがあります。ＵＮＶは、www.onlinevolunteering.org というウェブサイトを通してこのオンラインボランティア・サービスを運営しています。2009 年には、約 9000 人のオンラインボランティアが 14000 件の任務を行っています。

オンラインボランティアの活動も今回のオンライン・フィルムフェスティバルで紹介されていますので、オンラインボランティアが具体的にどのような活動をしているのかという一例として、皆さんにご紹介したいと思います。ビデオでは、マレーシアのデザイナーが、オンラインボランティアを通して、グアテマラの農民組織に対して、農作物を市場で売り出すための商品のパッケージのデザインを提供したり、商品を紹介するウェブサイトの構築の支援をしていることと、イギリスの大学院生が、アフガニスタン、ネパール、ウガンダの若者に対してオンラインボランティアを通して、通信教育を行っている事例が紹介されています。

フィルム上映：

今回、世界中から集まった皆さんのような平和構築の研究に従事している研究者、そして学生の皆様こそ、このオンラインボランティアの活動に参加していただける最適の方々だと確信しております。今すぐにでも是非ご参加いただければ幸甚です。

以上、国連ボランティアの活動について、特に平和構築分野での貢献に焦点をあててご紹介申し上げました。これを機会に平和や開発に対するボランティア活動の重要性についてご理解いただき、それについて多くの皆様にお伝えいただくと共に、積極的にご参加いただきたくお願い申し上げます。本日はご清聴いただき誠にありがとうございました。

講義 3　　阿部俊哉　（JICA 公共政策部平和構築・貧困削減課課長）

「JICA の平和構築支援」

本日はこのセミナーにお呼び頂きありがとうございます。このセッションを始めるにあたってまずは JICA とは何か、一体どんな事業をやっているのかということ説明したいと思います。

全人口の 80 パーセントは発展途上国に住んでいます。そして、12 億の人たちが 1 日 1 ドル以下の生活を強いられています。彼らは安全な飲料水や医療サービスへのアクセスが十分でない状態に置かれています。持つ国と持たざる国の格差がどんどん広がっているのは現実です。そうした状況の中で JICA は発展途上国に政府開発援助（ODA）を供与しています。JICA は ODA の実施機関として円借款、無償資金協力、技術協力を供与しています。いまや JICA は世界第二位の開発援助機関で、予算は 103 億ドルです。

パンフレットの 5 ページ､6 ページを見て頂きますと JICA が発展途上国のキャパシティビルディングのために様々な活動を展開していることをお分かり頂けると思います。はじめに技術協力についてです。JICA は日本人の専門家やボランティアを派遣しています。また、発展途上国から研修生も受け入れて技術的、専門的な研修を実施しています。続いて円借款についてです。これは低い利率で開発のための資金を相手国政府に貸し出すものです。相手国政府はこの資金を使って病院、橋、道路、電力施設などのインフラの整備を進めています。三つ目の柱は無償資金協力です。

特に非営利な分野、例えば教育や給水、医療の整備など、また貧困地域のインフラの整備のためのプロジェクトを実施しています。円借款と無償資金協力を供与する対象の違いは収益があるかないかという点です。さらにそれ以外にも JICA は緊急援助を行っています。緊急援助チームを津波や地震、ハリケーンなどの自然災害の被災国に派遣しています。最近の例ではハイチにも専門家や緊急援助チームを送りました。また、政府だけではなく民間企業との連携も強化しています。最近は社会的責任（CSR）に関心を持つ企業が非常に増えています。以上が JICA の概要です。

次に平和構築についてお話します。紛争の再発を防ぐという意味で平和構築が非常に重要であることは皆さんご存知かと思います。平和構築というのは、1990 年代以前はそれほど意識されていませんでしたが、冷戦終結が大きな転機となりました。それ以降、国際社会は平和構築に対する取り組みを積極的に始めました。日本もその例にもれません。1990 年代から数多くのプロジェクトをカンボジアや東ティモール、パレスチナといったポストコンフリクトの国に展開してきました。ひとつの転機は 2003 年です。この年に日本政府は新しい ODA 憲章を採択しました。その中で明確に平和構築支援の重要性を謳っています。同様に JICA も平和構築支援を事業の柱とすることを決定しました。こうしたふたつの動きがひとつになり、JICA は平和構築を所管する部署を設立しました。私が所属する部署がそれです。

これは平和構築の枠組みを説明したスライドです。平和構築にはまずは軍事的な支援の枠組みがあります。多国籍軍、国連の PKO などが含まれます。軍備管理や予防外交が行われます。JICA が行っているのはこうした軍事的な枠組みや、政治的な枠組みとは違います。JICA は経済的、社会的な枠組みの中で平和構築支援をしています。その中に入ってくるのが開発支援です。またそれ以外にも UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のように人道的な見地からの支援を行っている機関もあります。後ほど開発支援と人道支援の違いをお話したいと思います。次のスライドは時系列的に平和構築の枠組みを説明したものです。紛争が落ち着いてから、ポストコンフリクトの段階に入ります。

続いて、JICA がどのような種類の平和構築支援を行っているか話したいと思います。JICA は特に四つの分野に力を入れています。第一に社会資本の復興です。これには教育、保健医療、インフラの整備、食料の安全保障などが含まれます。第二に経済活動の復興です。人々が自立して経済活動を行えるにはどうしたらいいか、そのためにはまず雇用機会を拡大しなければなりません。人々に雇用の機会を与えることは極めて重要です。さらにまたひとりひとりの所得創出が重要となります。そのためにも経済活動ができるような環境を整えることが必要です。第三は国家の統治機能の強化です。人々、コミュニティを支援するだけではなく、政府に対して支援を与えてその統治能力を強化しなければならないのです。国家の役割は非常に重要で、例えば公教育はまさに国家自身が提供するものです。平和構築支援としては選挙の監視、マスメディアの育成、法の支配、司法制度、行財政などが含まれます。以上に申し上げた社会資本の復興、経済活動の復興、国家の統治機構の強化は他の開発援助でも行われているものです。加えて第四の柱として治安強化がありますが、これは平和構築支援特有の分野です。専門的な知識を持っている人材が必要になります。治安機構改革（SSR）、武装解除、動員の解除、社会復帰（DDR）、小型武器の規制、対人地雷、不発弾の問題がこの分野に含まれます。以上の四分野を JICA は平和構築支援として取り組んでいます。

平和構築支援を行う上で考えなければいけないことがいくつかあります。まず、迅速にプロジェクトを始めることです。JICA の開発プロジェクトでは、それを立ち上げるために時間もそれなりにかかります。それでもスーダンでは数ヶ月間で港の建設を行い、相手国政府や他のドナーから感謝されています。また、人道支援と開発支援を継ぎ目なくシームレスに行うことも重要です。しかしながら往々にして人道支援と開発支援との間にはギャップが生じます。

平和構築支援では社会的な弱者に対する支援も十分に配慮しなくてはなりません。また、政府、コミュニティ、人々に対する適切な支援のバランス、近隣諸国、地域への配慮も不可欠です。多くの紛争は周辺国を巻き込みます。こうした紛争が起きると人々は難民化し、近隣諸国に流出してきます。そこで貧困問題も相まって状況が悪化します。紛争が再発するのを避けるべく、紛争予防の配慮も必要です。なぜ紛争が起きたのか、社会的、経済的、文化的な要因を分析することが極めて重要です。

具体的な例を申し上げましょう。実際に JICA が行った支援です。東ティモール、アフガニスタン、スーダン、ブルンジ、スリランカ、インドネシア、シエラレオネなどの例を紹介します。教育を改善するために学校を建設します。遠隔地にも学校を作ります。また経済活動も復興、整備します。カンボジアで市場経済の研修を行いました。国家の統治能力の強化はカンボジア、東ティモール、イラク、アフガニスタン、パレスチナで行っています。民主化支援もカンボジアやベトナムで行っています。治安強化の分野では DDR 支援を行っています。社会復帰のための職業訓練は JICA にとっては得意な分野です。アフガニスタンやスーダンなどではほとんどの人々は適切な訓練を受けていないので仕事を得ることが難しいのです。それを避けるために職業訓練を行っています。カンボジアでは地雷除去への支援を行っています。カンボジア政府の中に地雷除去専門の機関があり、そこを窓口としてプロジェクトを行っています。現在その機関は日本の支援でキャパシティビルディングが出来たということで、現在周辺諸国に対しても訓練を行っています。

コミュニティの和解を支援することも重要です。特に難民や帰還民や現地のコミュニティが共存しているコンゴ、スリランカ、アフガニスタン、ウガンダでは和解を支援し、紛争予防の配慮を十分に考えなければなりません。ここで考えなければならないことは紛争要因を助長しないように配慮しなければならないということです。紛争要因を助長してしまってはせっかくの援助をしてもプロジェクトを通して負の影響が加わってしまうからです。それからまた、紛争の原因を抜本的に解決するための在り方を追求することであります。だからこそ、なぜ紛争が起きたのかということについて、深い考察が私たちに要求されるのです。そして効果を最大限にすること。これが極めて重要であると思います。

最後に UNHCR と JICA との連携についてお話します。UNHCR のマンデートというのは、難民を帰還させることと、現在滞在している国や第三国に定住の場を与えること、それから長期間難民の状況に置かれている人々に解決の方法を提供することです。難民問題の解決には三つの方法があります。まずは帰還と社会への再統合（リインテグレーション）です。すなわち、難民となった人たちがもう一度自分たちの故郷に戻って、もう一度社会に復帰するということ。これが最も理想的な解決方法でしょう。第二に現地社会への統合（ローカルインテグレーション）です。すなわち難民となった人たちが難民になった先の定住先で溶け込んで生活をすることです。そこでは、住んでいる人と社会的、経済的、そして政治的に同等な権利が与えられることが理想です。第三に第三国定住（リセトルメント）です。ここでいう第三国の多くは先進国です。アメリカ、カナダ、スウェーデン、ノルウェー、イギリスなどです。受け入れ国で一番大きなところはアメリカです。残念ながら日本はこれまで難民受け入れに積極的ではありませんでしたが、今年からミャンマー難民を対象に 60 人の第三国定住を行うことを決定しました。これは大きな進歩です。もっと第三国定住を促進してもらいたいと願っています。

UNHCR と JICA の連携は 10 年前に始まりました。緒方貞子国連難民高等弁務官のイニシアチブで始まりました。この 10 年間、パートナーシップが展開されている国は広がっています。現在、30 カ国で合同プロジェクトが行われ

ています。その数は 50 にも上り、これは JICA の活動としては大きなものと言えるでしょう。南スーダンの紛争は内戦でしたが、多くの人たちが南スーダンに帰還したいと考えています。JICA はこうしたなかで技術的な援助、支援を行ってきました。UNHCR が行う人道支援と JICA が行う技術支援を組み合わせてきました。アフガニスタンでも同じような例があります。今もっとも大きな課題はこの社会への再統合です。社会にどうやって溶け込んでいくのかということ。それから雇用が必要です。そしてそのためには職業訓練が必要となります。UNHCR は JICA に対して、職業訓練を受けたいと思っている人の候補者を推薦し、JICA はそうした人たちに訓練を行いました。また、難民の受け入れコミュニティを支援することでも連携を行っています。難民は社会にとって非常に負担になるということは否めないのです。難民を受け入れているコミュニティは大きな負担を負っています。ですから JICA はコミュニティに対して支援を行って、それによってコミュニティが教育、その他のサービスを提供できるようにしています。こうした文脈からはザンビア、バングラデシュ、コロンビアというところで経験を得てきています。現在、最も深刻な問題はイラクの難民です。イラクの難民の数は非常に多いです。今の治安状況では帰還をさせることはできません。ですから彼らはヨルダン等その他周辺の都会に住んでいることになります。彼らに対して JICA が行っていることは母子保健や水分野の支援です。

以上が JICA による平和構築支援の現状です。何か質問等があれば、よろしくお願いいたします。

質問者 1：先生ありがとうございました。人道的支援に興味があるのですけれども、今回は特に言及がございませんでした。質問としては、たとえばケニアなどでプロジェクトを行う場合に、セクター別、例えば子供のためのプロジェクトをされました。非常に複雑なようなのですが、たとえばケニアにいらっしゃったときに、セクターごとのアシスタントはどのようなことをなさるのでしょうか

阿部氏：まず、ケニアの人道支援についてお話をします。JICA は今、ダダブという地域で上水道の整備をしています。ここには多くの難民がいて、現地コミュニティは水や薪といった天然資源が枯渇することに危機感を感じています。それによって難民への反感が高まっています。UNHCR、またドイツなどの援助機関もここでプロジェクトを始めています。JICA のプロジェクトは難民を受け入れている現地コミュニティに対してです。たとえば給水施設の整備だとか、あるいは能力向上、スタッフの訓練などをやっています。これは人道支援と開発援助機関との協力のいい例です。それから治安の話もしなければなりません。人道支援機関、例えば UNHCR と比べると安全面での JICA の実施能力はそれほど高くありません。そのため、研修などを通してそれを強化しています。そして支援の質の向上を図っています。

セクターごとのアプローチも始めております。ケニアだけではありません。これはある意味グローバルなトレンドであります。現在 JICA の置かれている立場というのは非常に厳しいものがあります。先ほど **Leheny** 先生がおっしゃったように、予算が非常に限られています。では何が解決になるのでしょうか。選択をし、特定の分野に集中することだと思います。プロジェクトを数多く実施するよりも、リソースをある分野に絞ることが必要だと考えています。どのセクターを選択するのか。今、いろいろな検証をしています。そこにリソースを動員し、プロジェクトを立ち上げることになると思います。それこそが我々がやろうとしている解決策のひとつです。

質問者 2：政府の重点ということをお話していましたが、政府が望んだところを JICA としてやるということでしょうか。

阿部氏：相手国政府の意向と日本政府の援助方針に合った援助を行うことが JICA の基本です。それに沿った形で支援すべき重点的なセクターを選定し支援を実施しています。

質問者 3： We'd come to conflict solutions we must be argued ・・・We are not in a position to ・・・ to each side. We cannot criticize the our divide party ・・・And I'm heard that the for the people who have reserving the assistance sometimes people get to frustrated that aid providers is not ・・・I haven't decided.

阿部氏：難民に対して支援を行う場合には政府との関係を重視し配慮します。相手国政府は難民よりも JICA が自国民に支援することを望みます。また、平和構築支援を行う場合は中立性にも配慮する必要があります。特定の集団や政治グループを支援することが望ましくありません。

Ⅱ　国際ワークショップ　奈良女子大学

【奈良女子大学副学長挨拶】

奈良女子大学副学長
佐久間春夫

みなさん、おはようございます。
昨晩はよく睡眠を十分とられましたでしょうか。リフレッシュしてまた今日のワークショップに参加できたかと思っております。また本学でこのような国際ワークショップ「共に生きる」グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの形成が開催されますこと、大変名誉なことであります。

本学は、お茶の水女子大学とともに我が国に二つある国立の女子大学であります。女性の最高機関として 1908 年に創設されました。前身の奈良女子高等師範学校から数えて、昨年 100 年を迎えることができました。新たな世紀の始まる年に皆様方をお迎えし、国際ワークショップが開催されることは本学の設立の基本理念に適い、また研究目標にも適うものであります。特に、女性、平和というテーマにつきましては国際社会に貢献する女性人材の育成が本学の教育目標に掲げており、そのような観点からも今日のようなワークショップは非常に喜ばしいことであります。

本日のスケジュールを拝見させていただきますと、かなりタイトなスケジュールかと思われますけれど、今日のご講演等がグローバル社会における平和構築の大学ネットワーク形成に向けて前身する大きな可能性をもつものとなるよう、心からお祈りいたしましてわたくしの挨拶に代えさせて頂きます。どうもありがとうございました。

講義 4 **大西健丞（ピースウィンズ・ジャパン）**

「国際 NGO の平和構築活動」

皆さん、こんにちは。今日は、この記念すべきワークショップに呼んでいただきまして、お話をさせていただくことを大変光栄に思っております。私はずっと日本の NGO の中で働いてまいりましたが、実は、大阪大学の学生でもあります。いまだに学生でもありまして、PhD のコースをなかなか修了できない成績の悪い学生でもあります。故にたぶんここに呼んでいただいて、話をしろということになったのだと思います。

今からお話しさせていただくことは NGO として海外で、特に紛争地においてどういった活動をしてきたかということと同時に、活動していく中で、自分たちが置かれている条件、環境を再発見し、その中でどういう改善を施してきたかということをお話しさせていただきます。つまり、日本もずっと権威主義的な発展をしてきた国ですので、英語で言うサードセクター、シビルソサエティというものが非常に貧弱な国でありましたし、未だにそうであります。その中で、NGO をどう成り立たせるか、しかもその NGO を成り立たせるための社会的な制度、さらに後付けでどう作るかという非常に難しい課題を背負い込んでいるということに後で気がつきました。その中で経済界、政府と、いろいろ交渉しながら、場合によっては、成果を導き出し、場合によっては、挫折をし、未だに日々苦闘しておりますが、その一端を少しだけお見せできればと思います。

ピースウィンズ・ジャパン（以下 PWJ）は、1996 年に設立された比較的若い日本の NGO です。私も co-founder の 1 人でありますが､ここにいらっしゃる桑名恵さんも co-founder の 1 人です｡たった 3 名で出発した NGO ですが、私が'93 年にイラクで、小さな別の日本の NGO で働いておりましたところ、その NGO が'95 年にイラク北部からですね、資金難のために撤退するということを決めてしまいましたので、どこまで持つかわからないと思いつつも、小さな日本の NGO を作ってその名前を PWJ といたしました。名前の由来は、ちょうど'94 年くらいに、イラクの北部で、食料の援助をしておりました時に、内戦が一旦停戦になっておりました。それを知らずに、車を停めたスタッフを叱責したのですが、今停戦だから、安全だから車を停めてランチにしようということになりました。丘の上から、麦畑を渡ってくる風を見て、その風で、初めて平和を実感しました。そのような平和な風のような存在になりたいということもあって、ロマンチックな名前ですが、Piece Winds いう風に名づけさせていただきました。

写真の子供たちはシエラレオネの子供たちです。この世代はまだいいのですが、もう 1 つ前の世代は、反政府側で強制的に徴用されて、児童労働として戦士にされたり、鉱山の開発に、基本的に素手で取り組まされたりして多数の死者が出ている。このもう 1 つ上の世代の子供たちは、大変な目にあった国です。我々が最初にシエラレオネに入りました時も、多数の手のない子ども、足のない子どもがいまして、基本的には反政府軍側からの奴隷労働から脱出をしようとした子どもたちの手や足を、懲罰的に斧でたたき切った痕です。そういった障害を持ったたくさんの子どもたちが、もう大人ですけども、たくさんいた地域です。

ピースウィンズは、今まで 19 か所で展開をしております。自主的に撤退をした地域は実は 1 つしかありません。1 つは、北朝鮮です。なぜ撤退したのかというと、'98 年当時、まあ食料援助から入ったのですが、モニタリングと評価という基本的な NGO としての、事後活動が認められませんでしたので、撤退というふうに決定をいたしました。その後に日本国内でも、日本人で北朝鮮に拉致されたと言われる方々の話が大きくクローズアップされて、非常に人道援助がやりにくい環境になっております。いまだに北朝鮮においては、人道援助を再開しておりません。また単に緊急援助、Emergency Assistance だけではなくて、例えば右上の絵では、東ティモールではコーヒーの生産をもう一度

再開することを支援しまして、現在は、約 200t 少々のコーヒーを日本に輸入したりしております。フェアトレードコーヒーというブランドで、東ティモール、East Timor Fair Trade Coffee というブランドで、一般のスーパーマーケットや飲食店にも並ぶようになっていっています。現在では、増産やそれから他の地域のフェアトレードコーヒーの輸入も手がけるようになりつつあります。その他、アフガニスタンや、リベリアでも特に脆弱者グループを対象にした、職業の創出のための援助をしております。これからさらにコミュニティファンド的なものを立ちあげられたらなぁというふうに、考え出しています。

ちょっと時代は戻ります。'96 年のこれはイラク北部で、私が撮った写真です。ちょっとピンぼけで申し訳ありませんが、ほとんど家がイラク軍によって壊されました。イランから帰ってきた人々は、瓦礫のレンガを積み上げて自分たちで土を固めて、さらにラッキーな人は、国連や NGO からテントがもらえましたので、そのテントで屋根を作っているという状況でした。基本的な社会インフラはほとんど破壊されておりまして、基本的には、産油国でありながら極めて貧しい状況でありました。特にイラク北部は、サダム・フセイン政権からも経済封鎖を行われておりましたし、さらに、これは矛盾しておりましたが、国連の経済封鎖によって、イラク全体に経済制裁がかかっておりましたので、人道物資の一部を除いてはまともに入らないという状況でした。非常に厳しい状況が続いている地域での活動が始まったわけです。右はですね、我々が小学校を作っているときに近くで出てきた遺体です。100 万人以上の方が、イラクでいまだに行方不明でして、当時、まだサダム・フセインが健在で、サダム・フセイン政権がイラクの、バグダッドにあったころの写真です。ちょうどあの出てきた遺体から ID カードが出てきましたので、近くの人たちだということが分かり、その近くの村の残された人たちが、これは 10 年後の対面をしました。生きていた当時の写真を持ってきて、この写真の反対側に BBC がいたのですけども、その絵を撮っているときに、サダム・フセインはこんなにひどいことをしたというのをアピールしているときの写真です。クルド人同士も愚かにも、その内戦をよく行っておりまして、夜盗の類も横行していました。イラクの武器庫から大量に、自動小銃、機関銃、対戦車ロケット、対空ミサイルまで流出しまして、それを一般に広く流通するブラックマーケットがありました。それ故に、軍閥が発生しその軍閥の下で多くのマフィア的集団が活性化されて、死闘に近いような戦闘もたくさんありました。この人たちは、一般の民間人ですがいわゆる路上で撃たれて、たまたま打たれたのですが、流れ弾が当たって、血を流しているところをうちの車両が引き取ったときの写真です。残念ながら輸血はしましたけども、手の施しようがなくなって病院で亡くなられました。

それ以外に左上の写真は、AK47 というオートマティックライフル、もしくはソビエトライフルと言われるものです。たくさん流通しているものを持って強盗に入ってきているときの写真です。この写真は、我々の事務所を襲いに来られた時の写真で、たまたま彼らの大ボスを知っていたので、覚えたてのクルド語で、ご辞退いただいたときに記念撮影を僕がしたというかたちです。戦い慣れているゲリラにカメラを向けてもいきなり撃たれるということはあんまりないのですが、新兵が多いアメリカ軍にカメラを向けるといきなり撃たれることがあるので現場に行かれる方は注意してください。これは国内避難民（Internally Displaced People : IDP）のキャンプです。どうして IDP と言うかというと、国内の中で逃げ惑っている人たちという意味ですけども、難民条約というものがありまして、国境を越えないと実は国際的には難民として認定されません。認定されないとどうなるかというと、UNHCR をはじめ、国連機関から、十分な支援が届きません。IDP を mandate とすべきだということで国際会議がこの 20 年間行われておりますが、あまりに IDP の数が世界各地で多く、国連機関内でも、ここが難民の UNHCR に相当するような機関であるというその大きな専任の機関ができていません。国内で逃げ惑う人に関しては、難民ほど十分な支援が行ってないと言える状況です。

これは地雷です。これは対人地雷といいまして、地雷には主に 2 種類あります。対戦車地雷、これは車両を狙った地雷で、約 200 キロから 250 キロの荷重がかからないと爆発しないものです。これはですね、対人地雷といいまして、

20 から 25 キロの荷重で十分爆発するものです。大戦車地雷は、車両で踏まないと、普通は吹っ飛びませんが、対人地雷は、子供でも十分走ったりすると爆発してしまいます。右下の地雷は色んな国が対人地雷を作っておりますが、これはイタリア製です。イタリア製の地雷で、デザイン性が良くて非常におしゃれな地雷が多いのですが、こんなところにもお国柄が出るのかと思うぐらいデザインに優れた地雷でした。実は対人地雷のこのイタリア製を、私は地雷原に迷い込んで踏んでしまったことがあります。それまでにたくさんの人を地雷の被害から救うためにキャンペーンをしておりましたし、さらに踏んでしまった人を、我々の輸送車両で、緊急に救急車の代わりに運ぶということもやっておりましたが、ある日、その対人地雷が多い地域に視察に行きました時に、現地の農民に近道だからついてこいと、絶対地雷はないから大丈夫だという言葉を信じて歩きました。20 分ほど歩きましたら、ぴたっとその先頭の農民が止まりまして、農民が後ろを振り向いてクルド語で地雷と言うのです。よくまわりを見たら少し雨で削られた後に地雷が顔を出しておりまして、幾何学的に埋められていましたので、これはもうイラク軍が過去に埋めたものだということはすぐわかりましたが、20 分かけて行ったところを、帰り 1 時間以上かけて帰ることになりました。そろりそろりと踏んだ跡をもう一度踏んで、帰ったのですが、ちょうどイタリア製の地雷の黒いところのゴムが出てきて、この下に信管があるのです。これを踏んで、ゴムのところがへこんで、ペコっというのですが、下の信管を押しつぶすと、地雷が、0.5 秒後に爆発します。決して足を上げないと爆発しないわけではなくて、踏んだらそれで終わりです。映画でよく足を上げないと爆発しないというのは、本当に限られた地雷だけで、ほとんどの地雷が、踏んで 0.何秒かで爆発します。踏んだ瞬間感触がわかるわけです。完全に火薬と信管を抜いた地雷とかで、昔ちょっと現物を見て、触ったこともあり、感触は分かっていたので、足で踏んだ瞬間ペコっていった瞬間もう終わったと思いました。その後 3 時間以上病院まで距離がありますし、膝から下を普通吹き飛ばされるので、出血がひどくその出血を止めようとしてもなかなか大動脈がちぎれている場合だと止まらないというのを経験していますので、ああもうこれで終わったな、というふうにあの瞬間的に思いました。ただ、幸いなことに何も起こりませんでした。

私はあの当時まだ、初心者でしたので、やってはいけないことをそのあといっぱいやったのですが、その地雷を掘り起こして手にとって持ってみました。後ろを見たら信管が腐っていたので、「あ、信管が腐っていたから大丈夫だったのだ」と言って、地雷原にその地雷を投げてしまいました。そうすると、普通はその地雷が、吹っ飛ぶ場合もありますし、それ以外にポップアップ式の地雷というのがあって、目の高さぐらいまで飛び出してきて、爆発をして鉄鋲子を 80 メーター圏内にまき散らして、人々を殺傷するというポップアップ式のものです。それが混合して埋められているのが普通なのですけれども、そういうことをわかっていなくて素人の恐ろしさで、やってはいけない、3 回くらい死んでもおかしくないようなことをやってしまいました。たまたま生きておりますが、私のスタッフで口の悪い奴は、おまえは体重が重すぎたからきっと踏みつぶしたに違いない、信管が作動する前に対人地雷を踏みつぶしたに違いないと言っております。そういった、初心者らしいミスをたくさん犯しまして、その後それを教訓として、他のスタッフが同じことをしないように、現地でのトレーニングの際に活かしております。

あとこの赤い地雷を示す標識を NGO がよく敷設しているのですが、現地語と英語で、地雷と書いてあります。さらに髑髏マークが描いてあるのですが、経験の少ない NGO が埋めた標識でして、鉄製でできています。写真を撮って 1 週間後に行ったら全くなくなっておりました。つまり、紛争地帯のような貧困がはびこっている地域では、鉄クズは高く売れます。ですから、みんな引き抜いて売ってしまいます。ですからよく地雷ではなく花をください、という表題がよくありますが、紛争地帯に若い人が行かれたらですね、今後、紛争地帯ではお花畑には道路から外れて、急に入ったりしないでください。そこが何も手が触れられていなくて野花がきれいに咲いているということは、地雷原である可能性が非常に高い。トイレもそうです。見られたくない、怖いからと言って、道路から外れてよくわかっている人を無視して飛び出して、本当に地雷を踏んで死んだ人がいます。基本的によく人が通る、車両が通る道からあんまり外れない方がいいと思います。地雷原であっても、こういった標識をすぐ、抜いて売る輩はたくさんいます。もちろん生活がかかっていますので、そういったことが行われて不思議では全くありません。

また、現実なのでこれを全部お見せしますが、例えば右の少年は、地雷は地雷でも、民族浄化のために使われる地雷です。ヘリコプター等からおもちゃの形をしたような例えば、蝶の形をしたような地雷を作って、イラク軍が撒いておりました。子どもがなんだろうと思って手を触れると、吹っ飛ぶ仕組みになっておりまして、彼のように手がちぎれたり、失明したりという状況になります。なんでこんなことをイラク軍がやったかというと、その地域からクルド人の居住者を恐怖のあまり立ち退かせ、自分たちの支配地域に呼びこみゲリラをサポートする村々を根絶していこうという昔のベトナムでやった戦略村計画のようなことをイラク軍は考えておりまして、そのために村人に恐怖感を抱かせないと移住に応じないということで、こういったきわめてひどい手段を使ったケースもあります。

もっとひどかったのは、化学兵器。イラクの北部に関しては、クルド人に対してイラク政府は化学兵器を使いました。日本人は最近なじみ深いですが、マスタードガスと、それからサリンと VX というガスを使いまして、8 割方サリンじゃなくて、マスタードなのですけれども、マスタードガスという第一次世界大戦で使われた古いガスを吸い込みますと、例えば左下のお婆さんは、吸い込んだ鼻の基底部に、癌ができて、常に鼻が溶けた状態でした。日本の医者に診てもらって化学療法と、それから整形手術を同時にやるということを企画したのですが、残念ながらお年でしたので、手術を待っている間の数カ月の間に、亡くなられてしまいました。たぶん転移があったのだと思いますが、我々のあの機械ではその転移まで分かりませんでした。普通こういったコストがかかる病気というのは、紛争地域では見捨てられます。この老婆に関しては 5 つの NGO に見捨てられてしまいましたので、その村人に対して、他のケースも含めて希望を与えるという意味で、敢えてコストのかかる手術を行おうとしました。さらに、この村ともう一つの村で、心臓の弁膜症、心臓に病気がある子どもがいましたので、普通はやりませんが、そういう人たちが死ぬべきだというふうに規定されてしまっている中で、やはり少しでも可能性を残したいということで、日本に 2 人の心臓弁膜症の子どもを連れていきまして、順天堂大学で手術をしていただきました。100%健全に回復をして、もう一度イラクに送り届けました。現状ではもう中学生になっていますけれども、元気に走り回っております。また、万人単位、数万人単位の、巡回診療をやっています。悪路なのでだいたい四駆でメディカルチームは移動しますが、問題はイスラム圏での特に田舎は、山間の地域の中では、男性の医者が行っても基本的に女性がまともに話をしてくれません。まして自分の身体を診せるということはまず無いので、子どもが対象でも非常にコミュニケーションが難しくなります。ですから、現地で若手の女性の医者を保健省からお預かりして、我々で給料を支払い、我々でトレーニングをします。女性の医者は非常に重要でして、このおしゃれなスカーフを被った女性が実は我々の若い医者です。黒い方が村人の女性です。こういったことをしないとまっとうな医療活動すらできません。

NGO というと、小さな井戸を掘っているだけだと思われがちなのですが、実はここではウォーターポンピングハウスを建築しました。現在でも 25 万人の人に対して上水道を提供しておりますが、当時は 20 万人の人々に上水道の水を提供するために、建設されました。本来であれば、アメリカの援助庁－USAID が、作るはずだったのですが、先ほどお見せしましたように、内戦がどんどんひどくなってしまいましたので、USAID はこの事業を放棄して、本国に帰還してしまいました。ですから、誰かがこの事業を引き継がなければならなかったのですが、残念ながら NGO の数が限られておりましたので、我々が担当して当初予算の 20 分の 1 で、この浄水施設を完成させました。もちろん、全てのマテリアルを購入していたのでは、予算オーバーになってしまいますので、毎日、professional beggar として、いろんなところにコンクリートください、資材ください、ポンプください、ポンプの部品ください、配線くださいというふうに、いろんな人道機関、国連、ならびに、地元政府に、要請をしまして、半年間陳情を続けて、約 6000 万円でこれが完成しました。本来のアメリカ援助庁が計画した中では約 20 億円程度の予算が必要だというふうにされた施設です。

これは、難民が、本国に帰ってきた場合に元の村が完全に壊されてすぐ住めないというケースもたくさんありま

ので、そういった場合に半永久的に住む家を用意します。つまり、こういった家を今まで、1 万軒以上作ってまいりました。最近まで自分の家は作ることなく、他人の家を 1 万軒以上ばっかり建設してまいりました。僕もこのとき、自分が東京で住んでいるアパートよりずっといいなと思ったのですが、かなりしっかりした家を与えないと、イラクはもともと生活水準が高い国ですので、まあ他人に転売したり、これは禁止されているのですが、他人に実は転売してしまったり、放棄したりすることもありますので、アフリカ等に比べて少しスタンダードが上の、居住空間になりました。

あとは、2003 年に行われたイラク戦争中も、ずっとイラクに留まりまして、いろんな人道支援をしております。日本の外務省からは、国外退去勧告というのを何度も送られましたが、基本的には無視して、イラク国内で、100 万人対応の、医薬品と医療設備を備蓄しまして、戦争に備えました。2003 年のイラク戦争が始まる約 10 ヶ月前から、アメリカの陸軍の特殊部隊が、既にクルド人のゲリラを訓練して、戦争のための用意をしておりました。我々はそれを知っておりましたので、我々は用意をして、戦争に備えました。実は、リスクをとってイラクの中に留まったのには理由がありまして、その前の 9・11 のアフガンでの戦争の際に、2、3 カ月、アフガン国内から離れました。まあその結果、担当するはずだった IDP キャンプで、たくさんの子どもの死者を出してしまいましたので、その反省からイラクではリスクをとって、できるだけねばろうということで、留まったわけです。

ここからはですね、NGO 個々の話だけではなく、NGO を支える仕組みの話をしたいと思います。英語で言うとおそらく intermediary umbrella というふうになるかもしれませんが、個々の NGO に対して、NGO を支援するための社会的なインフラ、もしくは NGO と言ってもいいと思いますが、そういったものが必要だということで、新しいインフラ作りに取り組みました。その最初の契機は、'99 年のコソヴォの危機です。実は、コソヴォのときに、隣国のアルバニアという地域、国に、我々は展開をしたのですが、アルバニアは'94 年くらいまで鎖国をしていた国でした。極めて、ソーシャルインフラが、いい加減な国でした。道路もまともにない、それから燃料もまともに供給されないという国で、山がちな非常に山間の国でした。そういうアルバニアに、100 万人単位のコソヴォ難民が流出しまして、本来であればトラックで大量のテント、生活物資等を、難民が出てきた地域まで輸送するのですが、極めてそれが難しかったのです。テントもなく、2−3 週間、冷たい雨と雪が降る中、難民が何もなしに、葉っぱも残ってない木の根元で、何十万人もが、暮らしているという状況になりました。我々がやったことは、実はあの阪神淡路大震災の時に、日本政府と地方自治体が用意したプレハブが残っておりましたので、神戸市から 501 個、無償で供給していただきまして、それを冬が本格的に来る前にコンテナ船で輸送し、初めてハードシェルターを建てました。これが 501 戸ですから、各戸に 6 人か 7 人の人を収容することができたのですけれども、難民の総数を考えると、我々の行ったのは極めて、基本小さい相手の援助でした。

ひとつの NGO であればそれで満足したのかもしれませんが、当時、日本は Official Development Assistance−つまり ODA が、世界一だと喧伝していた時期でありました。現在では、たぶん 5 位か、6 位なのですけども、当時は 1 位でした。その中で、日本国外務省は、大規模な紛争が起こった時に紛争の中で、有効に資金を提供するスキームが、あまりありませんでした。特に、NGO に対しては、全くスキームがありませんでした。欧米の常識では、緊急の際には、NGO を活用して緊急予算の、国によっては半分近くが NGO を通して流されるというふうになっておりますが、残念ながら当時日本は、日本の NGO のみならず、海外の NGO も日本の ODA を、NGO を通して紛争地帯に活かすという割合は 0%でした。そんな中、日本政府に日本の中で改革を行うべきだというふうに発想しましたが、それを実行する前に東ティモールで、同じような緊急事態が起こりまして、たくさんの避難民が、山に逃げ込み、反政府側だと見られた方々は、家を焼かれて、10 万戸以上の家が火を点けられて焼失をしました。その中で我々は、国連の UNHCR と一緒に仕事をすることに決めまして、国連の委託金に 9 割方頼りながら、約 5200 戸の家をこのように修復したわけです。国連の委託金に頼った最大の理由は、寄付金では、集まるスピードが 3 カ月、4 カ月かかってしまうこと。そ

うするとだいたい、緊急援助が必要な時期を、脱してしまっているということがあります。もう一つは、日本政府の資金では、緊急援助でNGOを活かす機能が、全くないということでしたので、今回は、寄付金の一部と、9割方、国連の資金に頼ることになりました。ただ、日本のNGOが国連と大規模に契約を結んで活動するということもあまりなかったわけでして、この時は、イラクでの表癌が非常に有効に働きまして、日本のNGOとしては、当時、国連と契約した最大規模の契約になりまして、それで5000戸以上の家をもう一度再興することができたわけです。

先ほど申しましたように、権威主義的な、経済的な発展を遂げざるを得なかった日本の中で、後付けでサードセクターをどう評価していくかという課題に思い切りぶち当たることになります。これはNGOの力量を超えた話ではあったのですが、その中でNGOを支える、新しいイノベーションが必要だということになりまして、ジャパンプラットフォーム（以下JPF）というものを作ったわけです。皆さんお分かりのように、社会を3分節に分けると、NGOが属しているのは、いわゆるサードセクターと言われるところになります。これはJPFというものの中の略図ですが、なぜできたかというのは後の質問に譲るとしまして、基本的に外務省、それから企業連合である経団連、それから、大学等のアカデミックな人たち、メディア、自治体が入っています。こういった基本的なコアは、外務省と企業社会と、それからNGOに代表されるサードセクターですが、3つのバランスの中で組織を作り、ここにお金をためて、緊急の場合は、そのマネープールからここの意思決定・ボードの意思決定において、すぐにNGOに支出できるという仕組みに改めました。最初、政府は嫌がっていましたが、結果的には、意思決定の外出し、アウトソーシングを、外務省は認めることになります。

その後、2000年にJPFができまして、2001年にアフガニスタンの緊急援助というふうになったわけです。時系列を反対に戻っておりますが、2001年の7月、ちょうどアフガニスタンの北部で、先ほど申しました我々担当すべきだったIDPキャンプですが、6000人の人たちがテントではなくて自分たちのぼろ布、ぼろぼろの毛布とかぼろぼろのじゅうたんをテント代わりに木で加工しまして、タリバンの管理のもとに暮らしておりました。当時、ご存じのようにタリバン政権下で、基本的に音楽も、映像を撮るものも、写真もですが、ほとんど禁止の状況でして、もちろん、女性がブルカを被らずに外出するのも禁止されていました。IDPキャンプを案内してくれたタリバンの将校、彼は英語ができました。彼が英語を話すことができたことによって、いろいろとコミュニケーションができたのですが、カメラで撮らないと日本の人たちに対して説明できないと申しましたら、自分は許可できないけれども、向こうを向いている間に撮るのだったら、OKだということで、彼が向こうを向いている間に、当時出てきた、薄型カメラ、カードのようなカメラで撮った写真があります。

その後に、9・11が起こりまして、すぐに緊急援助として、日本のNGOが、JPFの支援を受けて展開をしました。まだ、1団体2団体しか、紛争地帯に出向く能力がなかった日本のNGOですが、JPFの支援を受けまして、アフガニスタン、パキスタンという難しい地域に9団体が、短い間の期間に支援開始を決定しました。JPFという、中間組織ができたからこその成果です。その内の1つのPWJは、JPFの支援も受け、先ほどの避難民キャンプに対して、まともな冬を越せるテント、それから食糧、それから毛布、その他の生活物資を輸送することを決めました。問題は、アフガンの北部でしたので、アフガンの真ん中にヒンズークシ山脈という、6000メーターを超える、山々が横たわっており、これを冬寸前のなかでどうやって超えるかという難題に直面します。35%に関しては、アントノープという、当時世界で1番大きかった輸送機をウクライナからチャーターしまして運びましたが、全部飛行機で運ぶと、輸送費が大半になってしまいますので、65%はトラック何百台のコンボイを組織しまして、高い峠を越えていくことになります。カイバル峠はまだ低いのですが、1番我々が驚いたのは、サラン峠という4200メーターの峠で、それをしかも冬季に越えるということになりまして、まだ当時、対戦車地雷がたくさん埋まっておりました。サラン峠は、アレクサンダー大王が、インドに向かう際に越えようとして越えられなかった峠でありまして、その歴史的な話を知っておりましたので、非常に躊躇いたしましたが、ここしか道はないということでしたので、敢えて冬季に4200メーターの

富士山より高い峠を越えていくことに決定しました。その結果、たくさんのうちの車両以外に国連の車両等も、同時期に、トライをしたのですが、たくさんのトラックが、崖下に落ちました。我々のトラックも 1 台落ちました。たまたまドライバーは飛び出して助かっておりますが、何十台というトラックが崖下に落ち、それから対戦車地雷を踏んでドライバーが何十人も死んでおります。そういった、あの厳しいミッションの中で、我々幸い死者は出なかったのですが、極めて厳しい峠を 1 番先の方で越えなければいけないという事態に直面しました。もう道路がつるつるで、ランドクルーザーで、チェーンを巻いても滑って止まらないという状況でありました。ここをなんとか 200 台近くのトラックを無事に通しまして、先ほどの国内避難民の IDP キャンプに到着したわけです。こうやって、配給物資を持って、あの平野に冬が降りてくる前に波及を始め、先ほどのぼろ布だったテントを全てまともなテントに張り替えて、なおかつ、まともな運営が行われるキャンプになりました。これはひとつの NGO の力では全く不可能な力でして、JPF という中間組織を作っていたからこそ、可能だったと思います。当時我々がここで、拠出したお金は、2 ヶ月間で 5 億円です。今まで日本の NGO が、そんな大金を短期間に集中して使う、しかも大規模なミッションを困難な中で成し遂げるということは、単体では不可能でしたが、中間組織を作って可能になったわけです。あとこれは、日本の帝人という化学繊維メーカーと一緒に共同で開発したもので、パラグライダーの素材を使っておりますので、非常に軽くなって、小さくなる、コンパクトなテントです。この 1 つを、空気を入れますと、約 30 分で立って、約 180 人の人が、1 人 1 畳であれば、寝て暮らせるくらいのスペースをやります。これは海外だけではなくて、国内でも使うことになりました。もともとはあのコソヴォのようなところで、輸送が極めて困難な地域で、簡単に運んで提供できるテントを探した結果、日本の技術を使って製作することになりました。現在国内に企業の協賛を得て備蓄したものも含めて、6000 人分あります。もし、国内で大規模な災害が起こった場合でも、6000 人分の避難所を 1 番速く、まあ 1 番コストが少ないかたちで、拡大できます。だいたい JPF は 10 年間で 130 億円から 140 億円の支出を日本の NGO に対して行っております。8 割方が外務省のお金ですが、2 割方が企業等からの協賛です。もうちょっとこの企業の協賛を増やしていきたいと考えております。

新潟、2004 年の地震では、先ほどのバルーンシェルターを使いまして、国内の企業と、避難民の支援を行いました。今後、日本では、極めて大規模な地震が予想されていますので、もしそれが起こった場合には、日本の政府自治体だけでは対応できない数の避難民、それから、死者が出るというふうに想定されています。その際に、今まで戦力として全く想定されていなかった企業の力を、1−2 週間であれば、社員とそれから資金と、技術、全て動員していただいて、頑張っていただく仕組みを現在作っております。シビックフォース、つまり市民の力というふうに名づけた社団法人を核にしながら、現在、大きいところですと、スーパーマーケットのイオン、ヤマト運輸さん、すき家とか、そういったフードチェーンをご存じだと思いますが、その他、たくさんの企業が名乗りを上げて、最初からの覚書に参加してくれていまして、もしも大規模な災害が起こった際には、国や自治体で賄いきれない場合には、税金を一銭も使わず、企業が、専門的な分野で参画をして、食糧を出している会社は食糧を、輸送が専門の会社は輸送を、それから、イオンみたいに、全てができる会社は、全体のプラットフォームを提供するとか、そういった取り組みをどんどん進めております。

実は NGO ですがヘリコプターも所有しておりまして、初期の偵察も含めて、速攻に状況の把握を行えるようにしたり、バルーンシェルターを提供したりします。もっと細かいアイデアとしては、犬や猫を飼っている人がたくさんいらっしゃいますので、その人たち用のテントを張り、そこの部屋を、例えばペディグリー・チャム、これはペットフード産業の会社がスポンサーをし、人を出して、面倒をみるという仕組みにしてあります。また大学病院も含めて、対応してくれるという覚書を交わしております。基本的には税金は一銭も使わず、今までよりも少しレベルの高い避難所が運営できるようになりつつあります。もちろん国内で、こういうプラットフォームが必要だということで始めたのですが、現在では、この噂を聞き及びまして、韓国、台湾、それからフィリピン、インドネシア等で、この仕組みを、それぞれの地域・国で、発展させられるかという議論を始めております。人材トレーニングの資金援助等を我々の方で行いだしておりまして、できれば環太平洋で災害の際に、助け合える仕組みを作りたいなというふうに考えて、

現在、行動をしております。
　だいたい、そういったところで終わりたいと思います。ありがとうございました。通訳の方、ありがとうございました。（会場拍手）

小山先生：
Thank you so much. He talked about his extraordinary experience, with gentle smile. You should have many questions or many comments.
A few minutes left. Anyone?

大西氏：Any questions? Or any comments?

北須賀さん：
すてきなプレゼンをありがとうございました。どのような活動をされているのかがすごくわかって、大変勉強になりました。1 番興味深かったのが、シビックフォース、いろいろな企業、大きな企業がそれぞれの専門分野で、災害があった時に活動するっていうそれすごく、なるほどっていうアイデアだなって思ったんですけれども、その企業を、何か災害があった時に、活動してくれないかっていう話をした時に、すべてうまく分かりましたって言っていただいたのか、それともやっぱり、困った、苦労した話とか、あれば教えていただきたいです。

大西氏：
　はい。企業の方、それからドナーの方とお話しする時は、だいたい人にもよりますが、2〜30 のうちの一つがものになると考えた方がいいと思います。それは基本的に一般のカーセールスとか営業と一緒です。くじけないこと。それで、相手のインセンティブをしっかり見ながら、交渉することですね。例えば、まあこんなこと言っていいのか分からないのですが、イオンさんの場合は、大規模店舗を、地域に出店する際に、商店街とかと、軋轢があったわけですね。そうすると、地元に対して何か社会貢献をしなければならないという環境をお持ちだったわけです。大規模災害の時に、お客様が逃げ惑っている中で自分たちがすぐ商売を再開するっていうのはまず不可能な政治的条件。その中で、イオンさんは 2 週間であれば自分たちの社員も総動員して、その避難民のための、支援をしたいということをおっしゃっていましたので、会長レベルとお話をして、たくさん投資をしていただきました。
　例えばバルーンシェルターを我々の予算で買わずに、1 基あたり、300 万円ぐらいしますが、それを 30 基ぐらい買っていただきました。当時は黒字だったので、店の従業員、もしくはその家族、もしくはお客様を守るためのまあセキュリティの経費として計上すれば、経費として落ちます。分かるでしょうか。寄付しなくていいわけです。だからそのへんも話し合ったうえで、経費として落ちるように処理をしていただいて、いざという時は、我々と一緒に使わしていただく。しかも、全国で使わしていただくという覚書だけ結ぶ。でも経理上は経費で落とせる。そういったその、相手の企業会計の中で、簡単に、お金を出せるような品目を選んで、交渉させていただくというところから始まっています。他にもいろいろ相手様の置かれた状況をよく考えた上で交渉しないと、簡単に寄付とか協力は出てきません。あともう一つ企業っていうのはお金ばっかり頼まれるって印象があるのですが、そうではなくてこれは国内災害の場合は、あなたたちはドナーじゃなくて、支援実施者です、一緒に活動してくださいと、それが社員の士気にもつながるし、企業の、格の向上にもつながるんだから、是非 1 週間 2 週間大きな震災が起こったら、無視できないのだから、お金だけ出して終わりと思わないでほしい、というふうに説得をしております。

北須賀さん：ありがとうございました。

小山先生：Another and last question?

Sally： Good morning, Sir.

大西氏：Good morning.

Sally：
I am from the Philippines. In your presentation I saw a lot of children, victims of this war. I am interested in what intervention you give to this children to at least break over the trauma of this war. Because me, as a victim of war, until now, I can still feel the fear. I can't remember how I run for my life. We were in between the military and Muslim revels. Long time ago, but until now I have that in my subconscious. I have that in my memory. I hope this children （are all?）the victims of the war, can be given the intervention that they will be able to break over the trauma of this war. Thank you.

大西氏：
おそらくミンダナオから来られた方だと思いますけども、我々もそこは課題でして、子どもは最もトラウマを背負いますが、それだけじゃなくて一般の方もたくさんトラウマを背負われた方がいらっしゃいます。残念なことですが、人道援助団体として、その普通の生活に戻すというところまでも出来ない中で、なかなかトラウマだけをケアするというのは非常に難しい状況です。ご存じのように、トラウマケアというのは、現地語ができないと意味がほとんどありません。現地で、そういったトラウマケアを行える、心理療法士等の人間を確保するというのは極めて難しい状況にあります。我々が行った地域は、フィリピンと違って、メディカルとか心理学的な人材が多くいない地域でした。
ですから、その通常の幼稚園の運営の中で、トラウマを克服していくという課題を、日本のトラウマケアの専門家の意見を入れて、幼稚園を運営する程度に留まっています。ただ、おっしゃるところは非常に意味があると思っていまして、現在、日本の大学でも、トラウマケアを専攻されている方が増えてきています。そういった大学・大学院と協力をして、現地で、どの程度までそれを緊急援助の際に活かすことができるかという話し合いを始めております。ただ我々のキャパシティには限界があって、十分なところまで行っていませんが、是非、そういった人材を、別に日本人である必要はないので、フィリピンの方が、大学教育とか進んでいるのではないかと思うことはよくあります。是非フィリピンからもしそういう人材を供給してくれれば、我々のような仕組みは NGO やチームと一緒に、現地に入って、もし自分が、過去にそういう経験をした人が、そういう仕組みを作れるとしたらよりよい仕組みができると思います。是非、フィリピンや他の諸国からの人材を、募りたいと思っています。

小山先生：Thank you.

小山先生：ではこれで、大西先生の発表を終えたい…先生じゃないですが大学院生ですが…（笑）

大西氏：どうもありがとうございました。（会場拍手）

List of Participants

Doshisha Women's College of Liberal Arts	Anna Sasaki Momoko Kobayashi	Student Student
Ewha Womans University	Jungji Young MinJu Park	Faculty Student
Japan Women's University	Aya Osaka	Student
Kenyatta University	Fatuma Chege Lucy Mbirianjau	Faculty Student
Kobe College	Kazuhide Nabae Minato Kurokawa	Faculty Student
Konan Women's University	Mao Takahashi Akiko Miwa Mari Ishida	Faculty Student Student
Mills College	Margo Okazawa-Rey Amy Singh Doung	Faculty Student
*Nara Women's University	Shyunsuke Koyama Mitsuyo Matsunaga Risa Kitasuga Miyu Yoshimura Chisa Iwasaki	Faculty Faculty Student Student Student
*Ochanomizu University	Seiji Utsumi Megumi Kuwana Kyoko Arai Noriko Narita Chikako Saigo	Faculty Faculty Student Student Student
Philippine Women's University	Ida Yap-Patron Sally Echavez	Faculty Student
Vassar College	Maria Hantzopoulos Natasha Mir	Faculty Student

(Listed by alphabetical Order)

*Organizer of the Workshop

International Peacebuilding Workshop

" Living Together"

~ Developing intercollegiate network to implement the peace building activity in the global society~

December 6th ~December 9th, 2010

@ Ochanomizu University, Tokyo
@ Nara Women's University, Nara

Participating College/University

Ochanomizu University/ Nara Women's University/
Doshisha Women's College of Liberal Arts/
Ewha Womans University/ Japan Women's University/
Kenyatta University/Kobe College/
Konan Women's University / Mills College/
Philippine Women's University/ Vassar College

奈良女子大学 Nara Women's University
Ochanomizu University
甲南女子大学
KOBE COLLEGE Founded in 1875
MILLS
日本女子大学
KENYATTA UNIVERSITY Elimu Ni Nguvu
Doshisha Women's College of Liberal Arts Founded in 1876

Outlines of the Workshop

1.Date Dec.6th-Dec.7th Ochanomizu Unoversity
Dec.8th-Dec. 9th Nara Women's University

2. Purpose To exchange the research activities, ideas and the challenges towards Peacebuilding in the global society. Implementation of building the intercollegiate network among renowned women's or former women's college/university so that this workshop will lead to collaborative research in the next fiscal year.

3.Praticipants Faculties and students of women's college/universities or former women's college/university from Japan and overseas.

4.Accomodations

Tokyo: **Sunshine City Prince Hotel**
1-5 Higashi-Ikebukuro 3-chome, Toshima-ku, Tokyo 170-8440 Japan
Phone: +81-(0)3-3988-1111

Nara: **Nara Royal Hotel**
Hokkeji-cho, Nara 254-1 Japan
Phone:+81-(0)742-34-1131

5.Workshop Venue

Tokyo: **Ochanomizu University , Global Collaboration Center**
2-1-1 Otsuka, Bunkyou-ku, Tokyo 112-8610 Japan
Phone: +81-(0)3-5978-5546

Nara: **Nara Women's University, International Exchange Center**
Kita-Uoya-Nishi-Machi Nara-city 630-8506 Japan
Phone:+81-(0)742-20-3292

Traffic Access to Nara Women's University

Traffic facilities
located north of Kintetsu Nara Station at distance of about a seven-minute walk

What to Bring

*Name card : Necessary for entering the Univ. ,recommended to ware through the workshop.

*Change (yen) for public transportation

*Home medicine

*Stamp (Inkan) Participants from Japan , necessary for paper works for daily allowance

Emergency Contact Person Tokyo- Kuwana 090-1963-2407
Nara- Koyama 070-6663-3539
Matsunaga 090-9864-6174

Traffic Access to Ochanomizu University

Traffic fare

*Higashi Ikebukuro between Gokokuji Station **160 yen** per ride.

Economical Ticket (If you are to travel in various places)

***Tokyo Metro One day Open Ticket** (Good for one day of unlimited rides on all Tokyo Metro lines. It can be purchased on the day of use or in advance.) **710 yen.**

***Tokyo One-Day Free Ticket** :Allow unlimited use of Toei subways, Toei buses, the Toei Streetcar (Toden) Arakawa Line, and the Nippori-Toneri Liner, as well as Tokyo Metro and JR East trains within Tokyo's 23 wards for one day **1580 yen.**

6

Time Lines

Day One (Dec.5th)

*Faculty and student from oversea

Pick up at the airport arrival gate by the Ochanomizu Univ student volunteer (Please look for the welcome board). Take limousine to hotel 60~70 min.

*Faculty and student from Kansai area

Self hotel check in.

Day Two (Dec.6th)

*Faculty and student from both oversea and Kansai area

~8:45 Breakfast at the hotel

9:00 Pick up at the hotel lobby by the Ochanomizu Univ student volunteer
Walk to Higashi Ikebukuro station (5 min), take Metro-train to Gokokuji station(2 min), walk to Ochanomizu University (8 min)
(please have yens for the train fare in your hand)

10:00 Workshop Orientation. Paper works for the redemption for the daily allowance (The amount was calculated by the University policy.)
Grouping

12:00~17:00
Lunch and student interacting activities by the group. Introducing Japanese culture (Free time)

Day Three (Dec.7th)

*Faculty and student from both oversea and Kansai area

~8:15 Breakfast at the hotel

8:30 Pick up at the hotel lobby by the Ochanomizu Univ student volunteer
Walk to Higashi Ikebukuro station (5 min), take Metro-train to Gokokuji station(2 min), walk to Ochanomizu University (8 min)
(please have yens for the train fare in your hand)

9:30 Workshop
Opening greeting speech by Dr. Hanyu, President of Ochanomizu University
Guest greeting speech by Mr.Asai, Ministry of Education
Purpose description for the workshop by Dr. Utsumi, Director of Global Collabration Center Ochanomizu Univ.
Introducing participating college/university
Commemorative photo session

10:30~10:45 Short Break. Preparation time for the lecture

3

Day Three (Dec.7th) continuous

10:45~11:30 Lecture 1 : Japanese aid and global development
Dr. David Leheny, Professor of East Asian Studies Princeton University

11:30~11:45 Short Break

11:45~12:30 Lecture 2: Peacebuilding activities of International Volunteer
Dr. Shinji Nagase, UNV

12:30~13:30 Lunch Break (Lunch is prepared by Ochanomizu Univ.)

13:30~14:15 Lecture 3: Peacebuilding support activities of JICA
Mr.Toshinao Abe, JICA

14:15~15:00 Tea Break

15:00~17:30 Presentation of representing college/university oversea
5 universities X 30min. (including Q&A)

17:30~17:45 Short Break

17:45~18:15 Presentation of Kanto area universities

18:15~18:30 Wrap-up, Photography

18:30~20:00 Dinner Reception by Ochanomizu University

20:00~ Adjournment, leave Ochanomizu Univ. for hotel by Metro-train.

Day Four (Dec.8th)

*Faculty and student from both oversea and Kansai area

~8:15 Breakfast at the hotel

8:30 Hotel check out. Pick up at the hotel lobby by the Ochanomizu Univ student volunteer .Walk to Higashi Ikebukuro station (5 min), take Metro-train to Tokyo station(2 min). 7 min walk to Ochanomizu Univ.
(please make sure to check out by 8:30 also please have yens for the train fare in your hand)

9:20~12:50 Take bullet train and Knitetsu train for Nara

12:50~13:00 Luggage pick up to the hotel

13:00~18:00 Student exchange activities

18:00~19:30 Nara Royal Hotel (Dinner Reception)

4

Day Five (Dec.9th)

*Faculty and student from both oversea and Kansai area

~9:15 Breakfast at the hotel

9:30 Pick up at the hotel lobby by the Nara Women's Univ student volunteer . Take shuttle to Nara Women's University

10:00~10:10 Opening greeting speech by Dr.Noguchi, President of Nara Women's Univ.

10:10~10:20 Purpose description for the workshop by Dr. Koyama, Director of International Affairs Nara Women's University

10:20~11:05 Lecture 4: Peacebuilding activities of International Non-Profit Organization. Mr. Kenjo Ohnishi, CEO of Peace Winds Japan

11:05~11:15 Short Break

11:15~12:30 Presentation by the Faculty & Student Overseas
5 colleges/universities X 15 min.

12:30~13:30 Lunch Break (Prepared by Nara Women's University)

13:30~14:00 Presentation of Kansai area college/university Faculties & Students

14:00~15:00 Group Work (Preparation for the presentation)

15:00~15:30 Tea Break

15:30~17:15 Group Work Presentation (4 groups X 20 min)
Workshop review by the Faculty

17:45~ Adjournment , Free time

Day Six (Dec.10th)

*Faculty and student from both oversea and Kansai area
Breakfast at the hotel
Self Check-Out
Depart for home

5

３　国際学生フォーラム

３－１　国際学生フォーラム　入江昭ハーバード大学名誉教授　特別記念講演概要

The Making of a Trans-Pacific Partnership：
The Role of International Organizations

The ida of a “trans-Pacific partnership” reflects contemporary awareness of important historic trends, emphasizing a regional rather than national view of world affairs. Beyond economic coordination of the Asia-Pacific rim, that would or could a Trans-Pacific partnership entail ? This lecture reviews economic, political and cultural issues and possibilities. In particular, it considers the role of international organizations. Transnational objectives have been actively pursued by transnational organizations, and their accomplishments have served to sustain the idea of unity of human kind, the idea that there is a human community alongside with, sometimes transcending, national identities. Such international cooperation and transnational efforts would have to be strengthened if there were to develop a viable trans-Pacific partnership.

３－２　参加者発表概要

Presentation Titles and Summaries

■Vassar College

Christi Barrow (Japanese & Psychology);

“The Relationship between Peace and Mental Health

As a double major in psychology and Japanese I think that the mental health of the citizens in a country is extremely important to the nation’s overall well-being. Before an individual can work towards peace on a larger scale (be it peace in the home, town, nation or world), they need to first find peace within themselves. This presentation will discuss various mental illnesses present in both America and Japan and their relationship with peace. There are four main parts to the presentation. First I discuss the effect that three prevalent mental illnesses have on inhibiting the promotion of peace. Next, I discuss how two particular mental illnesses encourage violence. After that, I illustrate the effect that war has on the mental health of those who are exposed to it. Finally, I conclude with one suggestion as to how we can help buffer the negative effects of these mental illness: reduce the stigma attached to them. If there is understanding, many more mentally ill individuals will feel more comfortable seeking the treatment they need and/or will have an easier time re-integrating into society. Understanding can help promote peace in many different ways, and I believe that the various negative effects and social alienation that mental illnesses can have on individuals are often underestimated or overlooked.

Veronica Weser (Japanese & Cognitive Science);

“Building Peace through Language”

Humans rely on language for everything from media to politics. Communication through language can bring us together, but misunderstanding and an inability to communicate generates conflict that can force us apart. Governments rely extensively on language and policy is often designed to create linguistic uniformity for the sake of fostering a sense of national identity. However, in nations where many languages are spoken, these policies can result in the destruction of minority languages.

Instead of restricting the languages used for official policy, multilingualism should be encouraged. Children who grow up learning and speaking more than one language have an easier time acquiring a third or fourth language, and studies have demonstrated that one's ability to speak another language can change one's attitude toward the speakers of that language for the better. Our growing global community must increasingly emphasize the importance of other cultures, and the more varied the exposure of our children to foreign cultures, the more willing they will be to seek to understand those cultures. Communication can lead to understanding and appreciation, which intern will promote lasting peace.

Natasha Mir (Peace and Conflict Studies);

"Grassroots Activism and Peace building"

My presentation highlights the grassroots human rights and interfaith social justice organizations and projects that I've been involved in during my time at Vassar. It also touches upon my professional internship experiences and my academic background as a peace and conflict studies major with a regional focus on the Middle East who is currently writing a senior thesis on nonviolent, religious movements for peace in the Palestinian territories.

Sharon Freiman (Economics);

"Seven Case Studies of Human Rights Education"

For the past year and a half, I have been collaborating with Professor Tracey Holland from the Education department (along with a variety of other interns) on a study funded by the United States Institute of Peace. Tracey received a grant to seek out and compile a report on seven instances of Human Rights Education (HRE) programs in post-conflict societies around the world. We chose seven cases based on Tracey's connections and my own research of potential participants. It was difficult to narrow down the list, and cases we had thought were certain to be included often didn't make the commitment to join our team. Once we had the researchers on board, I created a unique page in our wiki (http://hresocialimpact.pbworks.com/) to post all the information we had received from him or her, and to allow them access to updated information about the process of the project and other people's cases. This allowed for a centralization of information that we could monitor directly from Vassar, but that could be used by the researchers as a resource as well as a tool to

track their progress. While each case is entirely unique, they all have a striking recurrent theme: we found overwhelming support for HRE and the programs each individual was fostering. It was a far cry from the many barriers that obstruct knowledge and dissemination of HRE. To this end, we drew up a capacity building questionnaire, seeking to find out more about the impact our project had on the community and the researcher.

At the moment, we are in the process of editing and perfecting each case study. We have four already at the final stages, to be sent shortly to yet another editor. The three remaining require more work in their structure and composition, which Tracey and I are doing nearly every day. The first draft of our report is due on March 15, and we are very excited about the next stage—dissemination. Overall, the experience has been marvelous, as I have had the opportunity to interact and meet many important individuals around the world. Each one of our researchers is striving to make a difference to avoid future conflict through HRE. We hope to spread the word about their efforts as widely as we can.

Stephanie Rapp (Political Science, Africana Studies);

“The Failure of Peacebuilding in the DRC; the Dangers of Excluding Women”

I will begin my presentation with an introduction to the DRC and the conflict, then move on to some facts about gender-based violence in the conflict. I talk about Congolese views on peace, and the history of attempted peace accords in the country. Then I'll explore some reasons why women have been left out of the peace process, and conclude with some thoughts of my own about how women should be more involved, and what difference that will make for peacebuilding.

Emily Moog (Asian Studies);

“Female Politicians in Peace (and War)”

My presentation discusses women in politics, their degree of representation, and some examples of famous female politicians and how they have participated in international peace-making (or peace-breaking). I conclude by stating that female politicians, like all women (and all men), are individuals. No single paradigm applies to all female politicians' opinions and actions, and peace cannot be accomplished by the actions of only one gender.

Noam Mayer-Deutsch (International Studies);

“Origins of American Buddhism”

For my presentation, I plan to begin by presenting some interesting issues I came across that really got me interested in American Buddhism. These often take the form of bipolar conflicts, or dualities, which is particularly interesting because of the Buddhist belief of non-duality. This, however illustrates the diversity of Buddhism, which is increased since its arrival to America. Briefly, I will summarize how Buddhism came to America historically, and how it was initially received, before moving into the modern population of American Buddhists. Of course, even defining American Buddhists is difficult, so I will bring up some ways that people attempt to define Buddhists, and the three communities that then become distinct. After outlining Buddhism in America, I will describe its positive influence as a force of peace. I will clearly describe how Buddhist beliefs support peace by describing the Four Noble Truths and the Eightfold Path. The way Buddhist philosophy supports peace in action, however, is a newer interpretation of Buddhist beliefs. I will explain how beliefs are interpreted to form “Engaged Buddhism,” which considers activism as a devotional practice of Buddhism. For example, Thich Nhat Hanh did important work in Vietnam working for peace and now runs a center in France. Glassman Roshi also does extensive social work in New York combating homelessness and poverty. In addition, there are growing international organizations that work for peace and social reform reinforced by Buddhist beliefs. Buddhist philosophy provides a compelling argument for peace and gives useful instruments for pursuing peace. Yet it can be in opposition to other peace and reform endeavors. In the past it has even been involved in war and extremism, though that is a situation where the teachings were clearly manipulated. Overall, Buddhism has some valuable lessons for American culture, particularly that we can work for peace in our everyday lives.

Jenna Kronenberg (Language Development and Communication);

“Implications of Peace Education for Youth”

Summary: In this presentation I will be discussing the process of developing an after-school learning unit for middle-schoolers that revolves around social justice. Included in my PowerPoint is an explanation of the project, key theorists kept in mind during the development, a sample lesson plan, and a description of the implications for both the curriculum writers and the students.

Sandy Wood (Education)

“Cultivating Peace in a Garden of Love and Compassion: Reflections on ‘Jhamtse’ and Jhamtse Gatsal Children’s Community”

“Jhamtse” is Tibetan for “love and compassion,” and “gatsal” for “garden.” Sandy will talk about her experiences visiting Jhamtse Gatsal, a residential school and home for children in a remote part of the Himalayas, where malnutrition and disease are common and opportunities for the future are few. Reflecting also on her own educational upbringing, she discusses the importance of an education’s quality--the vision inspiring it and the relationships in which it’s rooted--and the implications of this work throughout the surrounding region and the world.

■Ochanomizu University

Kyoko Arai (Faculty of Letters and Education Global Studies for Inter-Cultural Cooperation)

“International Cooperation and Me”

“For majoring in Global Studies for Inter-Cultural Cooperation, I have been studying about International cooperation towards peace building and geography and had been deeply involved in peace building activities at JICA (Japan International Cooperation Agency) and Student’s Activity in Campus, FOOT. I’d like to share and have your opinion onto the college student’s volunteer to the International Cooperation.”

Mamino Iba (Faculty of Human Life and Enviornmental Science)

“Sharing Peace from Textbooks”

“Through my experience as been educated in the U.S and in Japan, I had always wondered how the point of view changes towards the historical events, WWⅡ. As the third generation to after the war, the only gateway to learn the tragedy is through Text Books. But it seems that because the Text Books are written in interests for own county, it seems that the students are mostly influenced by them. For example, the opinion to the Atomic Bomb. I strongly believe if the consensus is made in the textbooks than there will be less conflict between the countries that will lead to the world peace.”

Mako Furushima (Faculty of Letters and Education)

“How the International Cooperation Should Be~ Refering to Ashinaga Foundation~”

“War and poverty are threats to world peace. Countless people and organizations have worked long and hard to address these problems. Yet, despite their efforts, many issues still remain unresolved. What is the reason for this? And how can we achieve real, concrete results? In this speech, I will describe my own experience with one method of support originating in Japan, and then suggest ways that future generations can apply this method on a broader scale, in areas such as international aid and development support.

Misaki Karube (Faculty of Letters and Education Languages and Culture)

“Grass-Roots Communication”

“What is your image towards the word “Peace” or the essence that makes up “Peace”? I would like to share my ideas what the peace is and how to build it by ourselves. I believe the peace comes from “friendships”. My thought comes from my experience with my Chinese friend. I’d like to share the episode and build friendship with Vassar College students through this Forum.”

Riko Fujioka (Faculty of Letters and Education Language and Culture)

“Education as Supports for Developing Countries”

“What do you think the most effective way to support the poor in the developing countries? I think education supports, especially for women, is the key to solving the issue. As being brought up in three different countries and my various volunteer experiences, I’d like to share the reason I had came up with this opinion.”

Erika Komatsu (Faculty of Letters and Education Global Studies for Inter-Cultural Cooperation)

“Reduce Poverty through Education and Business”

“How come the conflicts in the world never seem to end. By Norwegian scholar Dr. Johan Gartsung , even though the region is not in the state of war, if the poor, poverty, suppression, or the prejudice exist than they are in the “Negative Peace World” . Adding that, no peace could be created without eliminating the chaos caused by the poverty.

For this reason, I am interested in Social Business, sustainable approach to reducing the poverty. I'd like to share social business through my experience in the Graminn Bank as a intern, my discovery and the possibility to "get out of the poverty" and to build the true peaceful world.

Misaki Tomitaka (Facultu of Human Life and Enviornmental Science)

"Education Related Peace"

"What is peace? I believe that the very fundamental idea of peace today is having a place to live, healthy food to eat, clean water to drink, decent cloths to wear, the freedom and rights of human being. These days, not many are not in the peace and I have always thought that eliminating poverty is one of the most achievable goals. And I strongly believe that the education plays key role to making peace. In my speech, I'd like to share my volunteer experience in Taoyuan Migrant School in Beijing and show the idea to live together in peace."

JeYoung Seol (Faculty of Letters and Education Global Studies for Inter-Cultural Cooperation)

"Does peace exists in Korea peninsula?"

"On November 23rd, 2010, bombs were dropped in Yeonpyeong Island from North Korea. However, many other Koreans including me knew that the war is not going to happen.

In spite of all the aggressive actions taken by the North Korea, how come we all know that there might be a little chance of war. In my speech, I'd like share my opinion about the status of peace in Korea peninsula."

Mina Ashizawa (Faculty of Science, Mathmatics)

"Do you have a Dream?"

"Do you have a dream? My dream is to teach the joy of learning. Because I believe people have always been eager to learn. Sadly, there are children who does not have chance to experience this feeling. And because of this reason the children cannot get out of their poverty status. Because I'd always been fond of math and believe math concepts are universal word to any country, I believe the math exist to bond the world as one and peace. Therefore, teaching math is the step and a big cooperation to the world peace.This is my dream."

Noriko Narita (Faculty of Letters and Education Global Studies for Inter-Cultural Cooperation)

“My experience at Palestine”

“ I’d like to share my experience at International Volunteer Center of NGO, and working as an volunteer at Palestine. Through the interaction with the Palestine people, I had many discoveries and gained ideas how we should act to create the world peace. To live together.”

３－３　参加者レポート

○　芦沢未菜　　理学部数学科１年

“国際学生フォーラム　Vassar College”

　この「共に生きる」と題する企画に参加するのは初めてでしたが、たまたま　学内でポスターを見つけ、グローバルセンターに足を運んだのが始まりでした。
私は数学を専攻しており、特に学校で国際協力について取り組んでいる訳ではありません。高校時代に少しフェアトレードに関わっていたのと、大学で行われていた table for two などの活動に興味を持っていたこともあり、また、実際に国際交流の場で国を越えてディスカッションできるという二重の魅力を感じ今回応募を決めました。
　このような目的意識を持って海外に行くのは初めてでしたが、このフォーラムに参加して、本当に良い経験が出来たと思います。スピーチの場が与えられたこと、また、それ以上にこのフォーラムを通してたくさんの尊敬出来る素晴らしい人、仲間に出会えたことを嬉しく思っています。
　今回一緒に参加したメンバーは、海外経験も豊富で、その英語力の高さに圧倒されるだけでなく、皆、様々なバックグラウンドを持っており、知れば知るほど、すごいメンバーの中にいることを実感しました。話してみると、実際に歴史上での日本と世界との繋がり、関係を、個人の体験として感じている人が多くいることに驚きました。実際、つらい思いを経験した友達の話を聞き、平和について語り合うことができました。皆、世界に対して色々な思いを持っていて、毎日、皆と話すのが新鮮で、とても楽しかったです。
　私は、始め、このハイレベルなメンバーについていけるのか、正直不安でした。自分は何を目的としてこのプログラムに参加するのか、目標は何か、何度も自分に問いかけました。しかし、このような機会を持つことが出来たおかげで、理学部の私が、自分の専門分野を持って国際協力に関わることの意味について、自分なりに色々考えることが出来、また、将来、自分の専門分野を生かして、何か国際的なことをしてみたいと思うようになりました。これまで国際協力に関して興味はあったものの、具体的に考えたことはなかったのでスピーチという形でアウトプット出来たことは、自分の考えを整理し、発信出来たと言う点で、大変良い機会だったと思います。
　また、実際のフォーラムは５、６日目でしたが、私にとって、それまでの準備期間も大変貴重な時間でした。一週間、妥協なく、最後まで全力で取り組むことが出来たからです。毎晩、スピーチの手直し、練習をし、友達、先輩方、センターの方にもたくさんアドバイスいただき、漸くなんとか本番を乗り切ることが出来ました。夜になると共同スペースでスピーチ準備を始める人、スピーチの練習をする人、読み合いをする人、皆それぞれにスピーチに向かって頑張っている姿にとても刺激を受けました。夜の夜まで、少しでも完成度を上げようと、同じ目標に向かって頑張る、あの雰囲気が私は好きでした。皆の意識の

高さ、プライドを感じる瞬間でもありました。支えてくれる仲間、先生方なしでは、無事終えることは出来なかったと思います。皆に感謝しています。
　また、ヴァッサー大学の学生たちとの出会いも、私にとって貴重なものでした。皆、暖かく迎え入れてくださり、私のつたない英語でも、真剣に話を聞いてくれたこと、また、興味を持ってくださったことは、自信にも繋がりました。
皆、様々な活動をしており、今後また一緒に話し合いをしたり活動出来る場があれば、ぜひ参加したいと思います。
　この８日間、興奮と緊張の毎日でした。最終日、このままこの充実した日々が終わってしまうのが名残惜しく、夜通し、メンバーと語り合っていました。今回のフォーラムの意味、今後への繋げ方、自分たちに出来ること、ここでしか話せないことがたくさんありました。
このフォーラムをスピーチだけで終わりにしてしまうのは、もったいないと感じます。初めて飛び込んだ国際協力という世界で、聞いたこと、感じたことを、
私の経験だけにとどめず、もっと自分の周りの友達にも広め、皆が、少しでも興味を持ってくれたらと思います。それが、今の私に今出来る、国際協力であると思うからです。理学部では、なかなか国際協力やボランティアに関して触れる機会がありません。でも一歩踏み出せば、お茶大の中には、こんなにも熱く活動しているメンバーがいました。自分から知ろうとしないと、何も得られない大学生活の中で、これからも私は、自分の専門をしっかり学びながら、常に国際のこと、様々なことにアンテナを張っていられる人になりたいです。今回の旅で得た衝撃を忘れないよう、今後の活動に繋げていきたいです。
今回この国際学生フォーラムに参加出来たこと、本当に感謝しています。

○　新井杏子　文教育学部グローバル文化学環３年
“国際学生フォーラムに参加して”

　国際学生フォーラムに参加し、まず嬉しく思ったのは、ヴァッサー大学を訪問できたことです。2 年次に「多文化交流実習」で来日していたヴァッサー大学の学生とのグループワークを行って以来、ヴァッサー大学は私にとって、お茶大と長年友好関係にある大学、という以前に友人の通う大学として親近感のわく場所でした。残念ながら、現地でグループメイトに会うことは叶いませんでしたが、懐かしい顔ぶれにも再会し、キャンパスの雰囲気を感じられたことでヴァッサー大学をさらに身近に感じることができました。
　学生フォーラムでの発表にあたって、ネイティブスピーカーの前での英語プレゼンテーション、という課題を、私はとても大きなハードルに感じていました。前日のリハーサルまで、原稿の準備や英語に対するコンプレックスにばかり目が向いていましたが、発表を終えて、「いつも通り」「自分らしく」やることの重要性と難しさを実感したように思います。言葉の違いばかり意識して気を張ってしまうと、本来自分が伝えたかったことがぼや

けたり、人に伝える、という姿勢を忘れがちになってしまうのだと気づきました。ヴァッサー、お茶大双方の学生のみならず、先生方からもご意見やご質問をいただける発表の場で、成長の機会をいただけたことは、本当に貴重な経験になりました。

ヴァッサー大学生の発表は授業内のプロジェクトや気づきに基づいた内容が多く、海外のフィールドで外部者として感じたこと、学際的視点からの考察など、私のお茶大での学びとの相違点も興味深く感じました。同じ関心を持つ海外の大学生がどのように学び、考えているのか、直接知ることができて非常に刺激を受けました。

お茶大からの参加者は学年も専攻もばらばらでしたが、個々人の持つ豊富な海外経験や異なる視点から、平和構築というテーマを自身の問題に落としこんで考えたことで、日頃同じ専攻の友人とのやり取りでは生まれないような意見・問題意識に触れることができ、新鮮に感じました。原稿を読みあって連日試行錯誤し、2日間のセッションを終えて達成感を共有できたこと、最終日に夜通し意見交換をしたことなど、今回のメンバーから得たものは大きく、本当に感謝しています。

平和構築、という大きなテーマに関して、フォーラム全体を通じて感じたのは、私たち学生の興味関心の集積の大きさでした。立場や関わり方は違っても、文化交流、異文化間コミュニケーション、国際協力…と様々な分野からアプローチでき、また考えていくべきテーマが平和構築であり、個人レベルの意識の集積がひいては世界的な平和の実現につながる、という何人もの発表に共通した意見に、滞在中実感をともなって共感することができたように思います。この一週間で得たモチベーションや友人関係を一時的なものにせず、今後も継続させる中で、互いに学び、さらに成長していきたいです。また、ヴァッサー大学とお茶の水女子大学の間にも、今後とも交流が盛んに行われればと思います。

○　射場万美野　生活科学部人間生活学科生活社会科学講座　２年

“Student Symposium on International Peace Building” に参加して

このシンポジウムに参加したことによって、１９年間生きてきた中で初めて真剣に「平和」について考えた気がします。電車の中でスピーチの相談に乗ってもらったり、前夜に書き直したりと、すごく大変でしたが、国境を超え、同年代の人々とこのようなシリアスな話題について話し合える機会がもらえたことをとても感謝しています。

日本を発つ前、参加者が決まった頃、他の参加者の話しを聞いていると、皆なにかしらのＮＰＯやボランティア活動をしている中、私は一度もボランティアをしたことがなかったし、実際世界平和構築のためになることを今、現在していないということから、初めてお茶の水女子大学の生徒と話し合いをした時、自分ははたして参加してもよいのだろうかと悩みました。また、ヴァッサー大学の参加者たちとテレビ電話をして、スピーチのタイトルと概要を聞いて、さらに不安になりましたが、世界平和構築へのアプローチの仕方が皆とちがっても、これは私なりのアプローチなのだということで、参加を決意しました。

そして現地についてから。一週間があっという間に過ぎました。到着してからの数日間は時差ボケとの戦いと、夜はスピーチを何度も読み返し、他のお茶の水女子大学の生徒と相談しながら、書き直していたのを覚えています。そして、四日目にお茶の水女子大学の生徒たちだけで発表の練習をした時、いろいろな視点からの意見を聞けたことはとてもためになったのですが、発表の前日にスピーチの構築を直すというのは大変でした。他の生徒も同じ意見をもっていたので、今度からは、日本で一度発表の練習をしたほうが良いと思います。

発表の二日間。私は初日の前半で発表したので、リラックスしながら他の生徒たちの発表を聞けました。そこで気付いたのが、日本の学生たちは世界平和の構築を教育の視点、またコミュニケーションから始めるという発表が多くある中、アメリカの学生たちは現在自分が地域や他国で行っている平和構築へ繋がる活動について発表していました。もちろん、日本の学生たちもとてもアクティブにボランティア活動をしているという印象を受けたのですが、アメリカの学生たちは自分が主体となりプロジェクトを立ち上げ、ボランティア活動をしていて、自分もこのようなことができる人になりたいなと強く思いました。

今回のシンポジウムに参加することによって、世界平和構築への様々なアプローチの仕方を聞くことにより、自分の世界を見る視野が広がったような気がします。でも、贅沢をいえば、発表の後に生徒たち全員で話し合う時間がもう少し欲しかったです。

○　軽部美咲　　文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース２年

“国際学生フォーラムに参加して”

『グローバル社会における平和構築』。国際化が進み、様々な国の人や文化が混じり合い、歴史を共有するようになった現代社会において、これは大変重要なテーマであると思う。しかしこのようなとても広く、深いテーマについて、自分はなにを語れるのだろうか。そもそもわたしにとって、『平和』とは何なのであろうか。

多様なバックグラウンドを持つ人々と、それぞれが考える『平和』の定義、またそれを達成するために行っている活動等をシェアすることによって、『平和』の形がより具体的になるのではないかと思った。そして、自分の身近にある『平和』と向き合い、私たち自身からできる平和構築への活動を更に拡げていきたいという強い思いが生まれ、このプラグラムに応募することを決めた。

フォーラムを行ったヴァッサーカレッジの敷地はとても広く、歴史ある建物の美しさに驚き、何枚も写真を撮ってしまった。現地の学生たちもとても優しく、彼らとこれから１週間を過ごすのだと考えると楽しみでしかたなかった。

フォーラム当日、私は市民レベルでの国際交流や絆が、真の国際的な平和をもたらすことができるのだということをスピーチした。文化や歴史認識の違いから生じる問題を乗り越えて友好関係を築いていくためには、一人ひとりがそれらの問題を『国家間』の

問題としてではなく、『自分たち』の問題として捉え、正しい知識や情報に基づいて主体的に考えていく必要がある。また、それを達成するため現在進めているテレビ会議システムをつかっての、海外の大学生たちとの交流活動についても紹介した。

また、他の学生のスピーチを聞き、教科書を通しての平和、言語を通しての平和、宗教を通しての平和など、多様な面から『平和』へとアプローチできること、そしてその具体的な活動や考えを知ることができた。それによって視野がひろがり、わたしの『平和』の定義が具体的にまとまるどころが、どんどん範囲が大きいものになってしまった。しかし、それはまだ頭のなかの『平和』が抽象的であるということではない。今回得ることができた多様な考え方、活動を参考にしながら、大きな『平和』の範囲のなかで自分ができることを、柔軟性を持って進めていきたいと思う。

上記で述べたように、私は市民レベルでの国際交流や友好関係が国際平和において重要であると考えている。今回、ヴァッサーカレッジに訪問し現地の学生と一緒にニューヨークシティーに観光しにいったり、一緒にランチをしたりすることによって、友情を築くことができたと思う。今後の課題として、このフォーラムを通して得た友人を大切にし、今後も連絡を取り合い、テレビ会議の次のステップへつなげていきたいと考えている。

最後に、この素晴らしい経験の機会を与えて下さった、お茶の水女子大学の先生方、ヴァッサーカレッジの先生や学生の皆様、一緒に参加したお茶大の皆様、またこのフォーラムに関わったすべての方に感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

○　小松映里佳　　文教育学部グローバル文化学環３年

“「共に生きる」事を考えての発見と課題”

私は「共に生きる」事とは、相互依存によって成り立つ世界の現実を正確に認識し、その上で内に向きがちな日本が全体として世界に目を向けていくこと、そして問題を解決しようと実際に行動していくことだと感じています。しかし世界の現実を正確に認識する事は難しく、特に１つの国の中から推し量っても簡単に把握できるものではありません。今回のフォーラムは私にとってこの現実の認識の大きな機会となったと同時に、今後日本を世界に向けていく活動の一つになると考えています。

まず今回のスピーチ（プレゼンテーション）を通して、相手の現実認識はもちろんのこと自分の現状認識にも大きく繋がりました。相手に伝わるスピーチをしようと思っても、果たしてアメリカの大学で学生がするスピーチ構成とはどんなものなのか。大学でする英語のプレゼンテーションとも違う、日本のスピーチコンテストで行われるものともおそらく違う。相手に伝わりやすいものにしなければならないがそれがどういったものなのかわからない不安があり、相手の事を知らない自分に気付きました。そして何よりスピーチの内容を考える際に苦労しました。プレゼンテーションは伝えたい事を話すのではなく相手

が知りたいと思うことを話すものであり相手に理解してもらう事を話すものである、スピーチもまた同様だと理解していました。しかし私の伝えたいと思っていたことを話す際、聴衆にどれほどの関心があるのか、関心が全くないのならどれほどの背景説明を取り入れて話せばいいのか、全く見当がつきませんでした。この過程の中で改めて相手の事を知らない自分を認識しました。

私は直前に滞在したバングラデシュでのグラミングループとソーシャルビジネスの現状についてスピーチしたのですが、結果ノーベル賞をもらった団体だから知名度はあるのではないかという考えもはずれ、参加者には殆どその認識はありませんでした。一緒にバングラデシュに滞在していたアメリカ人の友人が「アメリカでも多くの大学生が関心を持っている」と抽象的に発言していたことから不用意に相手を推測し、勝手に期待を込めてスピーチしていたということに気付き、肝心の参加者（相手）を理解しようとしていなかったと感じます。ここから、自分の現状理解の姿勢が中途半端であったと認識するに至りました。事前にテレビ電話と Face book を通して相手側と繋がる事が出来ていたので、もっと上手に利用し関係を築けたのではないかと課題に感じています。

ヴァッサー大学の学生のスピーチを聞いて、又実際に交流してみて、特にボランティア等の海外活動をしている学生の多さに驚きました。正確な数字は確認できませんでしたが、２名以上の学生が海外活動の経験を取り入れてプレゼンテーションをしていて、交流を通した会話の中でも数名の学生が海外活動の経験について話してくれました。社会活動をすることが日本より広く浸透していると聞くことは多くありますが、今後この違いについて背景や関連事項を理解し、現状の理解を深め、事後活動のヒントにしたいと考えています。

次に、ヴァッサー大学の学生と繋がりを持てたのはもちろんの事、大学内でも学部、学年を超えて共に活動できる仲間が得られたことが非常に有意義だと感じています。フォーラムの期間中を通し、今回の経験をどう生かしていけるか自発的に話し合いを持つことが多く、参加者が非常意欲的に事後活動について考えていました。何か行動を起こそうと思ったときに仲間が必要な事は大学生活を通して強く認識したことであり、今後目標を共有してヴァッサー側の学生の力を借り行動を起こしていきたいと検討中です。特に学部が偏ることなく多様なバックグラウンドの人が集まったことで、活動の幅を限定せず広げていくことができるのではと期待しています。私個人としては冒頭で述べた、日本を（特に若者を）世界に向ける活動をしていきたいと思っています。

フォーラムを通して、やはり世界は相互依存しているという感覚を覚えました。普段は食料や製品の輸出入からくる貿易や、紛争問題の側面からからこの相互依存について感じていました。しかし、アメリカ仏教の背景について研究している学生がいるというのは新鮮であり、お互いの文化が影響し合っていることを改めて考えれば、これも相互依存の１つではと再認識しました。相互依存の現実を正確に認識する事は非常に困難でありそれが「共に生きる」事に問題を生み出す原因となっていると考えますが、小さな行動続けることで前に前に進めるとも感じています。現実認識となる貴重な経験をさせていただけたこ

と、多くの方と繋がりをもてた事を持てたことに感謝し、今後共に生きる事について考える事後活動につなげていきたいです。
　最後になりますが、内海先生をはじめ今回のフォーラムを開催するにあたって大変お世話になった先生方、駒田さんをはじめお忙しい中期間中も多くの時間を割いてご協力くださったアシスタントの先生方、温かく迎えてくださったヴァッサー大学の先生方、本当にありがとうございました。

○　薛知英　　文教育学部グローバル文化学環３年

どきどきした。何をどのように話せばよいのか、戸惑った。いざ、皆の前に立つと皆の微笑と友達からの支えが感じられた。これも、協力のひとつであり、自分にとってこぐ瞬間的な平和だとも思えた。
今回のフォーラムをきっかけに一人、考えさせられたことがある。
平和とは何か。
戦争の無い、子供が武器を持たない、争い事が無いが頭に上がってきたが、それでは平和の国に住んでいる私たちの「キレイごと」とでしかならないのではないかと思った。武器を持つ理由、戦争、争いの根っこを知らず遠い国からみて、あの国は平和である、無いを語るのは果たして正しいことなのかと。
フォーラムでの発表は、もっと個人レベルでの平和をみんなが語っていて驚いた。一個人としての平和とは何か。子供の笑いが溢れる場と言う名の教育面での平和、国際協力。個人の経験からなる精神的な平和。宗教としてのココロの平和。国際協力を行うこととしての気配りや考え。自分ひとりではどうしても考えきれない部分が大いに扱われた。とても刺激的だった。
平和・国際協力を考えながらもうひとつ考えざるを得なかったのが、言語の力であった。今回のフォーラムでは皆英語を使いプレゼンテーションをし、スピーチを読み上げた。一人ひとりの表現の違いや、しぐさ、単語の選び方で似たような話でも全然違って聞こえてきたのがもうひとつの驚きだった。私たちにとっては困難のある言語だったが、相手側が目線を合わせ、聞き耳をもちリラックスして最後まで話を聞いてくれているのが印象に残っている。この場でも、協力を感じた。お互い、自分を表し、お互いを理解しようとする姿勢。これが国際協力の第一歩だと感じる瞬間が多々あった。
今回のフォーラムは、ヴァッサー大学との交流の場でもあり、学生との休み時間の会話も、一つ一つ興味深いものだった。日本に興味を持ち、日本語を学んでいる学生と話していると、日本の文化などを、私以上に興味と知識を持っていることに感心した。私自身も留学生であるが、ヴァッサー大学で出会った学生よりも日本をそれほど知っていない気がした。ある意味、もっと、今私がいる日本を見つめ直すきっかけを作ってくれた。
日本に帰国し、一ヶ月あまりが立つが、いまだにフェイスブックを通してヴァッサー大学

で知り合った学生とは連絡を取っている。今回の東日本大震災の祭にも励ましの言葉や心配げのメッセージを沢山もらった。以外にも、日本語を学んでいる学生達で主催する今回の地震に関しての話し合いにもメールながら参加をお願いされ、メールではあるが、文章をひとつ書き渡した。このように、今回の交流プログラムは、短期的なものではなく、これからも自分の考えに刺激を与えてくれる人々を見つけることが出来たと共に、地球を半周し出会った学生とーフォーラムでの形式的なつながりではなく、もっと深い友情を持ち帰れた。
最後になるが、今回のフォーラムに参加し、とても視野が広がった気がする。このような機会があれば、ぜひ、また参加をしたいと思っている。とても楽しく、学べる一週間であった。

○　冨高美咲　生活科学部人間生活学科生活社会科学講座　２年
“フォーラムを通じで習得したもの”

今回の国際学生フォーラム「共に生きる」を通じて、とても貴重な勉強になったことと、多くの意見を吸収することがき、自分の思いも煮詰めることができました。シンポジゥム前日のスピーチ練習時でのお茶の水女子生徒などの間での意見交換から始まり、両校の教授のプレゼンテーション、そして生徒のスピーチと、濃い時間を過ごすことができました。チウ教授の話は特に胸が締め付けられるような事実を突きつけられ、色々な種類の学校に通っていて歴史を深く学んでいない私にとって、歴史を知ることの大切さを身にしみました。ただ、歴史は過去のことであり、また、感情を交えてしまうと新たな感情が生まれてしまう可能性があるため、事実を集めた世界的な資料が必要だと感じました。また、一方で、時には人を個人としてみる目も重要であることも感じました。常にその国の歴史と結びつけるのではなく、その個人を一人の人間として受け入れる態度も、「共に生きる」ためには不可欠であると思いました。
また、ヴァッサー大学の生徒のプレゼンでは、今まさに生徒が行っている平和へ繋がるグラスルーツレベルの活動の紹介であったりと、　とても具体的な話や、今まさに自分が専攻している分野からの平和へのアプローチの仕方を発表していて、多くのお茶の水女子大学の生徒のような広い視点からみた平和へのアプローチ方法とは異なっていることに気づかされました。それは自分も過去の活動のみならず現在行えるボランティア活動等を探すことと、自分の専攻からの平和へのアプローチを考えたいという思いの動機付けに繋がりました。
入江教授の話にもあったように、平和へは国々の理解と協力は必要であり、EU のような機関が、太平洋沿いの国々の間でも必要とされると思います。それには、ヨーロッパのように暗い思い出（歴史）を共有する、例えば共通の教科書を使うなど等を行って、まずはお互いを理解する重要性があげられていました。理解へのアプローチは個人単位からでも行

えることであり、多くのものや人が国境を越えて安易に移動できるようになった今では、大きな役割を持つと考えます。また、入江教授がスピーチの終わりに”I’m neither Japanese nor America. I’m Historian.” といったように、個人を国から切り離して個人として受け入れる姿勢も重要であるとインターナショナルスクールに通った経験と合わせ、改めて感じました。
今回の東北大震災においても、多くの国外からの支援も寄せられており、これこそ、「共に生きる」なのではないかと感じました。他の国の災害を人ごとにはせず、困ったときには手を差し伸べ、そこに住む人々を思い、一刻も早い復帰を願うことが今行われています。特に中国からの支援は中国で暮らしていた経験があることから印象的で、隣の国でありながらも国の間でもめていたにもかかわらず、必要なときには引きずらず、視点を切り替え、支援を行う、まさにこの切り替えは国々が協力していくにあったって重要な部分をしめると感じました。なかには過去の歴史と今現在起こっていることを切り離すことの出来ない人もいて、 真の「共に生きる」とはこのような人々をも含めたキャパシティの広い、柔軟な人間性を教育や社会を通して養っていくことが一歩なのかと思いました。

○　成田矩子　文教育学部グローバル文化学環３年
“ヴァッサー大学学生フォーラム参加感想”

　今回のような派遣事業がなければ、私はアメリカへ行くことはなかったかもしれませんし、ましてやニューヨークの中心から離れた大学を訪れ、滞在するという経験は一生することがなかったと思います。2 週間という限られた時間でしたが、大学生同士で平和構築について意見を交換し合おうという時間が持てたことを、うれしく思います。
　「共に生きる」プロジェクトにおいて、私は数回のフォーラムに参加してきました。まずは東京で東京と関西の女子大学学生とで、「私たちの思う平和」について考えさせられ、次に東京と奈良において開催された、日本の女子大学学生と海外の学生とでのフォーラムでは、私たちが課題として抱える「平和でない状態」について共に考え、自分たちはアクションを起こさねばならない人間なのだと自覚をさせられました。国際関係学を学び、平和な状態を希求しようと思っていた中で、他の学生や先生方と共に考える時間が持てるということは、私にとって大変貴重なことでした。目指さなければならない「平和」というたった二文字とは、つきつめて考えてみれば何なのだろう…と、その自分なりの答えのようなものを今の私は持っているからです。選択する自由が自分の手の中にあるかどうか、それが平和であることの条件の一つだと考えています。
　ヴァッサー大学で行われた学生フォーラムもまた、「平和」をテーマとし、特に「平和構築(Peace building」」を中心にしようと試みられていたと思います。日本の学生もアメリカの学生も、多くが自分の体験をもとに平和について 10 分程度のプレゼンテーションを行うシンポジウムをメインに、いくつかのプログラムが用意されていました。

それぞれの感想について述べます。大学訪問初日には、日本語のクラスへの参加とキャンパスツアーが予定されていました。日本語のクラスを見学するということは聞いていたものの、実際のところヴァッサー大学の日本語教育や、それぞれのクラスがどんなクラスであるかということは事前に十分な情報がなく、私がどれほど日本語クラスへ貢献できたのかということはわからないままでいます。ただ、アシスタントをしてくださった平原さんを通じて、大学内の案内や、自由時間に交流の時間のあったヴァッサーの学生とはよい関係が築けたと思っています。キャンパスツアーでは、お茶の水女子大学と同程度の学生規模であるというのに施設が充実しているところにとても驚かされました。ほとんどの学生がキャンパス内で暮らし、勉強に集中することのできる環境はとても魅力的でした。

内海先生、ペイペイ先生、イリエ先生による講義は、私たち学生はまだ漠然としたものとしてとらえている平和を、自分の専門性を持って追究するとはどういうことかを示してくださるという点で、とても私たちにとって意義深く、関心を持って聞かせていただきました。

メインとなっていた学生の発表ですが、全員のバックグラウンドがはっきりとプレゼンテーションに影響しており、おもしろかった、というのは確かです。ただ同時に、全員のプレゼンテーションに対してコメントをし、ディスカッションへと繋げることがどれほど難しいかも実感させられることとなりました。まず私自身には英語力にハンデがありました。しかしそれに加えて発言のできる雰囲気や、それぞれのトピックや、背景にある学問に対して持っておくべき知識があったと思います。雰囲気という点に関しては、1 日目のファシリテーターの先生がフロアに対してもプレゼンテーターに対しても近づいてきてくださる雰囲気がありディスカッションに近づく場面もありましたが、2 日目はあっさりとしていて、一人につき質問はひとつに限られていたので淡々としたものに感じられました。

ヴァッサーの学生が忙しく、参加できなかったこともあり 2 日目のメインであったディスカッションがほぼなくなってしまったということはとても残念でした。私個人としては、ヴァッサーの学生が、実践している活動についてはさらに深いことまで聞き、意見を交換できたらと思いましたので、今後もフォーラムが継続されること、またはオンライン上などで意見交換できる場が作られることを願います。平和構築と目標を掲げても、自分の思いを主張するのみで実際に意見が交わされなければ、行動に移されることがなければ、達成されることはありません。

日本で過去行われたフォーラムと同じく、自分という身、思い一つで、初めて出会う参加者同士交流しあい、別れた後、また私は自分にとっての「平和」について考えていこう、追及していこう、と思う機会を得られたことが、私にとっては最も重要なことでした。特に、奈良でのフォーラムにて日本で一緒に活動したヴァッサーの学生と再会でき、また自分たちの未来について話ができたことは貴重なきっかけとなっています。今回は国外に出て、英語を今までよりさらに積極的に使わねばならないということで、ストレスも感じましたが、やはり次につなげようと今後も努力しようと思いました。

英語に自信のない私は事前（日本出発前）にもっと多くの人に原稿を添削してもらうことや、大学でスキルを磨くことの少ないプレゼンテーションを練習しておくなど、個人的な反省は大変多くあります。反省を生かし、今後もまた、自分の選択肢を広げるためにも、人と出会い、考えることを繰り返していきたい、そのためのチャンスは自分でつかみに行かねばならない、その準備を今後学部生活に残された時間の中ですべきなのだと派遣を終えて感じています。

○　藤岡莉子　　文教育学部言語文化学科２年

“国際学生フォーラムを終えて”

今回、ヴァッサー大学との国際学生フォーラムに参加させていただけて本当にうれしく思います。フォーラムのテーマが「国際協力と平和構築」ということだったので、私は自分自身のタンザニアでのボランティア経験を含め、これから私たちが国際協力として何をしていくのが効果的であるのかということをスピーチさせていただきました。自分なりに早くから考え、深めた内容のスピーチができたのではないかと思っています。

今回フォーラムに参加してみて、アメリカの学生のとてもアクティブなところに本当に驚かされました。私も高校時代は海外で過ごしていたのでボランティア活動などは多くやってきましたが、日本に帰ってきて大学生活が始まってからはやりたいという気持ちはあってもなかなか行動に移せずにいます。しかしヴァッサー大学の学生さんたちのプレゼンテーションは今自分たちが実際に行っている活動に関するものだったので、私も何か今行動に移さなくてはと強く考えさせられるものでした。また、それぞれの専門分野に基づいて国際協力として自分たちがなにができるのかというプレゼンテーションもとても興味深いものでした。フォーラムに参加したときはまだ１年生で自分の専門分野も決まっていなかったので専門分野が決まっていませんでしたが、専門分野が決まったら自分の専門とする分野ではどういった形で国際協力ができるのかなど、いろいろと考えてゆきたいと思いました。また、フォーラムで普段では実際にお話を聞くことができないような方々のお話を聞けたこともとてもうれしかったです。特にペイペイ先生は涙を流しながら話していただいて、当時の状況を本当に詳しく知ることができました。

フォーラムの内容はもちろんでしたが、今年の９月から交換留学生としてヴァッサー大学へ派遣していただくことになっている私にとって、実際に大学や大学周辺を散策したり、むこうの先生方に会えたりしたことも大きかったです。同行していただいた平原さんや岡村先生に多くの方に紹介していただいて、本当に感謝しています。フォーラムに参加して向こうでやってみたいと思ったこともいくつかあったので、１年間の間アクティブに活動していきたいと思います。

○　古島真子　文教育学部グローバル文化学環２年

“国際学生フォーラムに参加して”

私は、国際協力・平和・共生にとても関心が強かったため、このフォーラムに応募しました。当日とその前後を含めこのフォーラムに参加したことで、得ることの出来たものはとても大きなものでした。お茶大の学生１０人、Vassar の学生９人、そして教授の方々というそれぞれの人が様々な角度から物事を見ているたくさんの人の意見や考え方を聞くことができ、視野が広がりました。仏教や数学など私が思いつきもしなかったテーマでスピーチをしていた人がいたこともとてもおもしろかったです。向こうの学生は実際に色々な活動をしている人が多かったこと、また高学年の人も多かったので、専門的に勉強をしている学生の話を聞けたことも刺激になりました。たくさんの人たちの発表の中でも特に強く印象に残ったのは、何人かの人が口にしていた”Building Peace through Remembering History”というセンテンスでした。歴史を正しく知ること、そして忘れないことが平和構築を目指す際非常に重要ということを今回初めて学びました。世界には、忘れてはならない出来事がたくさんあります。しかし、とりわけ権力的に強い国は自国の不利になるような歴史は消してしまおうとしてしまう傾向があります。しかしそれでは被害を受けた国はいつまでも被害者意識を持ち続けたまま、世界平和は訪れることはありません。加害者側も、被害者側も、正確な歴史を知り、認め、そしてその先に対話が必要だということを、発表を聞き強く感じました。

また、このフォーラム全体を通じて「人との繋がり」に対する感謝を感じました。私は、自身があしなが奨学金を借り、そして現在国内外のあしながの遺児学生支援運動に携わっている経験を踏まえた内容をスピーチにしました。このスピーチを作成する際、内海先生や駒田さんをはじめ、あしながの職員さん、母親と、本当にたくさんの人にお世話になりました。たくさんの人に協力してもらったおかげで向こうの学長さんや Qui 先生との関わりができたり、何度も書き直した結果、本番ではたくさんの人が真剣に話を聞いてくれ、中には涙を流してくれた人や、後で声をかけてくれた人もいて、人の暖かさを感じました。人に何かを伝えることの難しさも痛感しましたが、このスピーチで少なくとも何人かの人には何かしら伝えることができたのではないかと思い、とても嬉しかったです。また、フォーラムに参加するにあたり自分で決めていた「今まで自分だけで何となく考えていただけだったことを、こういう場に参加することでもっとしっかり核のあるものにし、アウトプットもしていけるようにしたい」という目標は、少しだけだけど達成できた気がします。しかしまだまだ、自分の考え、思いをしっかりはっきり伝えることに対する苦手意識も感じ、しっかりした意見を言うにはまず自分がしっかりした意見も持っていなければいけないので、普段からもっと物事をよく考えようと思いました。

また、伝えることの難しさと同時に自分の英語力と内容を読み取る力の低さ、知識や発言力、中身の乏しさも痛感しました。気持ちはあっても能力がついていかない悔しさと歯

痒さを感じ、全てに関してこれから上達させていきたいと思いました。

今回このフォーラムに参加できたことによって多くの新しいことを学び、吸収することができ、これからの学問に対する意欲がますます湧きました。２年生になり、希望どおりグローバル文化学環に進学することができました。今回のフォーラムは参加しただけで終わりではなく、この経験が 1st step,もしくは 2nd step として、平和構築と国際協力、共生に関する勉強、皆が幸せに過ごせる世界を作るための努力をしていきたいと思います。このフォーラムに参加させてくださって本当にありがとうございました。

４．ミルズ大学研修レポート

４－１ミルズカレッジ研修について

お茶の水女子大学グローバル協力センター客員研究員・
甲南女子大学文学部　講師　高橋　真央

2011 年 2 月 28 日～3 月 7 日までの 1 週間、お茶の水女子大学　2 名、奈良女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、同志社女子大学の各 1 名の計 6 名がお茶の水女子大学の内海成治先生と甲南女子大学の高橋の引率のもと、ミルズカレッジでの研修を受けました。

本研修は、2010 年 12 月にお茶の水女子大学で行われた国際ワークショップに招聘したミルズカレッジの Dr. Margo Okazawa Rey と参加学生の Amy Duong が中心となって企画してくださったものでした。

ミルズカレッジでは、広大なキャンパスの中で熱心に授業を受け、勉強する学生の姿勢に刺激を受けると共に、本事業のテーマである「グローバル社会における大学間の平和構築ネットワークの創成」にもとづき、ミルズカレッジの学生や教員と日米の安全保障の問題や平和構築に関する政策立案に関して意見交換を行いました。また、ミルズカレッジのご配慮により、平和構築やエスニックグループに関する講義を聴講する機会も得ることができました。

参加学生は、全て英語での議論や聴講に戸惑いながらも、グローバル社会で抱える貧困や紛争の問題、多民族多文化社会の課題について考えさせられたようです。特に積極的に活動を行うミルズカレッジの学生に触発された部分は大きかったようです。Dr. Margo の講義で取り上げられた沖縄の基地問題や平和に関して、「自分は何をすべきか」について各々が改めて問題意識を整理する必要性を感じたようでした。

本研修は、大学、専攻も異なり、出身地も異なる学生たちが「グローバル社会の平和構築」について考えるために集まり、研修に参加しました。ミルズカレッジの学生と共に世界の「女子大学で学ぶ学生」が国際社会に向けて、何をすべきかを互いに考える機会を得たことは、「平和構築」のネットワークを日本国内に、世界に広げることにつながりました。

本研修の最後に、参加学生と話し合い、スタディグループを結成し、次年度は本研修参加者を核に新たなメンバーを増やし、世界の女性による「平和構築」ネットワークを創成していく事を約束しました。学生が今回の研修で感じた事、そしてアメリカで得た仲間を糧にして、活動や勉強に役立たせてもらいたいと思います。

ミルズカレッジ研修を実施するにあたりまして、大変お世話になりましたミルズカレッジの Dr. Margo Okazawa Rey、Ms. Amy Duong に心より御礼申し上げます。

４－２　ミルズカレッジ研修レポート

○　お茶の水女子大学　文教育学部３年　西郷智香子

ミルズカレッジでの研修を通して、まず、感じたことは学生の授業に対するモチベーションが異なるのではないかということ。日本の学生は、授業中にあまり発言をしないと言われる。この研修の数週間前に、ワシントン大学の先生の集中講義を受講した。その時も、日本人は授業中静かだということを言われた。私自身も、実際にそう思う。しかし、教育体系が違う中で、どちらがいいのかということは判断できまい。講義という形ではやはり、学生は静かである。その一方で、特にお茶大は 10 数名もしくはそれ以下の授業が多いが、そういった少人数の授業、ゼミ形式の授業では発言が活発に行われている。今回、ミルズカレッジで聴講した授業が講義形式のものだったから、学生の発言の多さをより強く感じたのかもしれない。

その他、授業に関することで感じたのは一回の授業の内容量の多さ、濃さだ。Politics of Developing Nations の私たちが出席した回はグアテマラの事例についての授業だった。次回はまた別の国の事例を取り上げるようだった。授業前には小テストが行われ、学生たちもしっかりと予習してきている。学生がきちんと予習している分、授業での質疑応答が活発で端的に行われ、テンポよく進んでいたのだと思う。

Margo 先生とのミーティングの時には Nation State についての話をした。私自身、政治学の授業を受講していた時に、近代国民国家の言説に対する疑問を持っていた。それこそ、分離独立するというのは、living together ではないとさえ思う。互いに歩みより、1 つの国家を成すのは 1 つの国民といった、マイノリティを排除している姿勢にも疑問を感じていた。そういったことから、卒業研究において、各個人の意識レベルにおけるナショナル・アイデンティティについて取り上げようと考えている。共生―living together を考える、実行しようとするときに大きな障害となるのは、このような社会システム自体ではないのだろうかと感じた。Margo 先生のお話になった、沖縄の例をとってみても、日本に住む私たちでも様々な意見がある。私は、アメリカ軍の駐留は必要ないと感じている。仮想敵国として北朝鮮の名前を挙げることが多々あるが、日本の自衛隊の武力と比べると、自衛隊で十分に対処できるものである。しかし、他の人の意見は沖縄には日本の安全保障のために我慢してほしいというものだった。また、先日の東北・関東大地震の際、twitter 上で必死になって救助活動をしてくれているアメリカ軍となんくるないさ、と見ている沖縄の人、果たしてどちらを選ぶだろうか、といった内容の tweet を見かけた。アメリカ軍の駐留は沖縄だけではない。横須賀やその他の地域は果たしてどういった感情で沖縄を見ているのだろうかと、単純に疑問に思った。

そして、ミルズカレッジ研修中に多々耳にしたのが social justice である。Institute for

Civic Leadership のミーティングで質問された、最近のエジプトやチュニジアのことに関しては大きなターニングポイントになると思う。しかし、いわゆるジャスミン革命のきっかけになったのが、焼身自殺だと聞くと、なぜそこまでしなければならなかったのかということに疑問を感じざるを得ない。また、リビア、イェメン、中国などに飛び火していることに関しては、ただ単なる模倣になってしまっているのではないかという気もする。このように、どうして日本の学生が social justice よりも security を強く考えるのかについて研修中にいろいろ思案してみたが、あまりよくわからなかった。しかし、今回の地震の際に日本の人たちがとった行動が世界中で大きく取り上げられたかと思うが、規律というものがしっかりしており、社会正義が確立されているからではないのかと思うようになった。もちろん火事場泥棒のようなことも発生はしている。だが、それよりも地震後でも、棚から落ちた商品を拾いレジに並ぶ、電車の運行で混乱する中でもきちんと整列乗車をするといったような社会的な規律がしっかりしているからではないだろうかと思う。

以上のような、研修で感じたことから私は以下のようなことを提案したい。

昨年の 12 月、東京と奈良で行われたワークショップの時に、数人からトラウマについての発言があったかと思う。紛争や災害によって負ったトラウマなどの辛い経験や、様々な経験を通して出来事を見直していくというもの。各個人の人生を通しての様々な経験を、individual history/story と定義し、実感を伴った歴史・出来事のとらえ方ができればと考える。現時点で、調査対象に挙げられている東ティモールやケニアは、共通の歴史として、植民地支配からの脱却、つまり独立を果たしている。ケニアは 1963 年にイギリスから独立を達成し、東ティモールは 2002 年に国際法上、ポルトガルから独立している。この 2 つの国に関して言えば、独立を達成した時代が大きく異なっているため、単純比較では成り立たないだろう。したがって、独立を達成してからの各段階に分けて調査するのはどうだろうか。また、つい先日分離独立することが決定した南スーダンを調査対象として含めることで、独立を決定した住民本人たちの率直な意識・感情を調査の individual history/story に含ませることができるのではないだろうかと考える。ケニアに関しては、独立から 50 年近くたっていること、平均寿命がおおよそ 54 歳であることを考えると独立の当事者から話を直接ヒアリングするのは難しいだろう。しかし、ヒアリング対象者自身の history/story を聞くうえで、伝え聞いた話があればその当時の人々の感情を間接的に知ることができ、また、歴史の授業などで学んだことから、その人自身が抱いた感情を使うこともできるのではないかと考える。東ティモールにおいては、独立から約 10 年になり、住民にとっての独立の記憶が各個人において、独立による良い面、悪い面に気づき、いい具合に消化されている時期だと思う。

文面からもわかるように、あまり考えをうまくまとめることができていない。今までの living together での合宿、ワークショップ、研修を通して多くのことを学んできた。来年度からアクションに移していくなかで、私が、一番興味がある分野はやはり、各個

人の歴史や話である。国際関係でとらえれば、国と国の関係が第一かもしれないが、やはり、どの場面においても個人と個人の関係性の中での共生—living together なのだとおもうからだ。今回のミルズカレッジ研修では、国際関係、社会問題についての新たな側面を見る、考えることができ、とてもいい機会になったと思う。

○　お茶の水女子大学　文教育学部１年　森田真奈子

　ミルズ大学で３日間と短い期間ではあったが、授業の聴講や、学生や先生方との談笑などを通し、アメリカの大学をほんの一面ではあるが、肌で感じることができた。授業とミルズ大学での学生との交流などに大別して、それぞれについて感じたこととこれからに生かしていきたいことを述べてみる。

１．授業

Introduction to Ethnic Studies では master narrative について考えた。master narrative はマジョリティの視点からの物語、物事の見方とでも訳したらよいだろうか。master narrative はその社会における standard として働き、stereotype を形成する。授業では Chicano(=メキシコ系米国人の民族的誇りを表す語)をテーマに、アメリカ社会でメキシコ人がどのように扱われてきたか、すなわちどのような差別を受けてきたか、また、白人中心の視点から物事が語られる現状について採り上げていた。ある学生が「where are you from?」という問いかけは偏見を含み得るといっていたことが印象的だった。私は、大学の授業で、「どこからきたのですか？」という問いは何を表しているかということを考えるようにいわれたことがある。その時はその問いが内包しているものなど思いつかなかったが、今回彼女がそのように話しているのを聞き、日本ではおそらく無意識に発せられるその問いかけも、アメリカという多人種社会では出身地から生ずるステレオタイプを形成する問いとして意識されているのだと感じた。Media control についても扱っており、授業の最後には「Who gets to decide who are the criminals? Who are the terrorist?」と問いかけられた。報道がどの視点から行われるかということは私も非常に興味をもっており、授業後に Okazawa-Rey 先生と直接お話もできた。私も CNN ニュースをみていると、アメリカでは民主主義というものが絶対的な正義のようにとらえられていると感じており、民主主義に反する者は criminal であり terrorist であるかのように報じられていることが気にかかっていた。Okazawa 先生からも、「アメリカ人は、アメリカは世界で No.1 の国であり、正しいことを世界に対して行っていると自負している」「実際 CNN など主要な報道機関はかなり情報操作を行っており、アメリカに都合の悪いことは実はあまり報道されてない」と伺った。アメリカは人種のるつぼであるため、様々な視点から物事が語られるのが自然のように感じられるが、多様な人種や宗教

を持つ人々がいる環境では、自由や民主主義が誰にとっても幸福で普遍的な正義だと捉えられやすく、またそうした理念があってこそ多様な人々が一つの国民として集合できるのかもしれない。様々な背景をもつ人々がいる社会は、人々の多様性とは逆に、一つのわかりやすい理念が普遍的なものと信じられる可能性があるのだと感じた。

Ethnic Literature の授業では中国人の母親が登場する文学作品を扱った。特に心に残ったのは、「home-made underwear, what does it signify?」という質問に対し、「poverty」という答えが出されていたことだ。手作りの下着ときくと、私は、貧困よりはむしろ母の愛情を読み取る。日本や中国など多くのアジアの国々は、親が子に衣服を贈る習慣をもっている。残念ながらその小説において「手作りの下着」がどのような文脈で登場したのかはわからないため、それが母の愛情をあらわすとは言い切れないが、このような場面でも文化習慣の違いを感じた。そして、外国の文学やその他の様々な文章を読む際には、その国の文化や社会制度などを把握しておくことが大切であることを実感として感じた。

２．ミルズ大学での交流など

今回の研修で何より衝撃だったのは、ミルズ大学の学生の学びに対する非常に積極的な姿勢だった。授業では学生は思うことを常に発言し、授業外でも自主的な勉強会が頻繁に行われていた。日本の多くの大学では、学生は考えや発想をもっていても、それを自分の中だけにとどめ、皆と共有しようとしないことは本当にもったいないことだと思った。日本人が自分の意見などを発言するのを躊躇してしまうのは、教育や文化など様々な背景があり、それを無理矢理変えることは現実的でないし、良いとも思えない。しかし、やはり学問に励む上では、お互いの考えを交わし高め合っていく環境が理想的だと思わされた。ほんの一例であるが、私は中学高校をカナダの修道会が母体のカトリックミッションスクールに通い、欧米風の雰囲気の中で過ごした。そうした学校であったためか、生徒が意見を発言することを躊躇することは少なく、「分かち合い」という各々が感じたことを率直に言い合うという時間も設けられていた。在学中はそれが当たり前のことと思っていたが、大学に入って学生があまりに意見をいわないことに驚いた。今回の研修では他のメンバーの皆さんも、もっと積極的に発信したいといわれていたが、私は各々が自由に発信する環境での経験をほんの少しでも持っているため、それを生かさなければと痛感した。大学の授業で発言したりするのは難しいかもしれないが、少なくとも今後今回の研修のメンバーで集まるときには、それぞれが積極的に発言し、意見を共有することで、新しい発想をうみだしていければと強く思う。

今後やりたい活動については、私は今回が初めての参加だったこともあり具体的な提案がなかなか思いつかないが、上記したようにお互いの意見を交わし共有することを実現する勉強会を地道に続けていくことが大事だと思う。今回も振り返ってみると、聴講さ

せていただいた授業も受けたきりで、授業後メンバー同士でディスカッションなどを行わなかったことはとてももったいないことをしてしまったと反省している。それぞれが意見を発信し合い、いくつかの大学が集まれる機会を存分に生かせるような勉強会を行う中で、実践的なアイディアを生み出していければと考えている。

○　奈良女子大学 文学部２回　堀内しきぶ

１．８日間のミルズ研修で感じたこと、考えたこと

今回の研修で学んだこと、感じたことはそれぞれの場面で本当に数え切れないほどあり、ここにまとめるには明らかに多すぎたり、言葉にできなかったりするので、私の頭の中で形になったものをまずまとめることにする。研修後半月がたち、消化できたこともあればまだできていないこともある。この８日間についてはこれからもずっと消化し続けたい。

この研修を通じて考えたことの中で、まず一つ言えることは、『「相手を理解する」という姿勢だけでは物事は前進しない。「相互に歩み寄る」という段階を踏まなければ、相手を理解することができない』ということだ。これは研修中、さまざまな場面で考えさせられた。日本の中でいえば、たとえば公立の小学校に通っていなければ、お金がなくて高校や大学に行けない子供と仲良くして生活を知るというような機会は少なくなるだろうし、私も今、福島の原発で復旧作業にあたっている方の家族がどういう思いで暮らしているか知らない。沖縄で米軍基地問題をめぐって苦しんでいる人の思いも推測するしかない。しかし自分が一方的に理解しようとするだけではなく、相手方にも自分側の立場や考え方を聞き、理解しようとする姿勢を持ってもらうことまで踏み込まなければ、根本的な解決にはならないと実感した。

もう一つ感じたのは、特に Okazawa 先生による沖縄についての presentation のときに強く感じたことだが、私（たち）が何かすることによって、女性をめぐる環境は本当に向上するのだろうか、しわ寄せの場所、形が変わっていくだけなのではないか、という無力感だった。沖縄をめぐる問題についていえば、基地が移転しても今度は移転先の住民が苦しむことになるし、たとえ基地が日本からなくなっても、米国と日本の関係の問題はどこかに形を変えて表れることになるのではないか、ならば何もしないほうがマシなのではないか、と考えさせられた。

帰国してからもこのことについて考えたが、「何もしない」と思って生活していても、生きている以上良い面、悪い面含め周囲に影響を与えずにいることはできないことに気づいた。それならばせめて、なにかを良くしようとか、仲良く生きようとか考えて生きたほうが充実した人生になるはずだ。これらの考えたことを今後の活動に生かしていきたい。

アメリカという国は日本とは全く違う文化を持つ国で、アメリカの中の多様性にカルチャーショックを受けたのはもちろんだが、一緒に行った学生の持つ考え方やものの見方からも学ぶことが多かった。視野を広げる、新しい視点を得る、といって海外に留学した友人たちもいて、それももちろん重要だと思うが、日本の中にも知る余地が多くあるように感じる。

２．東日本・関東大震災後に今後の活動について考えたこと

３月 11 日からの震災で、多くの人が犠牲になり、また多くの人が被災者を支援しようと立ち上がっている。ミルズの友人からも、日本のためになにかできることはないか考えていると連絡が来た。個人と個人のつながりが国際協力には重要なことであると感じた。

一方、例えば中国と日本の関係を取り上げれば、私は中国人の友人と話すと楽しいし、三国志や水滸伝が好きとか、遺跡が好きとか、個人のレベルでは中国のことが好きな人は多くいるのに、国と国のレベルになると尖閣諸島の問題等が発生したりする。人と人が集まった集団が、国というものになるとなにか得体の知れないものになってしまうのは何だか恐ろしく、不思議で、残念なことに思う。国とは何なのか、考えていきたい。

震災後、私は茨城の避難所（学生で自主的に作ったもの）で数日間過ごしていた友人を東京まで迎えに行き、一週間ほど一緒に奈良で過ごした。友人は「茨城ではジュースやお菓子は手に入っても、水と、ご飯になるような食べ物がなかった。地面が揺れること自体が本当に怖い。」と言っていた。友人は元気そうに見えたが、普段より辛辣な言葉遣いだったりと、疲れが出ていることが感じられた。

平和な心から平和な関係性が生まれると思っていたが、平和な関係性から自分自身の心の平和が得られると知った。個々の努力から平和がはじまると思っていたが、個人個人に責任を押し付けることはできないと痛感した。

また私が以前から関心を持っていた生理用品についても被災地や東京で不足する（写真１、２）など問題が発生しており、途上国での現状を調査したいと感じた。

３．今後の具体的な活動について

大学間での情報を共有するため、12 月に話し合って決まったように Living together project のブログを立ち上げ、活動を進めていく必要がある。

他の大学では決まったメンバーが継続して参加していることが多いが、奈良女子大学ではその度に違う学生が参加することが多く、情報やモチベーションを共有できていないのが現状である。４月からは、大学内で定期的な会合を持つことに決まった。

奈良女子大学では Table for 2 を学生生協と国際協力サークル HUA と Living together project の共同で進めており、現在値段設定やメニューを詰めているところである。理解を深めるためのチラシをプレートにのせ、その上に料理を出す（ファーストフード店

でよくあるような）ようにできたらいいと考えている。
　また、東日本の震災への継続的な支援のための話し合いを進める必要がある。

（写真１）

東京都小平市　コープとうきょう小川西町店　2011/3/14　19:35

（写真２）

奈良県奈良市　サンドラッグ奈良店 2011/3/18 18:40

○　神戸女学院大学　文学部総合文化学科１回生　平尾藍

１．はじめに

　まず冒頭で述べておきたいことは、今回のアメリカ研修は、「共に生きる」勉強会の研修の一環であるが、平和構築のために女子大生が出来ることについて、綿密なディスカッションをすることが目的ではないということだ。まずこの平和構築プロジェクトを遂行するに当たって、私たちがお互いを知るという段階を踏んでいなければ、「女子大生のネットワークを活かすことは出来ないからである。だから、今回の研修では、目に見える大きな実績があったとは、正直言い難い。しかし、今

後プロジェクトを推進していく上での、重要なステップであったと言えるだろう。

２．研修で感じたこと

実は、今回の研修が私にとって初めての海外であった。神戸女学院大学が私を今回の研修に選出した理由は、英語の試験 TOEFL のスコアである。しかし、英語試験のスコアが高得点であることは、実践的な英語のレベルが高いことと同等ではない。つまり、私は英語を上手く話すことは出来ない。きっと言葉の壁を実感するに違いない、そう思いながらの渡米であった。結論から言うと、私は言葉の壁を揚々と乗り越えたのである。そもそも「壁」というものは、正確に表現すると「柵」なのかもしれないと思う。言葉と言葉の狭間にあるものは、分厚くて強固な「壁」ではなく、軽く跳躍すれば、誰でも容易に超えることが出来るのである。「壁」は、小心の私が創りだした妄想の産物にすぎないのである。2010 年 12 月に行われた、東京での勉強会に参加していたミルズ大学のエイミーは、我々を温かく歓迎してくれた。たどたどしくはあるものの、私の英語は「通じる」。同じ内容でミルズ大学の学生と盛り上がることも出来た。ある程度のその他言語に関する知識と身ぶり手ぶり（＝軽い跳躍）があれば、他言語での意思疎通は難しいことではないのである（＝「柵」は低い）。しかし、その「柵」の向こう側で、「柵」の内側の人々と対等に自己を表現することは別問題なのである。

私が今回の研修で一番悔恨の情に駆られるのは、ある一言である。研修２日目の夜、学生と大学スタッフの方を交えて、討論会を兼ねた食事会が催された。そこでアメリカの学生は活発に話し合い、自分の意見を堂々と主張する。我々は圧倒され、さらに早いスピードでの討論についていくことが出来ず、戦線離脱せざるを得なかった。すると、日本人学生の意見を求められ、我々は固まった。語れるものが見つからなかった。また高橋先生や内海先生にアシストをして頂いたが、自分の意見に絶対の自信がなく、発言することを躊躇した。そうしていると、内海先生が「Japanese students are very shy.」とおっしゃった。私はどちらかと言えば社交的であると自負している。英語に自信がないから発言しなかったことで、私の性格をそう判断されたのである。そこで気付いた、「この場で喋れないということは、自己を表現出来ないということである」と。今まで、英語のことを「英語圏の人々との意思疎通のための手段」としか捉えていなかったが、今現在は「自分自身を相手に伝達するための手段」と捉えている。　　また、我々に自信を持って語れるだけの知識が乏しかったことも事実である。少なくとも今の私には、「この分野なら自信を持ってプレゼン出来る」というものがない。ある事柄に対して自分なりの意見を持つこと、そのために足るだけの知識を蓄えることの重要性を噛みしめた。

海外へ出向いて、日本を「外国」として客観視したとき、本当に「日本」がよく分かる。今回の研修で、アメリカの大学をいかに学生が動かしているかということ

を実感した。それは素晴らしいことではあるが、日本の大学と比べ優れているということではないように、私は思う。個人が重視されるアメリカと比べて、正義（自分の意見を主張する）の感覚は育ちにくくても、寛容（沈黙して相手の声を聞く）の精神は育ちやすい。我々は今所属している大学を最大限に活用して、学び、活動していくべきであると思う。

３．今後の活動について

平和構築をさまざまな国の女子大生で語り合う場合必要なのは、上記で私が述べたように、自分を発信するためのツールとしての英語ももちろんであるが、自分が自信を持って語れる分野に対して抱く意見である。では、そのために今出来ることは、語れるだけの知識と材料をかき集め、統合し、共有することである。これを実行するために、以前高橋先生がおっしゃっていた方法は有用であると思う（各大学で調査し、それを全員で共有すること、またその調査も様々な角度から、例えば地域や思想などでカテゴライズすること）。また、話し合いの場を大切にしたい。意見を交換し、刺激しあい、議論を昇華することが、具体的な行動の目的を全員が共有することにつながるからである。手段の目的化に気をつけなければならない。

最後に、今回このような研修を企画し、引率してくださった先生方に感謝致します。自分の領域の外に出て、肌で実感することが、平和構築の肝要な第一歩であると思います。

○　同志社女子大学２年　佐々木安奈

ミルズカレッジでの研修を終えた今、私は「世界の中の日本」ということを強く意識するようになった。

２月 28 日～3 月 6 日までの一週間、平和構築「共に生きる」プロジェクトの一環としてカリフォルニアのミルズカレッジでの研修に参加させて頂いた。私は自分の語学力不足に加えて直前まで研修内容の詳細が分からなかったことなどから、平和構築に向けて何か行動したいと思う反面、今回の研修へ参加することがとても不安であった。

研修１日目。ミルズカレッジの Ethnic Studies の授業を聴講させてもらったが、普段自分が受けている大学の授業形態とこの大学の授業形態の大きな違いに驚いた。教員が一方的に学生に説明をする講義形式の授業が大半である日本の大学に対して、ミルズカレッジでの授業は基本的に少人数制で教員と学生双方のコミュニケーションの上で授業が進められていく。教員の発言に対してすぐに学生から質問や意見が出るというのは日本の大学ではなかなか見られない光景で、このような授業を行うためにはまず学生側に授業の予習が必須であり、さらに教員の側も相当な準備が必要であると思う。

授業には黒人やアジア系の人など様々なバックグラウンドを持つ学生が集まっており、日常的に色々な考え方・意見に触れる機会があるというのはとても羨ましく感じる。近年日本では企業の雇用問題などに関してダイバーシティー（多様性）という言葉がさかんに使われており、これを認めるべきだという声を多く耳にする。しかしアメリカは元々多種多様な人種・民族の集合体であるため異文化圏の人と接することは日常のことであって、今このような言葉が話題になるというのはやはり単一民族の日本ならではないのではないだろうか。

研修二日目。Margo 先生の沖縄の女性についてのプレゼンテ―ションを聞いた。これは沖縄に現在も残るアメリカ軍基地への反対運動を行っている女性たちの話であったが、私は沖縄に行ったことがなく、また日頃戦争について考える機会もないため第二次世界大戦後に沖縄でこのような活動を女性が行っていたことなど全く知らなかった。平和であると言われる日本にもこのように問題は存在しており、これらは私が想像していた以上に世界的にも注目されていることなのだということに気付かされた。しかし世界の国々が日本の問題について考えているのに私たち自身が自国のことを知らないということはなんとも恥ずかしいことである。自分も含め日本人は、海外で起こっていることだけでなく、自国で起こっていることにもどこか他人事という認識で無関心でいる人があまりにも多いのではないかと思う。当然のことながら世界は繋がっていて、様々な国の人々と協力しなければ平和を築くことはできない。そのため世界の国々、人々のことをより多く知らなければならないということは今までも考えてきたが、まずは自国のことをしっかり理解することが平和への第一歩ではないかと思う。

Margo 先生の授業で「Who’s nations?」という問いがなされたように、授業やその他のミルズカレッジの学生との交流を通じて、アメリカ人は日本人よりも自らのアイデンティティーを考える機会が多いように私は感じた。というより日本人にそのような問いを持つ人が少ないのかもしれない。これもやはり単一民族の日本ならではのことなのだろうか。

そしてミルズカレッジでの研修最終日は、学生による国連の活動と自らが関わってきた学生団体のプレゼンテーションを聞いた。日本にも学生団体は多数存在するがその活動は概ね予算が少なく活動の幅は限られているように感じるが、アメリカの学生団体には政府や企業の金銭的なバックアップがあり、日本と比べてその規模の大きさが印象に残った。

さらに学生のことで言うと、学内で行われている学生集会に研修中何度か参加させてもらったが、これは大体夜に行われていて、大学の敷地内にほとんどの学生が暮らしているからこそできることであり、机上の勉強以外にも仲間同士でお互いに意見を交わし、切磋琢磨し合える環境にあることがとても羨ましく思えた。学生たちは皆私たちを笑顔で迎えてくれた。これは授業中も感じたことだが、学生たちには既に異文化圏の人々に対する受け皿が備わっていて、自分と異なる意見を持った人を尊重する姿勢が学生ひと

りひとりにある。このことは多くの場面において学生たちの自発的な発言・行動を促進しているのではないかと思う。

今回の研修を通して私は「共に生きる」というセンスを持つことは大切だが、日本のこともしっかり知らない今の私にはこの考え方は思いあがりに過ぎないと感じた。日本国内で生活していると、つい視野が狭くなりがちだが、常に問題意識を持ち世界で起きている問題を積極的に知ろうとすること、そして問題を知った上で考え、自分なりの意見を持つということが大切であると思う。

しかし、いくら語れることがあってもそれを相手に伝えるツールがなければ何にもならないというのも確かである。世界の様々な人々と意見を交わすためにはやはり英語は必要不可欠であるということも今回の研修で痛感した。語れることを持つための勉強とそれを伝えるためのツールを得るための勉強、この両方をバランスよく進めていかなければならない。そのための一つの方法として私は今後国内の学生同士のディスカッション・プレゼンテ―ションも英語で行うことを提案する。

これからグローバル社会で生きていく私たちは、自分の立場を客観的に捉え、「世界の中の日本」という視点を持つことが大事なのではないだろうか。世界には多種多様な人々がいて、自分と同じ考え方でないことが普通であるということを今まで頭ではわかっていたが、それを実体験として感じられたのが今回の研修であった。

開発途上国への支援もその方法は様々であり、問題に取り組む際にはより多くの違った考え方を持った人が集まって、それぞれの良い面を生かして共に活動することが大事だと思う。国際問題の解決には様々な角度から問題を見て考える必要があり、世界の皆で協力して知恵を出し合えばそれは必ず解決の道へと繋がる。

今回の研修は一週間という短い期間ではあったが、多くのことを学び感じることができた。またそれと同時に自分自身の今後の具体的な課題も見えてきて、この研修に参加して本当に良かったと思う。

引率の内海先生・高橋先生をはじめ、ミルズカレッジの Margo 先生、Amy、一緒に研修に参加したメンバーに心から感謝の意を表する。

○　甲南女子大学　文学部２年　石田まり

１．ミルズ研修を通して感じたこと・考えたこと

この研修で、日本とアメリカの大学、また日本の学生とアメリカの学生の違いを実感しました。

アメリカの大学は、とにかく広くて大きいと感じました。UC バークレー校にも見学に行きましたが、大学の敷地がとても広く、大学自体が街のようでした。

そして、アメリカの大学で学んでいる学生は人種が多様で、日本の大学では考えられな

い光景でした。肌の色、髪の毛の色、目の色が違うだけではなく、ファッションも個性豊かで、誰一人として同じ格好をしていないので、「自分」を持っている学生が多いという印象を受けました。
授業中に、学生が先生に質問や発言をすること、逆に先生が学生に質問をして学生が発言をすることは、日本ではあまりありません。アメリカ人の学生は、先生が質問するとすぐに、何人もの学生が手を挙げ、自分に自身を持って堂々と意見を発言したり、質問したりしている様子を見て、日本の学生とアメリカの学生の違いを感じました。
日本では受け身の授業が多いので、それも原因のひとつなのかもしれませんが、日本人、私自身もアメリカの学生のように自分の意見を恐れずに発言する姿勢を見習わなければならないと改めて考えさせられました。
　また、アメリカの大学では学生たちの活動が盛んであると感じました。
お昼休みには、カフェテリアの周りでゲームなどの様々なアクティビティが学生によって運営されており、夜には講演会や学生の集会などがあり、どれも参加自由です。私たちも講演会や集会に参加させていただきましたが、そこに参加している学生からは、熱心さが伝わってきました。夜に講演会などがあるというのが、寮で暮らす学生が多い、アメリカの大学ならではだと思いました。
ミルズカレッジの学生である Amy が、私たちに MUN（模擬国連）についてのプレゼンをしてくれたのですが、その際にミルズカレッジでは MUN クラブがあるということも教えてくれました。ミルズカレッジでは元々MUN クラブは無かったのですが、学生たちが大学側に MUN クラブを設立したいという強い意志と、活動計画などの説明をした結果、大学側が設立を認めてくれたそうです。学生の自主性や積極性にとても感心しました。
ミルズ研修に参加し、アメリカ人の学生の様子を見てとても刺激を受けました。

２．今後行いたい活動について
　ミルズ研修の中で、Margo 先生から沖縄についての講義をしていただいたのですが、沖縄は同じ日本という国にあるのに、日本人である私は沖縄のことに関してほとんど知らず、なんて無知なのだろうと思いました。
今後、アメリカ人や他の国々の方と意見を交換する機会がある際に、自分の国、その国の問題を知らずに発言できないことはとても恥ずかしいことだと思います。世界の問題はもちろん大切ですが、まずは日本の問題に目を向けて考えていくべきだと思います。
そして、研修に参加したメンバーとも話していたのですが、沖縄についてもより深く知りたいという思いから、沖縄の歴史や基地問題について、今後皆で研究していきたいと考えています。
実際に沖縄に行き、現地の人々にお話を伺ったり、歴史に触れることのできる場所に行ったりすることで、沖縄のことをほとんど知らない私でも、すごく身近に沖縄を感じ、

これまで以上に沖縄の問題に関心を持ち、考えることができると思います。
　また、３月１１日に起きた東日本大震災の被災者のために、この「共に生きる」メンバーで活動していきたいと思います。
この女子大ネットワークを上手く生かして、女子・女性ならではの目線で考え、一人でも多くの被災者の方に元気を出してもらうこと、また、今後長期的な支援を行っていければと思います。
　地震が発生した後、ミルズカレッジの先生や学生が心配してメールを送ってきてくださいました。せっかく、ミルズカレッジにも訪問させていただいたので、例えばミルズの学生たちから応援メッセージを寄せてもらい、それを私たちがそれを被災者の方に伝えるなどもできると思います。ツイッターで世界中の人からメッセージを寄せられているとテレビで何度か拝見しましたが、被災者の方がツイッターに登録しているとしても、ネットや携帯が使えない状況の人の方が多いと思うし、やはりツイッターを使っている人は若い人がほとんどだと思います。お年寄りにもメッセージが届いて、精神的に少しでも元気になってもらえれば嬉しいです。
　長期的な支援としては、夏休みや冬休み頃に向けてチャリティーコンサートを実施することも可能だと思います。東京も大変な状況だと思うので、関西の女子大が主体となって動いていけたらと思います。そして今後、もっと「共に生きる」のメンバーを増やしていきたいと考えています。

事業担当者、執筆者一覧

センター長　　内海成治

講師　　桑名恵（2010 年 9 月～）

センター員　　森義仁
浜野隆
石井朋子

客員研究員　　藤枝修子
スルタニ・トロスペカイ
高橋真央
桑名恵（2010 年 8 月まで）

アカデミックアシスタント　　小原五月（2010 年８月まで）
上中佐江子
駒田千晶（2010 年 8 月～）

執筆協力者　　上中佐江子、内海成治、駒田千晶、高橋真央、田中雅子、中川真帆、
野坂彩佳　＊敬称略（50 音順）、学生参加者を除く

編集　　桑名恵

特別研究経費

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
―女性の役割を見据えた知の国際連携―

平成 22（2010）年度　評価報告書

2011 年 3 月
お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112－8610　東京都文京区大塚２－１－１
TEL/FAX 03-5978-5546
E-mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

印刷：株式会社インフォテック